

くさしむべき、垣越の翁もなかりしが、あるじの徳の孤ならぬにや、鄰めく軒のこゝかしこに建ちならびたるは、よしとや見るらん、むづかしと思ふ。いさあるじの心は知らず。されど東面はもとの儘にして、わが庵とても月まつ嶺は同じながら、廣寒宮への道のりは、一町ばかりも近かるべし。こゝに一句をとゞめよと乞はるゝに、四時の多景何れをかわきていふべき。されど庵近きよしみもあれば、つれなく否びがたく、只眼前の姿をいふ。

繪の 中 に う ご く も の あ り

として、下五文字に掛け外しの自由あり。春は田にし取りとすべし。夏は早苗取り、秋は木綿取り、冬は大根引きとおきかへて見よ。一物四用にはたらきあれば、句のつたなきをいふべからずと、傳授の一語にまぎらかして、おくり物とはなせりけり。

臍頌

臍を不用の物なりとは、我もそしりし人の數なり。されば他の一寸は見えて、わが一尺は見えずとか、世に役なき物較べせんには、まづ我こそは先なるべけれ。抑かの臍は物やは食ふ、素餐の誇りもなし。さらば物やはいふ、三緘の警めにも及ばず。わが世にありて物を費すには似るべからず。人の支體に不用を論ぜば、男の乳許りこそ、如何なる益のあるとも見えねど、今更これらを取り拂はば、

腹は渾沌王の面影して、世にすけなきものなるべし。いでかの臍は頓死急症のせん方なきにも、先づとてこれに灸する時は、泉下の首途を留むるためしも多し。扱こそ腹のさしも草、只頼めともよみ給ひけん。たとへ項羽が山を抜く力も、此の垢を取れば忽ちに落つとぞ。痛悔臍をかむとは、漢文の古語にして、我が朝に人を嘲りては、臍が笑ふともいへりけり。しかるにつましき隠居ありて、臍金といふを溜められしより、天津空の鳴神も好もしがりて、いかでこれ抓まんとし給ふより、女小童の氣づかふ事は、麝香の狩人を恐るゝにもこえたり。むかし祖翁の古郷にかへりて、臍の緒に泣く年の暮と、懷舊の袖をぬらさせしは、耳も及ばじ鼻も及ばず。かれはかく風雅にも大功あれば、今は我が身を何にたとへん。されば臍はわが下に立たん事かたくとも、われも又臍の下といはんは、何とやらん場所よからず。かれに倣はんとするに、天に二つの日なく、腹に二つの臍なきためし、しかれば上下の品定めはやめて、けふより只彼をそしるまじとぞ。

友とせん臍ものいはば秋の暮

望嶽樓記

樓成れり。成りて望嶽とよぶ事はいかに。名高き富士にむかへばならし。そも此の樓の眺望東南北にひらけたれば、かの望嶽の一つならず。千里吟眸の内、田あり野あり村落あり。神社佛閣のこるも



のなく、晝に似て晝には及ぶべからず。龍興寺に龍吟じて花まづ雨を催し、猿投山の猿の手に雲なき月を攀ぐ。下戸は餅にもつく名とて、蓬が鳥に頭をめぐらせば、上戸は酒のゆかりを思ひて、麴が池に涎を流すべし。もとより主翁文章に富めれば、こゝに來り遊ぶ客、皆一時の英才にして、新詩百篇瞬くうちになり、雅談一日欠をしらす。扱や好文の花もこゝに向ひて色香を増し、天津空の徳星もここを會所とは定むるならん。玉も錦も事かくまじきを、あるじ詩歌の遊びに餘りて、狂夫に誹語の文を請へり。其の心いかにぞや。さては知んぬ、砥石を拾ひて玉を琢き、灰汁をもとめて錦を浣はんの爲か。それだにも不才なる、何を以て砥にあて、何を言ひてか灰汁に代へん。されども我賀する事あり。世に祭の棧鋪の幕毛氈に飾れども、纒かに樺花一日の榮をなすは、其の見るものの動いて過ぐればなり。此の理によれば、此の樓はたしかに松樹千年の久しきを期すべし。さるはその見るものの動かすして、しかも時しらぬ名山なればなり。しかれば主も老いをしらす、共に幾代の齡を保ち、卒には此の樓に簫を吹きて、鳳に駕して登仙せんとや。我が居も幸ひに爰に近し。もし長壽の契りあらば、木の葉衣の著替を負ひて、其の日の供にははづるべからずとぞ。

月花に配れ富士見る目の餘り

鶉衣後編下

編笠贊

迹を深山の雲にくらまし、身を蓬生の陰に隠しても、浮世より通ふ道あれば、顔しる人にも逢はでやあらん。蓬萊の島なる鬼の持ちたる寶はしらす、昔晴明が隱形の秘術を傳へて、世に編笠といふものあり。これを戴いて出づる時は、車馬紛々たる市中を歩けども、人我をしらす。まして朱雀の夕ぐれ日本堤の曉、いかなるやごとなき人かもしらす。鳥追節季候の世わたり、謠うたひよみ賣りも、其の人の果てとも見知られねば、貴賤通用の寶にして、今泰平の世の中には、妙珍きたひの兜より、其の徳遙かに優れりとせん。然れども女はかぶらず、出家には似合はず、みさぶらひみかさとよみしは此の物ならず。笠がよく似たと謳はれし清十郎が佛も、これにてはあらざりけり。もとより旅の具ならねば、順禮ぬけ参りの筆にもよごされざるを、茶屋の焼印は平大納言のしわざか。そもや印籠巾著脇差のたぐひは、世にある時に愛せられて、翠帳紅閨の内までも、腰を離れぬ寵あれども、金銀の盡くるに随ひて、つれなくも主を見放して、いづれか漂泊の落ち目に見つぎたるや。只此の物ばかり、



頼もしくも恩を忘れず、手拍編笠と諺にもいはれて、破れ紙衣の先途を見届くるにぞ、疾風勁草をしり、松の凋むにおくる、操も、此の時にいちじるし。されども異國には此の寶をもたざる故に、豫讓は顔を隠しかねて、漆をさして癩となり、伯休は藥を賣れども、女わらべに見付けられたり。たふとしや、我が朝には此のものの一蓋あらば、大隠の徳あらずとも、安く朝市に隠るべしとぞ。

編笠の俄隠者や年の市

幽霊説

鬼一口のいきほひもなく、妖物のやつしも叶はず、幽霊はそもいかなる者ぞ。其の姿を寫し繪にみれば、三角なる紙をいたつき、廣袖のゆかたに竹杖をつき、膝より下はあるもありないもあり。あら閣浮戀しやと、仔細らしきは雄幽霊なり。まうしくとよびかけたるは雌幽霊としるべし。多くは行脚の僧に近よりて、布施なしの經を頼み、或は剛なる侍を見かけて、無心をいふもたまくなり。何の用もなきにあらはれて、女童をおどしたがるは、木の葉幽霊のわざなるべし。そもや人死して幽霊の自由あらば、佛果を得ぬ亡者どもは、我もくと立ちかへり来て、訪ひ弔ひのあつらへは勿論にして、言ひ残したる巾著のこまがね、鄰の親仁の無沙汰して居る取りかへ錢のことまでを告げて、妄執の雲は拂ふべきを、あだし野の露消えぬ日もなき世の中に、幽霊の至つて稀なるは、むざとはおこ

さぬあの世の法度なるか。されば初秋の盆會には、みそ萩燈籠に座敷を飾り、かはらけ麻木の膳だてに、索麴團子の獻立を設けて、家々に招請すれば、表門より手を引きつれてはれやかに來らんも、何の遠慮があるべきに、其の佛も見及ばぬは、迎ひ火の馳走過ぎてか、はゆしと思へるにや、踊浴衣の伊達染の中へ、經かたびらを恥づるにや。そもく舟岡鳥邊野は、幽霊の名所なれども、いづくに住居の穴もみえず、はひり所を見た者もなし。しかれば幽霊を出るくといふは、世俗のとなへ誤りなり。出るといふは芝居の幽霊に限る事なりと、ある故實者の申しき。

笠もたて幽霊消ゆるしぐれかな

杉の門序

季眞は金の龜を解き、祐乘は銅の猿を彫りて酒手に宛てし風流は傳ふれども、酒屋はいつこの誰にてかありけん、いさしら雲の跡だになきを、ひとりかしこき聖の歌に、又六が名を知られたる、酒屋冥加こそ有り難けれ。さるから其の名を慕ひ繼ぎて、爰に酒屋の新見世あり。いでかの五文字のたふとさには、憎しあるじの高ぶりて、極樂の出店とも思へるならん、姿も木の端の法師にぞありける。世に此の得意を附けんとして、撰集一部を思ひ立つ事あり。只是れ酒腸の有り無しを問はず、月花の方人を求むるとぞ。さればこそ此の庵の、夕顔に鄰れども碓のおとも響かず、酒桶の一つもあらず、



壚に文君が色も飾らず、お菊と呼ぶ娘もなし。人見よや、悟れる目には七寶の臺もかやかず、菩薩の音楽も聞かざれども、杉立てる門の極樂となれば、杖頭に錢をかけて、迷ふ人は迷ひもすらん、只己身の彌陀、唯心の上戸と悟らば、賣らぬ酒屋の酒にも酔ふべしとぞ。

月花の下戸に案山子や酒ばやし

與時節庵文

尾城の西南に把茅の一廬あり。そこに住みける八龜法師、此の頃思ひ立てる事ありて、みづから其の意を説いて曰く、今世のさまをみるに、菩提に心ある程の人、家あれば必ず佛あり。我も其の道を頼まざるにはあらねど、咫尺に淨刹の多くて、朝夕數十歩を勞せずして佛に向ひまゐらせん事いと安ければ、十萬億土の遠きをしらす。まして己身の佛と聞けば、庵に佛像はなくてもあらなん。されば此のならばしの古ければ、只芭蕉翁の像一體を刻みて新たに庵の本尊とす。そも我が生涯あけくれ遊ぶ所たふとむ所、偏に蕉門の誹諧なればなり。狂言綺語もおのづから讚佛乘の因とならば、わけのほる道はかはるとも、同じ高ねの月も見ざらめや、我ももと商家に産まれて、昔は十月二十日毎に三郎殿を祭り進らせしが、今其の家を出で、世を遁れたる身に、かの御神には申すべき事なし。同じ時雨の十二日は、殊に忘るまじき祥忌なれば、ありし世の鯛の奢りをなら茶田樂の寂にかへて、これを一

年の會日と定め、同志の友を語りひて、一卷の祭をなさんとなり。願はくは尾城下に此の道の光いやましにか、けそへて、祭奠たえず取り傳ふべくば、わが此の報謝の志も長く後の世に残すべしとぞ。かの庵主がいふ所かくの如く我聞き、同調の志けにとうなづきあふまゝに、それを筆にうつしてと、庵主が請ふに任せて、記して贈る事しかり。

盆石記

盆石あり、江の島と名づく。我もと聞ける事あり。虎の怖ろしき物語し出でたるに、其の座にむかし虎に遇ひける人ありて、實に其の人のみ色を變じたりとぞ。我此の石に對し此の名を聞くに、ことに戀々としてなつかしきは、少壯の比かの島に遊ぶ事二度ありて、今も絶境の忘れがたき故ならし。そもや此の石の容をみるに、わづか尺ばかりにして峯聳え谷遶りて、裾にことさら一つの巖穴あり、これもつばら此の名のよる所なり。主人一語の記を請はる。あるは巨靈が手に壁き持ち來れるか、壺公が術に地を縮めたりなどいはんも、今は文人のいひふるしたる糟粕なり。思ふに此の地は勝概の名あるのみならず、妙音天の迹たれませし靈場なれば、ゑの島の繪にかくとも筆はえも及ばじとて、十五童子の手を勞して、かくは佛を石に削りなし、風騷の人の手に傳ふるならん。主人もとより風雅に好けり。これを文房の座右に愛すべくば、詩に和歌に誹諧に、只知んぬ、神助自らむなしからざる



事を。

波すゞし江の鳥うかぶ青疊

悼子禮文

若くて十人の友を失ひたらんも、たとへば髪ぬけたるごとく、日あらば又生ひ揃ひぬべし。かなしきかな、老いて一人の友の闕けたるは、齒の落ちたるが如く、再び生ひ出づるたのしみなし。今かく歎くは何故ぞ。久しく知れる子禮翁、此の睦月の二十日あまり身まかりぬ。此の老一たび仕官のほだしを遁れてより、殘生を風雅に寄せ、其の道の友に交はれるにも、聊か世の是非を論ぜず、かりにも人の長短をいはず、よく知る事も知らざるが如く、知らざる事に下問を恥ぢず、あり難き隱者の鑑なりと、知るとし知る人に稱嘆せられしかば、今や世の惜しめるも尋常に過ぎたり。まして同じ老いの身の恨み、一句はわづかに其のかたはしをいふのみ。

魂ばかり秋來ん鴈のうきわかれ

六十齡説

上壽は百歳、中壽は八十、下壽は六十とかや。蒲柳多病の身の、いかで六十の齡に至り、かの壽の數には列なりけん、けふは長月の四日、我が生まれたる日なりけり。世の人の賀とてもて騒ぐは此の

日なり。妹あり妻あり男女の子供あり。かれらが心には嬉しともめでたしとも思はば思ひもすらめ、只犬馬の年老いたるこそあれ。もしは彼方此方に詩を乞ひ和歌もとめなどして、世に知られ顔なる、我に於てはいと恥かし。必ず音なせそと、かねていましめてさる事せず。けにや古人の恥多しといひけん、我は愚かに知らずとも、人はかぞへても笑ふらんを。

六十てふ身やそれだけのはぢ紅葉

夜著頌

まくらといへる和訓は、いかなる故ならん。蒲團とは字義いとむづかし。よる著る故に夜著といふは、五尺の童子も義解に及ばず、媚を求めぬ自然の名にして、誹諧の正風とても、これを鑑とはいふべかりける。此の物下さまに在りては蚊屋と矛盾の中にて、鴈と燕の行きかふ如く、多くは質屋へゆき返るこそ佗しき業なれ。昔孫晨はこれをうき瀨に流してより、藁一束ねに冬を送り、我が國の聖主は、寒夜にぬがせ給へる有り難き例もあるを、空蟬のもぬけを恨みしは、以ての外の不埒といはん。鴛鴦の語らひにはとめ木をくゆらせ、旅のかりねには順禮の虱をのこす。なべては此の物冬の用にして、夏は必ず遠ざけらるゝに、我は多病の枕低きをきらへば、夏も疊みてよりかゝりとす。殊に此の君なくてはと、四時にかはらず愛する中より、聊か發明する事あり。そも世に不用の用といふ事あり



て、人に其の心のさとしがたく、莊子が喩へていへるにも、地に入用は足二本をいゝ、所なれど、其の餘を不用とて地を掘りうがちなば、二本の足も運ぶ用なからん。其の空地を全うするが不用といふものなりと、それも喩へのさる事ながら、閑ぢかく此の理を知らんとせば、今此の夜著の袖といふものを見るべし。手を通すべき用はなけれども、今不用とてこれを闕きなば、徳利子のすけなきに似るのみならず、これを左右に覆ふが故に、手を働き寝がへるにも、自由のくつろぎとなり、自らの重しとなりて、寒を防ぐの便りとなる事、鳥に翅のなくて叶はぬが如し。されど人々常に馴れてこれに心つかざるべし。さればこよひも此の夜著を引きかぶりて、蒲團より暖かならば、不用の用をさるべしと、その童子にをしへ侍る。

夢をのせて飛ぶ翅あり夜著の袖

與舍螫子文

酒よく人を浮べ酒又人を覆す。是非庵の主がもと酒に耽るや、雪月花の興にもよらず、友あるにも飲み友なきにも飲み、志學の始めより四十の此の比に至るまで、腸は只沖の石の乾く間もなき生涯なれば、昔の人に思ひなぞらへて、ある時左螫の二字を戯れ與へしが、辛巳の秋重くなやみてより後、いかなる時か來りけん、飲まぬは飲むに勝り、酔はざるは酔ふよりも面白き物をと、三十餘年の

夢忽然とさめて、さしも世のそしり人の諫めも蚊虻に聞き捨てし男の、壺を破り蓋を碎きて、雫も厭ふ下戸となりけるこそ目さむる業なりけれ。此の人の痛飲せし程、下戸は更なり、上戸仲間さへつぶやきて、かくては命も續くまじく、錢はた頓て盡きなんと、うたてき事に思ひし人々、かつ驚きかつ賞して、これを賀してやます。されば楓の青きより霜を経て染め出せるは、二月の花よりも紅に、枝柿の澀きより甘きに變れる味は蜜砂糖に勝れるを思へば、生まれながらの下戸に彌増して、もとの青きに戻るまじう、始めの澀に返るべからず。さらば其の名の螫をも捨て、今より左に餅を持し、右に煎茶を甘なひて、再び昔の醉郷には頭をめぐらすべからずと、舍螫の二字に改めて贈る事しかり。

贈不及法師文

で、むしのなまじひに家持ちて、螻蛄には羨まれ顔なるも、行く先々を負ひありく苦しさは、中なきがまさるべし。不及法師が求めえたる方丈の栖は、もとより樹下石上の身にほだされざる、借屋といふ物なりけり。落ちたる壁も雨も軒も、只家主のあつかへば、我が手に勞する事をしらず、夕顔のゆふべにあけば、朝顔の朝は捨つるに安し。況んや津梁の壮志あらば、しばし只神龍の雲待つほどの宿りにして、卒に地中の物にあらず。我知りぬ我知りぬ。

心とめぬ安さはしらじ蝸牛



濯老井賦

瓜島に分ち得て早き二月の初物を獻すといひしは、華清の温泉なり。我に事たるとよみしは、纔かに山水の滴るならん。それは至尊の遊びに愛し、これは隱者の貧閑を助く。それにあらずこれにあらず、其の二つの間に湧出せる濯老井なるものあり。これ布袋庵の名水にして、あるじはもつばら蕉門の誹諧に遊ぶ人なり。昔孝行の徳によりて養老の水流れ出づ。天はた風雅を感じて殊に此の井の生ずるにかあらん。あるじの爰に樂しむや、もとより其の名に負へる、年立ちかへる若水は更にして、夏は葛に汲みて河朔の飲の渴を消し、秋はさやけき月を浮べ、雪の夜の茶を煮るにも、氷を敲く手を勞せず、四時の幽趣、老いのまさに至るをしらず。誠に知んぬ、濯老の名の空しからざる事を。されば我聞く、一たび貪泉を飲む時は、皆千金を懷ふとぞ。しからば此の井の水を甘なふ人は、假令無風雅の腸なりとも、忽ち三石のなら茶を思ふべし。

岐 岨 賦 木曾岐岨 吉蘇 共通用

信濃は吾が尾藩に鄰り、朝もよひ岐岨の山は、即ち封疆の内に入れり。そこに好事の巴笑なるをのこありて、予が草廬に来るごとに、其の地の山川勝概を語る。語りく後後に請ふ事あり、其の所々をつらねて、賦を作れとぞ。されば木曾は、文武帝大寶二年始めて此の道を開きしより、今や西東兩

都の通路にして、予も三度の往來せしかば、いさまだふみも見ずとはいふべからず。馬籠より妻籠の宿、三留野は木曾家の舊居にて、元は御殿と書けるとぞ。野尻、須原、上松、福島は山中の一都會、則ち巴笑も爰にすめり。宮の越、藪原、風そよく楢井の里、鰲川の宿まで十餘の驛亭、各家居つぎつぎしく、大名の旅寢には本陣の幕をも翻し、荷馬の鈴の聲よる山過ぎて、今は椎の葉にもる不自由もなし。然れども此の山中に覺束なくも呼子鳥の、出女の色を置かざるは、是の聊かの傳授事にして、淫靡の風を恐れ給へる、我が邦昔よりの法令なり。されども宿の間々は深山幽谷の難所なれば、詩人は偏に蜀道の險に比し、斷腸三聲の猿を憐み、和歌には兼好法師が世を遁れしはじめ、麻ぎぬの色の淺くてはやまじとよみしも、先づ此の山中をこそ慕ひしか。誹諧猶此の地をゆかしみ、玉味噌の木曾路とは、吾が翁の置き初めし枕詞なるをや。元より朝日將軍の興りし所、今のこるもの城山あり。福島に興禪寺、宮の越の徳恩寺に各その影像を留む。元服の松、矢筈竹、硯水、兼遠の故宅、御料の森は、光盛が陣迹、樋口が谷は兼光が舊蹤、楯の小彌太は野上に生まれ、今井が城址は野尻に遺る。山中の樂師は行基の作、臨川寺の寢覺の牀は仙客の釣垂れし所、奇石怪巖人よく知れり。されども歌人の慕ふものは、掛橋、其原、御阪、風越の峯、小野の瀧はすぐれたる飛泉なるを、戸難瀬、布引にも名を争はざるは、都に遠き恨みならん。男瀧女瀧の契りは變らずも、連理の松は今名のみなり。名に



たつ煙の淺間山は、こゝに境のへだたれども、御嶽胸が嵩に不斷の雪を見せて、富士にも肩を並ぶべし。三歸りの翁の齡は死嫌ひの人に羨まれ、巴女が勇力は男勝りの高名をとゞむ。良材昔より伐れども盡きず、尾城に運びて萬家の用とす。山を出して澗川の漲る岩間を下すには、篙工の術に馴れて、曲乗り踏みかへしの自在を働く、他郷のおよぶ所にあらず。神風や伊勢の宮木は湯舟澤より奉る例とぞ。福島には關門ありて、治まる世にも備へ固く鷄の空音も許さざるは、代々山村氏の預れる守りなり。南宮諏訪明神、鎮めの明神、八幡宮、禪刹には定勝寺、長福寺、兜の觀音、岩戸の觀音、鐘の峯は相圖の古迹、根の井の峯は火ともいへり。彌生の浮石、明星が岩、釜が橋、伊奈川橋、滑川橋、櫻澤の橋はこれ岐岨と松本を分てる境なり。かかる佳境に居て風雅に遊び、三石の奈良茶をしも十石峠の名に積らば、誹諧骨張の古狐となりて、鳥居峠を越すも難からじ。正月のことぶきは木曾雜煮の風俗あり、盆の遊びには木曾踊の風流あり。牧はなけれども馬市を賑はし、巢鷹は年々尾府より尋ねて東都に獻ぜらる。椽樺の類多きが故に、器に製して近國に販ぎ、行客必ずこれを求む。産する所、干瓢、岩茸、蕎麥は殊更佳名ありて、名月前の走りを賞す。末川の蕪、風味又世に超えたり。凡ては雪深き故、春の花遅く、霜又早ければ、秋の紅葉は里に先だつ。そもく信濃は十郡、此の賦豈一國の半ばをも盡さんや。只これ木曾に屬する事を纔かに拙き筆につらぬ。

四州亭記

尾府の西に一亭あり、四州亭と名づく。さるは濃江勢の三つを兼ねて一望の内に入ればなり。其の一望に入る事は、つらなれる山々のこれを見すればなり。むかし妓を携へし東山は慕はしからず、北山はまして移文の浮名もよしなしや。主人は今猶仕官の身にしあれば、悠然として見し南山も佝ならず。おのづから此の亭のむかふ所、立ちつゞく西の山々にして、高低の容淡濃の色、よく眼を悦ばしむ。されば山を愛するに品々あり、仁者の樂しむといひけんは理窟なれば茲に論ぜず。深く吉野の奥を尋ねて、身の隠れ家を求むる者は、偏に山の世に遠き寂寞を愛する者なり。笏を拄へ簾を挑けて、雪の朝雲の夕を憐むは、山の風景を愛するものにして、必ずしも靈運が屐に煙霞を攀ちて、山の寂寞を問ふに非ず。然れば何れの賞心か勝らん。思ふに夫の三國一の名山とても、扇に喩へ煙を詠めて、只眺望の上こそめでつれ、鹿の子まだらの雪踏みわけて、富士詣とて登るなどは、必ず無風雅の人のなす事なり。山に入る人山にても猶うき時はいつち行くらんと、よみて嬾りし人もあるをや。此の亭の愛する山は、かの風景を愛するにして、寂寞を愛する山に非ず。飽きて枕に倚る時は山なく、起きて檻に倚る時は山あり。自由は名畫を卷舒するに似たり。高きかな其の趣、須彌の四州も下視すべし。已に能書の手に求めて三字を題して檐に掲ぐ、其餘狂話を予に請はる。いでや其のあるじは、



知己の舊きといふのみならず、固より同じ瓜の蔓に、茄子ならでも紫のゆかりあればや、我も其の地は能く知るよしあり、鄙陋は愧づるに堪へたるも、辭すまじき故ありて、筆に信せて記して贈れり。

六林文集序

誹諧の世に行はる事や、今は縉紳の品高きより、あやしの柴ふる人までも、此の道に遊ぶ事宜なるかな。ことしの春三韓の客東都に使用する道すがら、我が蓬左に宿りせしを、出會ひける人々扇をさし出し一筆を請ひけるに、韓人笑つて芭蕉の發句書きて與へける。そもいづこにて學びしやらん、ふりにし王仁が難波津のためし、ふた、び誹諧に立ちかへりて、今見ける珍らしさよ。かかれば花に啼く鶯も、なら茶たく小鍋やほしからん、水にすむ蛙も誹諧々々とは鳴くなるべし。しかるに世の誹人、ともかうも五七五はいふべし、只誹諧の文章は難し。風俗文選世に行はれて後、其の體を學ぶ者の間聞あるも、よくいふものは甚だ稀なり。古人の文とても其の風體一ならず。祖翁の筆を評するはいとこちたきわざなれど、潛かにこれをいふべくば、蕉翁の文は正しくして俗中に雅を失はず、譬へばやごとなき人の編笠羽織にやつして、花のものと牀几によりたれど、田樂團子に手をふれず、茶ばかり飲みてやすらひたるが如し。其の位に至らぬ人の及ぶ事やかたからん。東花坊支考が文は、はたらきて逼らず、おもしろくいひなぐりて情を深く含ませたり。たとへば諸藝に勝れたる當世男の、一座の

興に三線とりて、相の手ばかり引き捨てたるが如し。彦根の許六は、物の姿情をよくいひて、詞をかざるにおくれたれば、や、卑きに似たれども、さりとして雅趣のなきにあらず。たとへば何がしの忠右衛門など、人に顔よく見しられて、駒下駄に尺八吹きて、大道に肩いからし、あはれ傍に人なきが若しといはん。其の餘碌々たるは論に及ばず。只和漢の故事古語をしり、俗の諺にも入りわたり、其の影を用てあらはならず、長きを縮め堅きをこなして、俗ならず、雅に過ぎず、主意よく本末を貫きたるをこそ、調ひたる文章とはいはめ、誠に難からざらめやは。我が友護花關の六林子が文章、章毎に玉をつらね錦を綴れり。我常に目を驚かして三の舎を避くるに至る。他はいさ知るべからず、本州誰か其の右に出でん。されども音を知る人は稀に、魏々洋々もいたづらに、猫に小判の耳なればとて、包みて光を世にあらはさず、只獨りの樂しみとす。頃日自ら輯録して予に小序を求めらる。久しく金蘭の契りありて、辭すまじき故ながら、不才の腸何を探りてかこれに當らん。されども又思へる事あり、世に呉服を商ふ家の、縞子、緞子、紗綾、縹紗は、店に庫に滿ちくたれども、入口の暖簾には必ず木綿をこそ用るれ。其の店を尋ぬる人の、まづこれに目を留むれども、暖簾地相のよしあしはいはず。されば、我が木綿の才を以て、始めに一重の暖簾を掛けんには、などか店物の價を妨げんやと、つひに憚らず序書きて贈りぬ。



與號說 爲紺屋巴良

和歌には神とも世にしたはる、昔男の昔をきけば、芥川あかたがはのかけおちにあだ名の髪を切られ、詩賦しふに秀ひいでもろこし人は、酒屋に掛けのた、まりて、朝三暮四の焼餅やまもちさへ乏あましかりし例多し。こゝに知れや、風雅必ずしも身を修むるたすけとならず、道は外に學ぶべし。文章もとより富とみを來さず、家業かげふに思ひかふべからず。人の嘶はなしにきける事あり、そのかみ藥種やくしゆを商ふあるじの連歌に好けるありて、たまたま宗祇を招き請ひ、一座の興行こうぎやうに及びけるが、我が句の順に當りて案じ入りける時、表に人の音ねなひして、僅かに一二錢の胡椒こせうを求むる者あり。折しも店に應對おうたいの人なきを見て、我が句を惜しからず他に譲りて其の座を立ち、胡椒を商ひ遣はしけるを、宗祇見て深く感じ、世わたる人の連歌れんがにすける、かくこそあるべき事なれと、殊更に稱美ありけるとぞ。吾子ごしが誹諧はいかいに耽るとも、此のためし忘るべからず。産を破り家を汚うりて、頭陀草鞋づださうあひの先蹤せんしようをよき事としてこれをしたはば、傾城買けいせいかひも博奕打はくあひうちも同じつらなる誹諧はいかいなるべし。或はまた身持よく家榮いへえば、見る者ごとものごとに必ずいはん、誹諧はいかいはめでたき物なり、翫あそぶに妨げなしと。さらば誹諧はいかいに第一の奉公ほうこうとなりて、三神の冥慮みやうりよに叶ひ、夷大黒あまてらすも風雅を助けて、つひに誹諧はいかいの妙處めうちよにも至るべし。今や其の居に號を乞はれて、其の家の業を棄てず、藍光舎らんくわうしゃと書いて贈るも此の意あるによる。今我が贈る藍より出でて藍よりも濃き趣を得ば、世に誹諧はいかいの名も

高くあらはれて、光の一字も空しからじとぞ。

聯句并引

晝寢くわいんに槐安くわいあんへ到りしは、夢にも足のまめなる男なればならし。我が夏の蘿かづらの門をも鎖して戸出とでもせぬ物ぐさを知ればにや、あちらからこちらへ見しらぬ老僧らうそうの訪ひ來て、半日の閑談かんたんをす。いづこにすむ人ぞと問へば、近き方の穴あなにすむとしらばけいへば、根問ねどひに及ばず聯句れんくせんと筆とりて挨拶あいさつの發句を唱ふれば、妖僧あしやそう會釋かいしやくの對たいを吟うたず。や、短歌の二卷にまきに至れば、退屈たいくつの尾を見られじとや、末は又の夕と歸るを送れば夢さめぬ。跡あとに黍園きびだん子の土産みやげも見えず、只たばこの火の僅わずかかに残りり。

挨拶

- |  |   |   |  |
|--|---|---|--|
| 雖 <small>レ</small> 汲 <small>ム</small> 水 <small>ニ</small> 無 <small>レ</small> 葛 <small>ト</small> | 可 <small>レ</small> 涼 <small>ム</small> 風 <small>在</small> 蘿 <small>ニ</small>     | 庭 <small>ハ</small> 宜 <small>シ</small> 松 <small>ノ</small> 氣 <small>色</small>   | 山 <small>ハ</small> 惡 <small>シ</small> 月 <small>ノ</small> 邪 <small>魔</small>    |
| 長 <small>咄</small> 夜 <small>方</small> 冷 <small>カ</small> ナリ                                    | 大 <small>おほ</small> 跳 <small>をど</small> 盆 <small>亦</small> 過 <small>ク</small>   | 酒 <small>醒</small> メテ <small>蕪</small> 二 <small>嫁</small> 々 <small>ニ</small>  | 茶 <small>沸</small> イテ <small>饗</small> 二 <small>婆</small> 々 <small>ニ</small>   |
| 擇 <small>レ</small> 日 <small>ヲ</small> 四 <small>火</small> ノ <small>灸</small>                    | 憐 <small>レ</small> ム春 <small>ヲ</small> 萬 <small>葉</small> ノ <small>歌</small>    | 遲 <small>櫻</small> 留 <small>ニ</small> 記 <small>念</small> ヲ                    | 歸 <small>ル</small> 鴈 <small>惜</small> 二 <small>餘</small> 波 <small>ヲ</small>    |
| 借 <small>レ</small> シテ宿 <small>ヲ</small> 疑 <small>ニ</small> 弘 <small>法</small> ヲ                | 換 <small>レ</small> ヘテ題 <small>ヲ</small> 試 <small>ニ</small> 頑 <small>阿</small> ヲ | 耳 <small>言</small> 牽 <small>レ</small> イテ袖 <small>ヲ</small> 笑 <small>ヒ</small> | 口 <small>説</small> 入 <small>レ</small> ツテ <small>牀</small> ニ <small>和</small> ク |
| 截 <small>指</small> ヲ <small>女</small> 郎 <small>ノ</small> 誓                                     | 淨 <small>ス</small> ル腰 <small>祖</small> 父 <small>ノ</small> 痲                     | 移 <small>シ</small> テ敷 <small>ク</small> 殘 <small>暑</small> ノ <small>褥</small>  | 脫 <small>イ</small> テ <small>曬</small> ス有 <small>明</small> ノ <small>蓑</small>   |
| 濱 <small>市</small> 初 <small>鮭</small> 貴 <small>ク</small>                                       | 辻 <small>能</small> 油 <small>蟲</small> 多 <small>シ</small>                        | 花 <small>開</small> イテ <small>粧</small> ヒ寺 <small>院</small> ヲ                  | 柳 <small>動</small> イテ <small>彩</small> ニ <small>溪</small> 河 <small>ヲ</small>   |



後のうづら衣、寶曆より明和の末まで、半掃庵の遺稿をもてこれをうつす。

六 林 校

鶉 衣 後篇 鏡裏梅 うづら衣拾遺

節分賦

こよひは鬼のすだく夜なりとて、家々に鰯いわしの頭ひらき柀さし渡す。我が大君の國のならはし、いつくか鬼のすみかなるべき。昔の聖ひじりは衣冠して殊ことに此の夜をつゝしみ給ふところ。世をのがれたる翁おきなの火燵こたつに足さしわたし、年を惜しむの外ほかに何の辨わかへたる事もなきこそ、中々安かりけれ。今は捨てたる世にけなきわざながら、家に老いたる男おとこの、かゝめる腰こしにしほたれ袴はかまかけて、けしきばかり豆まめうちちらし、聲こゑわなゝきて鬼おにやらひたるも、昔むかし覺えてをかし。年の數かずを豆まめに拾ひろひて厄やくはら拂はらふ者ものにとらすものとして、己おのがさまゞする事ことなるに、昔むかしは膝ひざのあたりかい探たずりても其の數かずは得えたりしが、今は八疊ひちよぎの間まにもあまるばかりに成なりにたるぞ侘わびしきや。厄やくはら拂はらふ男おとこの、宵よるは町まち々々をめぐりて後あと、夜更よるくるほど聲こゑ呼よびからして此こゝのわたりへも音ねなふ事にぞありける。行く年波としなみのしげく打ちよせて、かたち見みにくう心こゝろ頑かたくなに、今は世よにいとほるゝ身みの、老おいいは外そとへと打出で出でされざるこそ、せめての幸さいひなれ。

一 えだの梅はそへすや柀うり



雪はらふ垣ねや梅の厄おとし  
梅やさく福と鬼とのへだて垣

八百坊記

二十五箇條といふものに、蕉翁の詞とて、詩歌連誹は上手にうそをつく事なりとぞ。翁は誹諧の祖師なり。詩歌連歌の人はいさ知らず、誹諧師はこれを守りて我劣らじと諷をつけども、それも翁の諷かもしらず、あるは門人の諷にもやあらん。諷は乾坤に満ちくたれば、我が口に諷はつかねども、耳にはうそを聞かぬ日もなし。そもやつれく草に、うそ聞く人の品々を云ひたれども、うそつく人の品はいはず。うそに大うそあり小うそあり。佛のうそは人を救ひ、莊子のうそは人を教へ、傾城のうそは人を迷はず。只誹諧のうそばかり、人の爲にいはず身の爲にせず、跡なき雲の郭公、名のりかけてつくうそは、人をあやまる罪なしとて、うそ八百坊の額うちて誹諧に遊ぶ人あり。實にも鼻のほどおごめきて世路にうそつく人は、我はうそならずと偽り、自らうそなりといひて誹諧する人は、それ則ちまことなれば、交はりを結ばんには頼むべき友の一つなるべし。されども龜忽の者ありて、坊と屋の字を心得違うて、茄子を大根をと求めに來らん、これは青物賣る店にあらずと、あるじの答へに不興して、さては家名にうそつきたりとつぶやかん無風雅人は、論ずるに足らざるべし。八百坊

の記を請はる。我八百の意を問はねども、そのよる所を推量して、此の一語を書きて贈る。あるじの心まことあらば、よもや此の記を捨つべからず。

自在鍵頌

世に自在鍵と呼ぶ物あり。それは爐上にかけて茶釜藥罐をつるすに、延び縮みを心に任するものとぞ。わづかに一用をなして、何ぞ其の名のみことくしきや。予別に自在鍵を得たり。これは路分のぬし、我が老衰の立居むづかしきを見て、居ながらの用をなせとて、新たに工夫してみづから造り出し、我に贈れる物にして、もとより手の巧みなる事左甚五郎が右に出つともいふべし。しかのみならず一章の文を書きて添ふ、仙才又妙にして愛すべし。予も此の頌を書かんと思ふに、義經の弓流し猿猴の手の喩へを、彼の文章に取られたれば、外に文華を飾るべき言のはもなし。抑此の物の多能なる、座右に入用の調度を搔き寄するは更なり、杖として老いを助け、棚の鼠を驅り出し、簀にすかく蜘蛛の巢を拂ふ。俯して石公が橋下の履を取り、仰いで伯獵が松の羽衣を盗むに便りあり。花は折りたし梢は高しと、心づくしの木の下に、これをもつて曳き撓めて、ほしき枝をもたやすく得べければ、まして柿を落し柚子をちぎるに、心の欲する所に隨ふ。採蓮の舟に借さば、西施が袖をぬらすに及ばず、洗濯の盥のもとには、淵明が酒臭き頭巾も懸けて干しつべし。さればたとへ八町二郎が手には短



しとて捨つるとも、物臭太郎が膝もとには、此の君なくてはとも愛しぬべし。もし此の物の世に弘まりて、彼の爐上の自在鍵、我が名を奪ひたると争論を起し訴へに及ぶとも、對決の場に臨んで能の多少をくらべんには、板倉殿の捌きにもあやまたず勝を取るべし。自在鍵々々々、世に己が名を憚る事なかれ。

發句塚序

聞くならく時節庵の社中、庵主に告げて云ふ、足下百年の後には生前得意の句を石に彫り、不朽の發句塚を築くべし、此の約必ずしもたがへじと。庵主云ふ、誠に厚情謝するに堪へたり。しかるに、たとへ劉伶が墳に酒を灑ぐとも、只徒らに蟻の穴を驚かし、徐君の塚に掛けし劍も、其の意しらぬ人は鴉威しとも見てや止みなん。汝達その志あらば、同じくば生前に其の事あれかし。さらばまのあたり見て悦び、一言の謝禮も述べなんをと。社中皆云ふ、これ只忌々しきの憚りあり、庵主其の望みあらば、もとより我が曹の願ふ所なり。さてぞ言を食まぬ寸志も見えんと、頻りに此の事を營みて、時しも春の鶯なく寶生院の傍に、さるべき地をもとめ、一基の石を建て一堆の塚成んぬとぞ。頃日庵主來り、予に此の事を語りて一句を請へり。實にかの北斗をさ、ふ黄金も、南都をほむる諸白も、身の後には何かせん。そもや生まれぬ前の襁褓定めとは、早計を警る諺にいひて、花見にと催す興は

嵐に吹きさまさされ、月みんとたくむ空は三五の十八にくの雨に妨けられて、世にあて事の違ふは多きならひなるに、只此の終焉のまうけばかり、萬に一つもたがはねば、明日の事笑ふ鬼も眞顔になりてうなづくべし。風雅に心ある人の誰か羨まざらん。年々春の草生すと白氏が歎きには事かはりて、これはめでたき例なるをと、とみに手向の一句を寄す。

我とわが塚の掃除や春の草

節分庵記

もろこしには鍾馗といふ者ありて、能く鬼を逐ふとぞ。其の容を見るに、眼を怒らし臂を攘けて、長劍をふり廻せば、實に鬼は恐れつべし。されども騒がしき其の中へは、用心ぶかき福の神は、怪我を氣づかひあぶながりて、あたりへは寄りつき給ふまじ。かしこき我が國のならはし、年々の節分にはひよわき親仁も年男と名のりて、二句の文を唱へ、豆をつかんで蒔きちらせば、鬼は外へと逃げちり、福の神は呼ぶに隨ひ煎豆の香にめで入りかはり給ふこそめでたけれ。されば爰に節分庵あり。これ常住の節分にして、來る福は日々に親しく、去る鬼は日々に疎し。されども主人は殊に酒を好みて、酒豪の名をとれば、酒の一座にては鬼とや人のいふらん、鬼とな思しそよ、赤きは酒の咎なるものを。只これ常に訪ひよりて、友とする者ことごとく上戸なるべければ、古く諺にいひ來る、下戸



と鬼とはなき世なりとは、この節分庵の事なるべしと、請はれて以てこれを記す。

與晉路辭

晉路は竹内某が男兒、二歳なる春の初めに、正月が來たらまゝくをおれもくはうといふを、よみて見れば發句なり。翁感じて脇を付けて、戯れて門人とす。

不佞少年の頃より誹諧を好み、今老境にも此の一癖はやまず。これを幽居の友とすれば、何知り得たる事もなければ、さすがに年久しきに迷ひて、人はゆかしくも思ふやらん、推敲を問ひ寄るもあれど、師弟に似たるを慙ぢ厭へば、身の薄劣を告げて固く辭し來れり。ざるを茲年六十六歳、始めて一人の門人を約することありて、名をも晉路と授く。此の弟子年二歳、火燧に背をくらべ、乳を明暮にして、いまだ奈良茶を甘なはず、もてあそぶ物は何ぞや。風車の花につらきも、起上り小法師は月に寝ぬ夜の心あるかも。さるから師に對していまだ一字の問ひをなさず、我が物ぐさを勞せざる事、深切最上の門弟、いつれの人かこれにしかん。我辭せずして約をなすは此の故なり、然れども我生先に示す事あり、故人いはずや、和歌に師なしと、況んや誹諧に於てをや。只法式はよく習ふべし、されども其の道に交はれば、法式はおのづからにも知りぬべし。法といへば理非の穿鑿なし、天下の公道にして、隨分人のしる事を専らとす。祕する法はあるべからず。しかれば世に祕事口訣とするは何ぞや。物に用捨の心得あり、或はてにをはの習ひあり、そは皆當然の理にして、我が智明らかなる時は、己と知りて無理はいはず。習ひて知るものは、只其の一事にとまりて他に働かず、我と一理を知る時は、萬端にわたりて物みな明らかなり。師は只しばらく東西を指すのみ。たとへば詩文章を學ぶ人の、祕事口訣といふ事は一つもなし。しかれども上手あり下手あり、只我が才のなす所にして、何ぞ別に祕事を貴まむ。世に祕事傳授といふものは、渡世の者の術なり。予は渡世の爲にせねば祕事口訣はならず、習はねば何をか祕せん。五倫五常は外に師あり、狐狸の輩に迷はされて誹諧に混ずべからず。明和四年朔旦冬至、半掃庵隱士示之。

寄未足齋歌

未足齋々々々、未足齋のあるじこゝろみに物問はん。そもや花にめでて春の日の足らざるか。傾く月ををしみて秋の夜の足らざるか。目に物のたらざるか。心に物のたらざるか。世にいふ長者富にあかず、蟻の如くにいそがしく、蠅のごとくにあつまるは、あるじの常に笑ふ所、茶漬に菜のたらぬ日も、酒に肴の足らぬ夜も、人に未足の名は示して、未足をもとむる心なし。君が心我しりぬ、未足は知足なる事を。未足齋のあるじなるかな。

足して見ぬ心や月の十三夜



夢二客一賦

秋の蟬猶梢の暑さをのこし、暮待つ翁の肱を曲けたる假の夢に、怪しき二客の争ひを見ける。一人は色黒くして疎なる髮針の如く、みづから崑崙先生と名のる。一人は面長に頂すこし窪かなるが、眞桑居士と稱す。共に酒臭きはいたく酔ひたるやらん。先生まづ進んで云ふ、我も居士の下に立つべくもあらぬを、今一桶の内在りて、何ぞ我より上つ方に横はれるやと。居士云ふ、我もまたいかでか先生の下とは定まらん。予はひたぶる賤しき農夫の手にのみもなれず、昔邵平が東門に作り、殊に驪山の温湯を分ちて、二月中旬の走りをも獻せしものを。いな唐土の事はしらす、山時鳥里馴る、頃は、駿河のはつなり價玉の如く、籠に盛り馬にのほりて、東都に下る勢ひを見ずや。たま／＼白瓜といふものありて、纔かに其の威を借れども、我が目には驢尾の蠅とこそ見れ。抑官人の他郷の役に倦みて、故國へ還る悦びの時を、瓜期とて殊に待たる、ものを。さらば一富士二鷹に並びて、夢の吉兆とするには何れ。我聞く昔禪僧にふみ躪られて、夢裏の蝦蟆となりて命を請ひし妖怪はいかに。「いざ我も亦聞けり。一條帝の御時に、怪しき毒を含み、晴明に占はれ行尊に祈られて、踊り狂ひし不祥こそ増りぬべけれ。」山城のこまのわたりの瓜作りと、故人の詞にも連ねしぞかし。「扱はかのわささの糟につけ置きてと、讀みける歌はしらざりけるよ。」うたてやそれは秋茄子の、椒に立ちける浮名

ならずや。「大原や田中の村の瓜作り、秋は果つともかりもりなせそと、示しける歌もありしを、見苦しく世にすさめられ、名をさへかりもりとは、平家の公達を似せけるやらん。」たゞ己が身を省みるべし。味噌に油に味ひをかざりて、寺に鳴焼の仇名こそ憎むべきを。かくいひ／＼て果てしなれば、今は翁も枕をもたけて、あなよしなし／＼、彼はかれ、これはこれ、瓜の蔓に茄子はならず、只己がさま／＼にて、何ぞ尊卑の品あらんや。不用の争ひをして、なれそこなひ味變じなば、人に疎まれ捨てられて、畠のこやしと成りや果てなん。やみね／＼と、扇を把つて席をうつこと三下。ふたつの姿たちまち消えて、夢も亦さむれば、只青丹よし奈良漬桶のみ、依然として棚本に残れり。

祭嘯花一文

この秋は毛利嘯花子が三十三回の忌に當りて、いさ、か其の魂を祭る。我少壯の日、明暮の友なりし昔を思へば、まづ身の老いぞ驚かれぬる。そも文場に交はりし其の世の人を指に折れば、それも失せこれも去つて、残る者今日こゝに打ちかたらふ只三人ばかり。木兒翁は七十を越えて猶健やかに、米布は六十に臨みてもとの姿さしもかはらず。只我のみ六七十の間にながらへて、其の數に入りながら、病み衰へさまもかへて、ありしにも似ねば、魂もし歸り來るとも、野中の清水も影迷うて、知らぬ翁とおほめきやすらん。よし只かはらぬ心の手向を尙はくは饗けよとぞ。



露は袖萩の名にあるみそ三とせ

送曉臺辭

此の秋名にしおふ更科さらしなの月みん、それより武藏野むさしのの露をも分けばやと、思ひ立てる曉臺を送る。其の行く先の信濃路には、我が知れる千丈、友梅なる男おのこあり。武藏に布袋庵ぶくろいあんの主は、殊に年來の交はりあれば、我が一言を傳へて立寄らんには、假の宿やどりをよも惜しむまじ。行きくればよし此の陰によりて、心の花のあるじとせよと、陽關の一句を筆して、別る、衽しとねにさしいれぬ。

漏らぬ宿をしへん月の旅ながら

懷舊辭

風月堂を訪ひて、むかし翁の此の家に書き残されし一軸を見て、感あるの餘り、紙筆しひつを請ひて一句をとむ。

手の跡や雪の足あと見ぬ世まで

六林むつしんいはく、風月堂は尾府本町書林なり。此の家に芭蕉翁行脚の頃立ちよられて、一句を残されし眞蹟あり。今こゝに摸寫す。

印  
書林風月と聞きしは名もやさしく覺えてしばし立寄てやすらふ程に雪の降出ければ

はせを印

いざ出む

ゆきみに

ころぶ所まで

丁卯臘月初

夕道何がしに送る

縦九寸五分許り横一尺四寸五分許りあり。今横物の一軸とす。

是れ貞享四年丁卯冬の事なり。今天明八年戊申に至つて百二年なり。

夕道は今の風月堂孫助が曾祖父にて、あら野集の作者なり。

題像文

人の見よとて携へ來たる一軸をひらけば、上に我が句の書き添へてあり。扱は此の翁は我が姿すがたを寫せるにこそありけれ。老いの手かみに鏡も捨てて久しければ、我が面かけは我忘れにたり。今は此の繪よりも劣りぬらんものをと、淺ましく且懐しく、暫見しばしとれぬる内に、傍の童の口さがなくてよみける。



金岡が馬にならば夜は出でて萩の戸棚の餅や搜さん  
いと憎けれどいかゞはせん。

更幽亭記

から衣内津の山里に、代々藥を鬻ぐ家あり。所は少陵がたづねし張氏が隱栖に似て、貧富は同じからず。夜金銀の氣は只此の家より立ちのほりて、上清童子常にはたらけば、物の不自由なる山中ならず。今のあるじ風雅にふけりて客を愛する中に、實に山間の閑寂を求むる時は、襖に風塵を隔てて名におふ手枕の茶を煮て、一室に幽趣をたのしめば、もとより深山簷に近くして、伐木の丁々たる耳さりに清かるべし。此の亭に號を呼ぶに、更幽の二字を以てす。我は老いと病にほだされて、神飛べども訪ふ事あたはず。訪ふ人あらば、此の名の虚ならざるを知るべし。

つのもじ序

むかしく蒙恬といへる人、始めて筆を造りけるより、和漢に能書の人こもく出でて、我が朝の高野大師は、五筆の名をふるひ給ふ。されば五筆のほまれは、蒙恬かつて知る所にあらず。かつその大師又四十七のいろはを造りて、和國に自由の働きをなす。しかるに今また六林出でて、その四十七字を配りて、文を綴り歌をつらぬるに自在を得て、人の目を驚かし、積りて一卷の小冊子なんぬ。こ

れまた假名を始めし大師のしろしめざる所なり。聞くななく、昔世に文字てふ物の始まりし時、かく人の智さかしくなりて、己等がかくろへて住む方なからんと、鬼の目に涙して泣きけるとぞ。それもかばかりの事とは思はざりけん。思ふにむくつけき姿は似もよらねど、もろこしの鍾馗と我が朝の六林を、鬼一口にいひて畏るべし。さらば此の一卷をたくはふ家には、鱒の頭も何かせん、柘もたのむべからず。奇なる假名妙なるかな。舞津の老隱感嘆の餘り、戯れて此の端に筆とる事しかり。

釜、賦

舞津の老農が忘年の一知己あり、誹諧に遊ぶ日はみづから名を釜月と稱す。もとより大邦に祿を得て、さばかり物のやつくしからぬを、濁りて富めるよりも清くて貧しからんこそと、高きを慕ふ心より、史雲が釜の魚を生ずるに至らざれども、弊居の板間まばらに荒れて、月もまに／＼竈に漏るの心なるか。あるは又巷の世話にいふ、月夜に釜のをかしみによるにや。さるに近き頃、市中に時雨のやどりならん、ある店先によりて郭巨が釜もからず、あやしくさ、やかなる釜ひとつ掘り出せり。これを得て大きに歡ぶ。そのさま茶人の樂しめる物ともみえず、又塵俗の世帯じみたる物にもあらず。すべて夕顔の地紋心ありけに、其の容つぶ／＼といふに及ばず、ゆかしむ人は尋ねてみるべし。もと此の人久しく茶道に遊びて、其の奥儀熟して後の今は、必ずしも茶に専らならず。さりとして思ひ捨て



たるにもあらず。うべなり、此の釜の心に叶ひて愛するや。冬籠りの爐に懸けて湯を沸し茶を煮るの外、あるは霜夜の雑炊を焚き、雪の朝に粥を煮るに、六七合の用をなせり。其の大きさこれを以て知るべし。然るに奇妙に驚くべきは、かつて釜月の名を定むる事年ありて、果して此の釜を得たるはいかに。其の名や渠を呼び出しけん、かれや此の名を兼て呼ばせけん。われが釜か釜が我が。されば世の物語に、昔俵藤太なる者龍宮に頼まれて、其の謝禮として取れども盡きぬ俵を得たり。それより俵藤太とは號せしとぞ。これを思ふに蜈蚣を射ざりし始めの姓を何と云ひけん、世に傳へず。只もとより俵藤太にして、後に俵を得たるなるべし。しからば此の釜と同じ日の談にして、釜月も釜を得て後の名なりと、世にまた誤り傳ふべし。よしそれはともあれ、此の釜のかまはぬこと。つらく思ふに、名にのみ聞けるぶんぶく茶釜とは如何なる物ぞ。字は分福とも書くやらん。或はこれらの事をもいふか。もし年を経て毛がはえたらば、茶釜で刺つて事なかるべしと、かの老の求めにあうて、筆に任せて漫りに記す。

與脇息文

應濃州内津更幽亭三止之需一

机には狭し脇息には長過ぎたり、これは我が庵の長物といはむ。用ゐることもなく側に捨て置きたるを、世にすたるものはなかりけり、三止なる男これを得させよといふ。もとよりおしまづきの惜しまずして譲り與ふ。小庵の棚を狭め、煤拂の厄介なりしを、我は内津山の鬼に瘤とられたる心地ぞする。其の事を書きて添へよといふ。筆に任せてかくのごとし。

漢和手引草序

誹諧の漢和、昔今きくもの多からず。さるはもとより俗語ながら、一向に字を知らぬ人はしにくき業にて、假令志ある人も、法式も覺束なく、かたらふ人も稀なれば、興なきが故ならし。爰に未足齋の主人此の道に遊ぶ。天斯文を助けしにや、はからずも壁の中より古き一帖を得たりとぞ。猶これに筆を加へ、こまかに料理鹽梅して、齒のなき口にも味ひ易き一卷を著して、手引草と題して初心の誹士の便とす。我はもとより一つ穴の狐、快なるかなくと、撰者の求めに任せて、序者と化けて一語を贅す。

香木記

むかし龍の繪を好ける人には、眞の龍顯はれて姿見せけるとぞ。好むに信あれば、物に感應ある事なきにあらず。我が府下に花井某、深く香の道を好みて常に樂しむ事久し。然るに其の家に古く傳へたる白あり。いたく年經るまゝに、底なども破れにたれば、今は所せき不用の物なりとて、くだきて



釜木に打交ぜけるに、ある日いみじき妙なる香の、家に満ちわたりけるを、あやしみて求むるに、かの竈に焼ける白の木なりけり。心いれて見るに、實に木のさまもよのつねならず。驚きて香の師のがりたづさへ行きてこれを問ふに、うたがはず赤梅檀に定まりぬ。名はそのまゝに花井白と呼ぶとぞ。柯亭竹の笛、焦尾の琴を得たるためしにも通ひ、邇日こゝらあつかひ草にして、めで羨む事にぞありける。されば白といふものは、賤の手にならして、その品下れるに似たれど、君見すや、ひさかたの月の中にも樂を搗くときけば、もしや其の白も此の木の類にやあらん。

白の香や月の兔は聞き知らん

百話亭辭

金人の口を緘し、物いへば唇寒しのいましめも、只いふ人の上にして、聞く者にはあづからず。さればにや耳を緘せるためしもなく、耳たぶ寒しとの句も聞かず。非禮聽く事なかれの教へは、たとへば客人の來りて非禮を語ればとて、庚申堂の猿の如く、耳をふたぎても向はるべきかは。只これ聞きは聞きながら、其のよきはとゞめあしきは捨てて、心に選びのあらんのみ。ましてよしあしの理窟を離れ、誹諧の一時の談笑に、客を愛せる百話亭には、さぞな主人の徒然もなからん。そもく世に百物語といふ事を傳へて、燈火の下にまとるして、奇怪の談をかたみに言ひもてゆき、其の數百に満つ

る時は、かならず妖物の出づるとぞ。人もし百話亭の名を聞きて、扱はかの百物語の會所かとも訝らん。さればこそ誹諧の夜會ありて、其の句數百に満つる頃ほひ、勝手口の屏風の上より、女の首ばかり忽然と見えて失せたるは、夜食の時分を窺ふならん。やがて臺所に摺小木踊り、組板動き出し、膳棚のあたりぐわら／＼として、しばらく家鳴りのけはひするは、妖物の出づるにはあらで、奈良茶の出づるなりけりと、見し人の語りしなり。此の亭に一章の文を請はれて、例の戲言を筆に任す。これも亦世のよしあしにわたらざる、百話の内ひとつに宛てんには、饒舌の咎めもあらざるべし。

贈佐屋洗耳序

をしめども限りあるものは命なりけり。佐屋の里に世にしられたる水鶏塚あり。されば四方に蕉翁を慕ふが故に、其の句を残せし地をしたひ、地をしたふが故に此の塚をしたひ、塚を慕ふがゆゑに築きし人をしたふ。其の慕はる、人は誰ぞや。此の里に久しき騷士吟山なり。むかし月空庵に其の道を學びて、生涯風雅に遊びしが、惜しむべし、丙申の冬、享年古稀に四つを添へて、卒に夜臺の客となんぬ。孝子洗耳、哀傷のあまり、遠近親疎の挽詞をつらねて、世に一帖を遺さんとす。予に小序を請はる。嗟乎我もとより不才の枵櫟、今は猶老朽ちて、花もなく葉も落ちて、聊かのことのはも綴るにたへず。たま／＼かかる求めあるも、固く辭して筆をたつ事已に年あり、今更に何をかいはん。わ



づかに一句を寄せて、且いたみ且弔ひ、且は求めに答ふる事しかり。其の蒿里の歌に曰く、  
清女が筆の跡も、たゞよのつねのさまをこそいへれ。

かなしきものことし師走の月夜かな

知雨亭後記

城北の市中におそろしき男ありけり。世々薬を鬻ぎて業とす。表には兒玉屋の暖簾を浮世の風にな  
びかせて、世わたる塵の紛々と見ゆれど、内には孤松軒の額を閑適の月に照らして筆硯に遊び、詩を  
賦し文章を綴りて、見ぬ世の人を友とす。此の樂しみ世の俗客は夢しらず。吏隠祿隱の類にして、商  
隱とこそいふべかりけり。昔伯休は身も名も隠して薬を賣らんとして、かへつて易く見知られぬ。今  
此の男は隠れずして賣る故に、其の心をよく隠る。一日我が幽栖を敲いて後、はじめて其の高致をし  
れり。そもく我は隱遁の容をまねびたれども、猶世に鄰るが故に、舊識遊人に撩されて、夙志の閑  
を得る日少なし。かれは中々世路に立ちて、人しれず閑を得る。鷺と鳥のうへを見るに、夏木立のし  
けみによれば、鳥よく隠れて鷺はあらはなり。雪のあしたに見渡せば、鷺よく隠れて鴉は紛れず。黒  
白の隠見いづれをか得たりとせん。されば我が亭のもとより知雨と號する、其の意を汲みたりとて、  
頃日例の金玉の文を列ねて我に試み問ふ。文意誠に面白く、くり返して擊節に堪へず。されども此の

二字を取る事、聊か別に微意あり。巢居知風穴居知雨の語あり。つらく我が身の上を思ふに、幸  
ひに上國世臣の家に生まれて、不肖の身のおふけなくも父祖の祿を傳へ、剩へこちたき官に承乏して  
南郭が竿を吹きしも二十とせ餘り、たとへば狐狸の人らしく化けて、よく尾を藏したるが如し。程ふ  
るまゝに、しかすがに青松葉の辱めを恐れて、みづから妖の皮を脱ぎ、魯鈍の正體を顯はし、卒に  
蓬蒿のもとに穴を營み、かく世の外に餘齡を守るなり。知雨の因縁かくの如し。今は燒鼠にも迷はじ  
とこそ思へるに、人や、穴を嗅ぎつけて、侘びたる栖も面白きやらん、今や叢に道ふみひろけて、腹  
つゞみの閑を妨げらるゝ事屢なり。されどもしか厭ふは塵客の事、孤松のあるじは同調相應するの  
火、世にいふ一つ穴の狐なれば、來んくといはんには、昆布に山椒の澀茶をまうけて、我も亦快々  
とかたらふべし。

方十園記

あるじ名づけて方十園といふ。十は十里の十にあらず、町にあらず段にもあらず、只わづかの閑地  
なり。爰に山をも築かず泉をも引かず、賤がこもりのまねびして、明暮慰むつまとはなせり。世の人  
はともいへ、有宗入道をして此の園を見せしめば、かくこそあるべけれど、手を拍つて稱嘆すべし。  
時も今安永四年閏臘月、若菜つむべき春已にちかき日、七十四翁半掃庵筆とる。



指峯堂記

年頃相知れる好事の漢あり。あらたに世わたる業をいとむとて、書坊の主となりけり。けに世に商沽のさまざまなる中に、これぞ羨ましきなりはひならし。店靜かにして秤十露盤もさわがず、常に文人雅士になづさひて、我が智のまさるたつきとなるべく、諺にさかなきものにかぞへたる、お乳の人はいさしらず、船頭馬かたのえせたるかぎりは、立ちよるべき店にはあらず。むかし孟母の借屋を選んで、街賣とていやがられしは、三錢五錢の利を争ひ、手をうち鬻る商家のうへにして、かかる類にはさしもあらし。いでや市中に栖を求むとならば、此の鄰こそ子を育つる最上の所なるべけれ。然るに、あるじ曾てある先生の門に乞ひて、號を指峯と定めけるとぞ。其の意いかならん、主もおほろおほろとして、予に此の記を書きてと求む。されば思ふに、高きを望む丈夫の志を表せるものか。猶も心の奥の海のふかき心やあらん、又は山の井の淺きやらん、いさ汲みしらぬ予にもとむる事や。かの天に張りのみといひ出でけん、安らかなるためしにもあらで、いとむづかしきなぞを造りて、予に解けといふに似たり。老懶の手に及ばすと、むづかりて固辭すれども、うけひかず。とまれかくまれ筆染めてと、ひたぶるに責められて、聊か取次のすゝろごとを書きちらして、これを記とはせよとて贈ることしかり。

送月堂記

西濃成戸の里に世々栖める人の號を求めけるま、送月堂の三字を興へぬ。猶其の記をと乞ふに、只ふかく思ひ入りたる謂れもなければ、其の事しばくにして止む事を得ず。そもく此の地景、東は朝もよひ岐岨の大河清く流れて、雨に著る美濃と尾張を分てり。西は角もじや伊勢より近江の山々まで、嶺をつらねて甚だ遠からず又近からず、只よき程に屏風をひける如し。もとより城下へだたれば、風塵の喧しきなく、常に農業の目を慰むるあり。四時の佳觀いひつくすまじく、何を揚げてか此の名とはせん。されば蛙なく臘夜、時鳥に残る有明、秋は稻葉の露に宿し、冬は霜雪に近ゆる詠め、只それ月にのみこそ遺るまじけれ。且又一字を添ふに、物みな入るといへば出づるはこもり、歸るといへば來るを兼ね、送るといはば迎ふは兼ねつべし。これを以て此の二字に定む。隈なき影を惜しむ心なり。所謂東坡が亭とは、裏合はせの鄰ならんも亦をかしからずやと、筆に任せて記とす。

歳旦の口號

舞津に久しくかくろへて棲む翁あり。年明けていくつぞと人の問ひしかば、もとより絳縣の老人のむづかしきなぞは知るべくもあらず。かたはらいたき歌よみて答へける。  
 たらで死ねといひし四十もふたり前つれく草に面目もなし



松歌 并引

金森氏桂五子の庭に、一株の松あり。此の松によりて我に一語を求めらる。そも此の求めはいかにといふに、慈母のいとけなくて始めて髪置きける年、すさびにうゑし小松の、其の人と共につゝ、がなく、幾星霜をかさねて、梢は鶴も巢くふべく、影は雨も凌ぐべく、今はなりにたりとぞ。我知りぬ、桂子の意必ずしも此の松にはあらず。只たらちめをことぶく孝情より、其の愛松に及べるならし。されば少女の琴を習ふに、かならずふき組といふ曲よりす。此のはじめの唱歌を四句にして、假名の韻をふめり。自然に叶へるものか。いと興ありて覺ゆるまゝ、これに習ひて琴曲のうたひとつ作りて、かの求めに答ふ。松に琴の縁もあればなり。

かりそめにうゑしまつ。 人と共に年ふりぬ。

たとへ松はふるくとも、 人は千代をたもたむ。

六 林 校

補 逸

布袋庵風客句集序

風雅を帯びて西東するもの、布袋庵を訪はざるはなし。訪へば句のあらざるなし。句あれば記せざるはなし。その記するもの三百餘吟、かつて一軸に満てり。さるを過ぎしその年の夏、情なき青あらし、丙丁を延ぎて池魚の災、此の冊子に及び、年來のすさび端なく一時の烏有となんぬ。惜しむべし恨むべし。あるじ深く悔み、なほ幸ひに心に記するを思ひ出で、再び連ねてこの一帖を起せり。さるも其のもとありしもの十にして、それが一つにも及ばず。されどもあるじの年未だ甚だ老いず、徳いやましに鄰ありて、これより書きつゞけば、ほどなく又棟にも充ちぬべし。序を請はれてたはぶれていふ、君見すや、青山の草一たび焼けば、後に生ふ蕨必ず茂し。されば祝融心ありて、これより句を多からしめんとて、初めの草を焼くものならん。何か悔いん。かの塞翁が馬のためしも、今年霜積みて後、さてこそとは知らるべしとぞ。

花のやどり音をのこす鳥の跡たえじ

明和歳庚寅に集むる。古稀前一年の翁也有、蘿の隠家に筆をとる。



鶉衣續篇序

山鳥の尾張の國年魚市の郡なる前津の里に、一老翁おはしき。半掃庵也有の翁とぞ申しし。さるは尾張の君に世々つかまへたてまつり、中比はやごとなき司にもものして、君の御おほえも淺からずぞありける。若きより月花に心をしめ、雪の朝をたのしみ、郭公の一聲を慕ひつるが、身に病多きを常に憂へ、はやく仕へをかへし聞えて、前津の里に世をのがれ、誹諧滑稽の文どもに心をやりつゝ、常のすさみにこゝらのものせられつれど、深く庵にかくして秘めおかれつれば、をさく世に知るもの少なかりき。おのれが生みの父なる文蘆翁は、此の翁と交はりて誹諧滑稽の文に心をよせられける。おのれがおほぢなる楚中翁と也有翁とは、うるはしき友なりければ、いよく行きかひもしけく、つねにむつましくうち語らはれける。おのれも稚き比、父の消息持ちたるすさのせにまたがりて、半掃庵に行き通ひぬ。翁天明の始めみまかられし後、くさくの文ども半掃庵および護花關六林翁のもとに残りありしが、月を經、年を經るまゝ、彼の文ども世にちりほひ出づ。さるを天明の比、大江戸なる南畝のぬし護花關にたより求めて、翁の遺稿鶉衣の前後篇は、木にゑりて世にひろめられける。されど残りの文ども猶こゝら多かりけるを、護花關みまかりて後はあともなくちりうせぬ。垂穂幼より父の



志を繼ぎて、翁の文ども残りなく見る儘に寫し、聞くまゝにかい集めおきつるが、おのれも亦老いの坂路のたのもしけなければ、おのれがみまかりし後は、さながらすたれ失せなと思ひて、こたび木にゑりて世にひろめつ。さるは、鶉衣にもれたるくさくの文ども、或は紀行の類なりけり。これを鶉衣の三かさね四かさねとして、木にゑらせつ。また翁の文に、管見草、短繩錄、古革籠、美南無壽比、野夫談、永代藏、無夜食談あり。詩集を蘿隱篇、和歌の集を蘿窗集、狂歌の集を行々子と云ふ。また誹諧の集に千句集、五百句集、蘿葉集、蟻塚集、もり桶あり。漢和聯句集二卷あり。皆翁の遺稿にして、みなおのれながらん後のかたみにもとて、たくはへおける物になん。

をばり人

文政未の歲

た り ほ

### 鶉衣續篇上

みづから文章をかき集めて、或日腹を鼓し諷うていはく、  
實にやをしといひし、夜のにしきのそれならで、これはまたきれくの、はかなきうづら衣なるは、いとど深草の、ふかくつゝむにしくはなし。  
これを開ける人やがて此の名とせし。

百六歳なる大工甚助がけづりたる箸を人の饋りければ

食はこれ、とことばに命をたもつものにして、四時其の元氣を養ふの主、箸は又食をすゝむる從者にして、常につかへ怠らず。さればこそ壽を延ぶ。こゝに或所に百六歳に成れる翁ありて、これが削りなす箸、たつとみうるはしく、珍らしくめでたき物なればとておくる人あり。これをよろこび、又百膳命長きを尊ぶは人の品によらざれば、彼の翁を賀してたはむれの言葉に、

久しくものぶる齡はきくの露はらふ千とせのしるき老樂

獻立に百六歳のはしとりてこれはめでたき世の茶めしくふ



田子庵記

こゝに田子庵と號するいはれは、此の家に愛翫せる匏貝の杯ありて、それを田子の浦と呼ぶ故なりとぞ。そはさらば難波にきこえたる浮瀨屋の出店かといふ人もありぬべし。そもや浦の名をとりて杯の名とし、又杯の名をとりて庵の名とす。かくまで物を用るたらんに、器財衣服の類ならば手數の入りて古びぬべきに、用るる度に新たなる、田子の名こそめでたけれ。思ふにそれ坡翁が亭の名も、其の時はさもありつらん、欄によりて散る花を惜しみ、簾をか、けて月待つ夕、よろこばぬ雨もあるべきに、此の庵の名のそれには似ず、いふ度聞く度にも名におふ佳境、佛にうかびて、常に雪月花の風情を添ふ。さてこそあるじ深く愛して、年立ちかへる屢蘇よりも、まづ此の物を手にふるれば、酔ひ來る初夢にも、其の名のえにしあれば、などか一富士の嘉兆をも見ずやはあるべき。あるじ一語を予に求む。其の物、其の名の來由は、かねてあるじの筆に盡せり。我が才の藻屑なる、何をか其の汀にかきよすべき。只予に酒腸の乏しくて、八仙のなかまにも入らず、これに對しても匏のいひがひなき、これのみ田子のうらみなるものを。

贈或人書

吾子今講武を以て軒號とし、句にも誹諧にも用るて名とす。あら面白からずや。吾子はもとより武

門の人なり。紙賣る者の暖簾に紙屋とし、油賣る家の看板に油屋と名のるは、買ひよる人のまがふまじき爲なれば、其の謂れあり。吾子たゞ風雅の最良なるより、武道も一つに混ぜんとす。私心のまよひといふべし。槩を横へて詩を賦するも、扇を敷きて歌よみけるも、それはそれ、これはこれにして、しかもこれを以てそれをあやまらず、それを以てこれを害せず。文武二道と稱するは、其の事跡を見て、後人これを嘆美せるなり。我と名のることは甚だ臭し。五老井が射御の辯すら、或人これを評して曰く、其の文の始めには、武士の武士臭きは鼻を掩ふと書きて、人の謗りに針をさし、武藝をあてにすべからずといひて、他の嘲りに蓋をして、さて其の末に書きたる一篇、臭きこと糞土のごとく、藝の自慢は傍若無人なり。律を知りたる僧の破戒無慙と、經學にわたりたる人の不行跡なるは、あしきを知りつゝ、あしきをなせば、世にいふ三寶の捨物にして、意見も療治も施す所なし。白藏主も口を閉ぢ扁鵲も手を袖にして、只つくさせて見るより外なし。新當流も正法念流も、もとより武士の常にして、それがこゝへ出づる事にはあらず。誰か武門に生まれて、これをたしなまざるべき。二流三流の印可免許も、此の邊にては珍らしからず。天下の名人はおのづから人も知り、世に顯はれて各別のさたなり。世に馬を見ると云ふ人あれど、山上入道の名をだにしらすとは、入道が身にとりては迷惑なる披露なるべし。昔或人歌を自讃して、この歌の心の奥はよもしろじ、定家家隆も釋迦も



達磨もと讀みたる返しに、釋迦達磨定家家隆もしらぬ歌、糞の役にもたたぬなりけりとはよみしが、其のためしも思ひ出でらる。師匠が下手ならば、弟子は師匠を越すもあるべし。たゞ我のみにほこるは遼東の豕なり。珍らしさうにかきたるにて、のこりの衆の思ひやられてと云ふ、或狂歌の下の句やつくべからん。佐々木梶原が先陣を評して、搦手數萬の油斷人、一騎も残らずわたしたれば、鎌倉にての荒言も、少しはこれにて戻りけりとは、餘りに不案内なる心得違ひなり。二騎より外渡されぬ川ならば、何しに不覺の先陣して、犬死をばすべき。後陣の續く川と見たればこそ、先登の功は立てたれ。抑 武藝十萬人に勝れたりとも、用るる所不義ならば、明智を誅せし土民の竹槍にも劣るべし。しかるに、功なり名とけて餘力あらば、仁義五常の道を學びもすべしとは、基象戲も舞謠も、同じ物と覺えたるなり。そもや五常の規矩にはづれて、何を以て其の功をなし、何を以て其の名をとけん。家を建てて後に地築せよといふが如し。功なり名遂ぐるとは、我が行ひの仕上けを云ふなり。老子は身退けといひたる、已に暮合ごろぞかし。それから仁義の學問は、隱居してからいろは習ふに異ならず。仁義五常と云ふ詞も、重言にしてくどし。外に鼓三線にのせる五常もあるかはしらねど、先づは五常のうちに仁義はありて、仁義五常といふに及ばず。願人坊主がかのえ庚申くとよびありくとおなじ事なり。我はそも誹諧は知らねど、釋迦の鼻をせ、りたる蠅が、金色の光もささず、孔子の肌著

を這ひたる蚤に道德備はる物にもあらず、勸學院の雀が蒙求を囀れども、だみたる聲を啼かぬなりけりと、鄙生立をほめたる鶯には及ぶべからず。されば其の世に生まれ合はせて、碩徳の直弟とても、必ず上手とも極めがたし。しかるに滑稽傳直指の傳を見れば、祖翁の血脈をうけて、誹諧文章の名人は我一人なりとは、すゝどし。そも又翁の方からも此の一人に渡したりとの賣上け證文のさたを聞かねば、心もとなき様なれど、誹諧は定めて上手にてやありけん。武士道は只臭くして穢しくはおほえず。泰平の代に手ぐすね引いて、楠村上が上に立たんと大言いふ人も、其の場に臨み其の事に與らざれば、ほかくと受取られず。ざるを聖賢もこり給ひて、言を以て人を擧げずとは宣へり。これを我が里にては陰辨慶とはいふなりけり。文選は誹諧の文集とこそきけ、此の一篇にやさしき言葉もをかき語もなし。我が子への意見ならば、部屋の壁にはり置くにはしかじ。何故に此の辯はありやと潛かに誇りたる人もありしぞかし。是の臭きが故に蠅のたかるが如く、人も其の非をいひだがる物なり。されば武を講ずるも兵を鍛ふも、武士には勿論と云ふ附合なれば、誹諧においていとうるさし、早々此の號を改め給ふべし。我も武門に生まれたれば、第一に先づ鼻を掩ふ。たゞしかくいふも則ち臭きやらん。さればこそ臭きもの身しらすといへば、少しの匂ひは幸し給ふべからず。

誹 席、掟



- 一 袴を取るに辭儀あるまじき事。
  - 一 夜更けて時を問ふべからざる事。
- 但し勝手の齋におどろくべからず。
- 一 世間ばなしにわやつく人は、たとひ王衍が麈尾を揮ふとも、灑團扇の居眠りには劣るべし。
- 右先達ての定めにもれたるを拾うて、庵の新制とす。飲食もとより亭主の料簡なれば、客の心得に及ぶべからず。且は言譯に似たらんも口をし。そも奈良茶にも限るべからず。なら茶の奈良茶なる心を守らば、菜めしも麥飯も則ち三石の内と知るべし。

贈人誹席、定

- 一 飯はなら茶専用なるべし。汁なきは勿論にして、奈良茶ならずば汁あるべし。
- 一 菜は一つとして魚鳥は有るに任せ、珍奇を必ず求むべからず。なき時は豆腐茄子に、精進ならぬ言譯は、鯉といふものあらざらんや。
- 一 香の物は論ずるに及ばず。
- 一 もしくは麵類の好みありとも、定規は右に准ふべし。
- 一 酒は杯に大小あれば、上戸とても二獻に限るべし。

酒に肴といふ物は、すゝまぬ酒をすゝむる助けにして、もとより宴會ならねば、しひてすゝむる道理はなし。然れば肴は不用なれども、膳に一菜の乏しければ、若しは到來殺生の物あらば、肴と名づけて一種もあらんは、亭主の心に任すべし。或は雪霜の夜風に歸路の寒さを防がんには、膳後の銚子を残り置きて、一座満尾の土において一酌をめぐらすも、亦其の時の模様によるべし。それとても、一種二杯の掬を堅く背くべからず。相撲芝居の果ては必ず喧嘩に成りやすく、誹諧の集會の飲食に流れたがるは、今世のならばしにて、其の道の歎きなるをや。されば翁のなら茶三石は、皆人の口實としながら、其のしめしを思ふ人少なし。なら茶といへば、汁一つをだに省く教へなれば、まして菜數を奢らんや。さしみの膾の壺の平のと、奈良茶の膳に竝べんは、たとへば行脚の僧の頭陀をすてて、荷馬荷持をつれたるがごとく、本姿本情にあらざることをしるべし。梅二なるをのこ、此のことを恐れて、予に誹席の掬を請ふ。道に信ある志を賞して、饌具の定めをしるして贈るものなり。

硯 鄙、文

動靜壽夭の論をなして、硯の壽は世々を計ふといへり。石の性は硬くして、もとより筆墨の類にあらず、その筈ともいふべけれど、たゞつかはるゝ身の幸によるものか。たとへば燧石となりては鐵にもまれてうち碎かれ、其の齡は月を以てかぞふべし。あるはまた挽磨と用ゐられては、おどろくし



く挽き廻され、目きりの親仁に敲かれては、これも齡はたゞ年を計へぬべし。これらは皆下さまの姥嫁につかはれて、貴介膝もとの勤めにあらず。さればかの硯は昵近のつとめにして、さてや世を以て計ふべき、己が壽をも遂ぐるなるべきをや。こゝに山田生は、致仕大夫鏡徴君の近侍にして、多年の奉公他にことに、寵遇のあまり一面の硯を賜ふ。常に拜してこれを祕藏す。予に硯の記を求むるに、此のぬしの勤むるところ、硯のつとめに似たらんには、ともに幾代の春永くつかへ奉るべき行末を賀して、筆にまかせ書きおくりぬ。

仍某求作序

其の人のために此の人の此の集編めることいかにぞや。紫の露のゆかりあるにあらず、只風月の席に交はること年あり。さるも其の齡をたくらぶるに、かれは八十宇治川もわたり過ぎ、これはこゆるぎのいそにもいまだ至らねば、いざ月見いざ雪見んと、さそふも誘ふも、おのづから物好きのたがふふしゝもあらざらんや。かれは此の爲にねぶたき月をも詠め、これは彼の爲に惜しき雪をも見捨て、さてや莫逆の遊びをなしけんは、祀輿犁來が交はりにも、厚きは勝る方にやあらん。そもや彼の老は、風雅に遊び客を愛し、縑素の友に信ありて、萬にたのみ思へる人多ければ、此の別れを惜しむ涙、墓栢も色のかはる許りになん。さるを思へば、それらも只口にいひ、心にこそいため、今此の

時に此の集を編みて、其の人の跡とふは誰ぞ。獨り此の人に止まりけること、手向の山の郭公も、雲のそなたに呼びつれて、此の信いかで其の魂に届かざるべき。

傍睨亭記 應野呂氏需一

こゝに新たに此の居いとなむと聞きしは、更に久しからねど、いざ又隈なき軒端に鳥もなじまずと思ひやりしには様かはりて、木立ものふり竹も陰ふかめて、只此の頃の様にもなきは、いかにあるじの心つくせるにかあらん。あるじは猶年若うして、身は世路に立ちながら、こゝに半日の閑を得る時は、窗に高嶺の月を招き、池に瀬川のながれを引きて、官暇麈尾の耳を洗ふ。そこに水鳥の馴れておどろかざるは、かの鷗の爲ならでも、人の心をよく知るならん。されば昔蜀山兀として阿房出づ、今田を埋んで傍睨なんぬ。百尺の樓閣八疊の座敷、足れる心の二つやはある。それは天下に猛威をふるへば、やがて楚人の手に毀たれ、これは僻地に閑寂を楽しめば、老いの行くへを養ふのみにあらず、千代まつ岩に苔を敷きてかの青氈のおもひをなさば、長く子孫を守り傳へて、こや色かへぬ幽居なるべし。たまゝ爰の門敲きける日、あるじ一筆の記を求む。されば最勝寺の額書きて後悔いけん人もありしが、我既に老いにむかへり、よし名を思ふ人ならばこそと、東籬のもと酔ひに乗じて、つひに狂語一篇をとむ。中々勝景をけがすわざにして、あはれ此の句なからましかばと、憎みおもはん



人もありぬべし。

蘭をとりてみる山の端は西にあり

一 徳辯

鞠をすかぬ人は九損ありとそしり、好く人は一徳ありと尊ぶ。あらゆる遊藝、九損はこれに限るべからず、もしは十損も知りがたし。さはいへ、いかなる不用の事にも、しひて求むれば、一徳もなきといふ事なし。つらく思ふに、人のもとめてなす業の外、天よりしからしめ、身に備はりたる業は何ぞといふに、只飲食と二便にとゞまる。然るに飲食の重きこと、聖主の國を養ひ民をめぐむといへるも、畢竟は只飲食なり。さるから奢れば法にすぎて、三條中納言の肉食には醫師もあきれて逃げ、何曾が萬錢には料理人の手も廻らず。されど二便はこれが類にてもなし。雪隠に高麗縁の疊を敷き、きんかくしに蒔繪を粧ひ、たとひおかはを梨子地にすると、いくばくの費えをかなさん。道具好きの茶人とても、南京青磁の漚紙はたづねず。しかれば出入りの違ひありて、飲食とは各別のさたり。そも又大小の二つが中に、大は人の平生に長雪隠の時をうつすも、纒かに一晝夜に一兩度に過ぎず。只小便のわづらはしき、さのみ隙はとらねども、しきりにこれを催す時は、いかなる公卿僧正も輿車にたまりかね、武者の戦場に急なる場にも、草摺をたゝみ上げて、おもはぬ敵に後をもみすべし。

ました談義芝居の中に、こらへ袋の切れかゝる時は、羣集の膝をおし分け出でて、往生の要文を聞きもらし、大事の狂言の所作を見残す。あるは下馬先に供をはずす槍持、長舟にもみ尻する女中など、これが爲に惱まざる、事世に多し。されど馬方小揚の身の上のみ、あるきながらもやり放し、清水を汗し雪にも跡をつけて、人目を恥ぢぬは論するにたらず。かくとりえなき物なれども、猶其の徳を尋ぬるに、地藏の開眼に一休の法力は、茶のみ嘶の眞偽をしらず。昔鴻門の會に、高祖はこれにかこつけて危き座敷をはずし給ひ、越王はこれをなめて會稽の恥をすゝぐ。今も世上の途中にて、いやなる人に行きあうたる時は、立ち宿るべき家もなく、逃ぐる方なき道芝の、露とこたへて消えたき時には、件の用をとゝのふふりにて、やがて溝端に後をむけて、時宜にもおよばずやり過したる。その事なくてはいかで此の難を逃れん。これを小便にも一徳ありといふべし。幼子の居びたれば、乳母の油断と叱られて、其の子の科にはならざるを、老人の取りはづしは、子にもはづかしく嫉にうとまれて、老いて再び兒とはいへど、昔の兒より大きにきたなし。さらでも老いの身の苦しき、霜近ゆる夜もすがら、深草の少將の九十九夜を一夜の心地して、見る人もなきといひけん師走の月を、あかぬ顔に詠めて折々かよふ寒さは、御衣をぬがせ給ひけん有り難き御心にも、これまでの事はおほしも寄らざるべし。あはれ今宵も風さわがし、幾度の行き交ひかせんと、寢よとの鐘に寢所整へて、例の縁ば



なにもまづ立ち出でたるに、餘所にも夜なべの身じまひにや、戸のがらくと鳴る音のしければ、一首はかうぞおもひつきける。

死にざまに念佛申さぬ人はあれどねざまに小便せぬ人ぞなき

東甫東湖兩筆の萬歳の畫贊

師の畫けるを發句として、弟子のこれに書き添へたるは則ち脇の趣あり。我も又其の鼓にはやされて、かたはらに筆をとる。これや此の第贊なりといはばいふべし。

節季候につもりし雪を萬歳のけさとくわかか春は來にけり

若菜賣序

七十二候の三つが一つを省きて、誹諧の月令あり。葦月文樵の二士、集のもやうとして予に序を請ふ。これ田鼠に羽がはえて、深草の秋に啼き、雀が踊り忘れて桑名の松かさに焼かる、など、怪しき説にはあらず、誰も見て疑はざる俗聞の有ることなり。蕉門正風の本意かくこそあらめ。乍麼生かこれ誹諧は上手にうそをつく事とは、よしや世に煩惱あれば菩提あり、うそあれば誠あり、柳はみどり花は紅の色と悟れば、すべて誹諧の種にして、糺の神に問ふもよしなし。君見すや、たとへば彼の田鼠も鶉となりて、初めて和歌によまれ、雀は蛤となりて後歌人には見限らる。それもこれも漏らさざ

るは、我が誹諧の大綱なるをや。かかる自在の手にえらまば、何ごとかならざらん。いざ見ぬ國のことはさもあらばあれ、和朝に民の時をしる。これや月令の始めなるべし。

棧集小序

我が庵に鄰せし咄々庵のぬし、名におふ蕎麥の花咲くころ、木曾の旅にとて假初に別れし袂も、ことの春に指折れば、早蕨の片手握る許りになん。かくて行く先々の事をきけば、岐岨のかり寢におもひ立ちて、そこに翁の一句をしるし、棧のあたりに一堆の塚を築き、旅客の慕ふ便りとし、それより越路の雪をふみ、奥の細道の跡までめぐりて、國々の句を拾ひ、今は武城に錫を休めしとぞ。頃日隅田の春鴈に消息をつたへ、まめなる便りに此の事を告げこしぬ。實にや釋氏の説にきく、聚沙爲佛塔、功德猶空しからずとなり。それは一時のまさなごとをさへに、まして永き世に此の跡をのこせる、祖翁の追福何ごとかこれにまさるべき。其の句どもや、頭陀に滿つれば、まづ東都の梓工をかたらひて、編集一部の口をひらくと、余に其の小序の望みあり。江戸は騷士の輻湊する所、鄰に乞ひ途に需むとも、かばかりの一語はいと安からんを、遠く老拙に此の望みを思ふに、さすがに法規の扇に泣き、漢の食を願ひしためし、旅客の情の故あるにかこち、殊には鴈の便りをよろこび、人の笑ひもこりすまに、またすゝろなる筆をとりぬ。噫我が病の膏肓に入るか。



咄々房挽歌并序

咄々房委遁は、一たび天台の教へに入り、豆腐菫蕪こんじやくの清僧なりしを、いかに思へるならん、只頭かしらのみ其の儘にて、袂は浮世の色にそみかへり、或は和歌を學び茶に樂しみ、殊には誹諧はいがいに遊ぶ狂客とはなれりけり。かくて其の身の年もつもりて後、我が隱家かくれがの蓬生よもぎふちかく、一廬いちるを結びてすみりければ、明暮あけくれにこととひかはせしが、七年ばかりのさきならん、信濃へ行脚あんぎゃし、それより北越に渡り、奥羽の隈々くまぐままでも見んとて、庵はあたりの人に預け置きて、杖笠つえがさに浮れ出でしが、本意ほんいの如く打巡りて、頃は武藏に情ある宿かり求めて、暫し尻のあた、まりぬる由聞よききえかはしぬ。さるに信濃路や、木曾の旅寢りやに夜を重ねしほど、その人々を語らひて、名におふ棧かたはしのもとに一墓いづみの塚をいとなみ、翁の句を表はして往來ゆききたの好士こうしの跡慕したふたつきとはなせりとぞ。猶それよりの行く先々に、此の句を乞ひす、めて、や、一軸いっしやくをなすばかりなれば、棧かたはし塚つづかの撰集せんしふして、世に行はんの志ありとて、過ぎし夏の比、予あたに小序せうじの求めもせしが、其の事半なかばにして病に罹り、此の長月の二十日あまり、卒つひに夜臺やたいの客とはなりぬ。悲しむべし惜しむべし。只年々になき數をそへて、老いの心を傷いたましむよ。齡よほひ又われと同じかりければ、過ぎし行李りやうぎの頃は、殊ことごとに羨うらやみて、我はかく病みおとろへたるに、猶四方の志ある勇いさましさよ。さるにてもかくまで人の強弱はたがへるものか、これや世の定むまじき定めならんと、思ひも

し言ひもせしが、我が身の露はかく残りて、其の人の爲に袖ぬらすや、これ又定さだむまじき世の定めにはありけり。驢鳴ろめいの挽歌はんかを裁して曰く、

木曾路に假の旅とて別れしが、武藏野に長きうらみとはなりぬる留

呼べばこたふ松の風 消えてもろし水の漚あわ

わすれめや 茶に語りし月雪の夜よ

おもはずよ 茶に悲しむ露霜の秋あき

庵は鼠の巢くさにあれて 蝙蝠かうちり羣ぐんれて遊あそぶ

垣は犬の道ありて 蟋蟀こほろぎ啼なきて愁うれふ

昔の文なほ残り 老の涙まづ流ながれ

よしかけ橋の雲にかゝらば 招まねくに魂たまもかへらんや不いなや

悼楚巾子文

卯月末の四日に消息あり。使の男をのこの外へまかりて、返事は後に取り侍らんとて、さし置きて出でける。其の文をひらけば、尋常の無事を問ひ終りて、此の頃かし得えさせたる雙紙ふたじのおもしろくて、永き日をまぎれぬ。猶これが末々の巻取りかへて貸してよなど、其の事ならぬ明暮あけくれのすさびも、例の筆ま



めにこまやかに見えたるに、そこく返事と、のへ、使のかへり來んをまつ程も久しからず、其の家の従者のもとよりあわたしき便りして、此の老今俄かに終り給へりと告げこしたるぞ、誠にあきれたる世の様なりける。齡は八十に猶一つを添へて、さこそは天年の終りなりけめど、かくまであだならんとは誰かは思ひかけし。朝につく杖はとりながら、耳目もなほ衰へず、浮世の是非を渡りつくして、古きためしもよく知れる上、人の爲に事をはかるもまめやかに物し給へば、萬にたのもしき人にして、若き人々も遠ざけず、常に出で入る人、文を通はし音信して、門には昔のみどりも見ず、朝にとひ夕になぐさみて、語らふ友の乏しからねば、九人はなしと歎きつる白氏が酬和の恨みも薄かりけん。さるは老いのにけなくも身の靜かならぬをとて、あざむく人もあるべけれど、すべて老いは、むつかしとて、世に疎まれ勝ちなるには、かかる老いの生涯は、なべての人のまねびがたき業に、羨む者はた少なからざらん。我にも忘年の交はり久しかりければ、これより後の明暮には、あらましかばと思ふ悔いあらでやはあるべき。よはひは恨みなき齡ともいへ、別れはうらめしき別れなりけり。

弓張の梓にもよれほと、ぎす

方笠庵記 應二松原氏需一

方笠庵のぬし、方笠庵をいとなみて方笠庵の記をもとむ。けだし此の庵に此の名をよぶ事、いかな

らんとゆかしむに、たゞ世を例の洒落に見破りて、爰に五十年の尻をすうるとも、味噌する朝、茶を煎るゆふべも世帯にほだされず、耳目は四季の花鳥にあそばせ、吟魂は千里の雲水にかけめぐりて、これを一蓋の笠とおもへるにや。方の一字は笠のかさならぬ形をさしていふなるべし。さるは蟻通の明神もゆるし給へば、箱根今切の關守もとがめず。あるは吉野の櫻みせんとうかれしも、市人にこれうらんと雪に狂ぜし昔人も、居ながら爰の俤にぞみるらん。されば世の俗客は、此の庵のありとは見えて、これが笠なる事をしらす。あるじはこれが笠なる事をさとりて、これが庵なる事をしる。いざや我も此の道の同行なり。春はござれと諷ひ古せし、拔參といふ物の真似せんと、此の笠の端に書き付け侍る。

袋 贊

器は入る物をして己が方圓に従へんとし、袋は入る、物に隨ひて己が方圓を必とせず、實なる時は肩に餘り、虚なる時はたゞみて懷に隠る。虚實の自在をしる布の一袋、壺中の天地を笑ふべし。

月 花 の 袋 や 形 は 定 ま ら す

花瓶臺記

井戸車の古びたるを以て花瓶の臺となせるあり。これはある官邸の天井のうへにかくろへて、塵に



うづもれありしを見出でて、面白き容なりとて、其の片面に漆して、かく風流なる物とはなれり。さればにや、渠がむかしをおもふに、至つて危き所にかゝり、若水の晨より大晦日の風呂の夕まで、一日も休することなし。其の古びたるさまを見るに、それも暫しの程にはあらじ。影うつせしうなる子の振分髪より、檜垣の軀みづはぐむまでも見果てしならん。さてや其の危きを経つくし、いそがしきを仕果して、今の身の安く靜かなること、釣瓶の露ばかりも昔に似たることなし。さも忙はしかりし程は、あやしの五助六助にまはされ、飯たきの玉や竹が手にのみひかれつらん。物換り星うつりて、玉も六助も今何くにかある。思ひきや、ひとり此の物の身を全うして、今は疊に登り花瓶を負ひて、大賓貴客のためにも聊かも牀を下らず、かかる貴き行末ならんとは。昔の菜刀今の劔ともいふべからん。かく安く靜かにしてこそ、千世の壽も持ちぬべし。そもまた摺鉢の缺けて犬の飯器に下げられ、磨の引きわけられて踏石となるなど、靜かなりとも何の面目あらん。只此の物の宿世こそありがたけれ。人も少壯の比は世につれことに與る習ひ、危き所にも身をおき、いそがしき勉めも遁るべからず。其の灘をつゝがなく越えすまして、かく安靜の境に至らんは、誠にあやかりものなるをや。それも只ひとへにかく用るる人にあひける幸ひぞかし。もと此の主のつかへたてまつる老君の、これを物好みて久しく座右にもてあそび給ひしを、新居を卜せし歡びとて賜はりけるとなり。愛藏すること

宜なるかな。予に一語の記を求むるまゝ、思ひよれる趣を漫に筆して贈ることになりぬ。



鶉衣續篇中

贈<sub>二</sub>交花堂<sub>一</sub> 住<sub>二</sub>柳町<sub>一</sub>

所の名にふる遍昭が、見わたせばの歌を思ひよりて、かくの如く書きて贈りし。時も今春の半ばなれば、東坡が亭に名づけたる前蹤にも似たらんにや。此の心を一句にいばば、

さく花や交ぜてにしきの柳町

續後朗詠集跋

むかふの町に比の廻らぬ醫師あり。三年に三度名をかふるに、かの梟のおなじ音を啼きて他の里へうつる喩へにして、はやらぬは元のはやらぬなり。夜話亭に三度の撰集ありて、題號は同じ朗詠なり。かの醫師を見てこれを知りぬ、よく世の人のもてはやすことを。賀すべし。

爲<sub>二</sub>或人<sub>一</sub>書序

五十にして親を慕ふは、世にありがたき例とは、昔大賢も宣ひし。七十にして慕ふ人、今參陽の箕山翁か。此の秋先考の五十回の忌に、佛事作善のいとなみはさらなり、其の生前にすける道とて、四

方の誹士に手向の句をもとむ。されば心の水の淺からぬより、かけ見ぬ人までも寄せおくり、やごとなき方にも聞えあけて、かたじけなく賜はりし句どももありとか。誠に人を動かす事、許りにはあらざりけり。そもかの先人烈士は、貞享元祿の比にありて、其角嵐雪が曹を友として、深く風雅に遊べりとぞ。其の世の詠句は古集にも見えたり。其の子孫までも、猶風月の才に富めること、ためしはた世に多からんや。昔曾子が羊棗を食はざるは、父の嗜みしことを忘れざればなり。今此の箕山子の誹諧を翫べるも、又父の嗜めるを慕へばなり。それは孝よりして捨て、これは孝よりして捨てず。捨つると捨てぬと表裏ながら、追慕孝情の重さを荷はば、只鈞がねとつり鐘にして、提灯のさたに及ばず。もとより提灯何ぞたのまん。孝子の追福よく冥闇は照らすべしとぞ。

新古庵記

數寄者ありて、其の閑居に名あらんことを予に請ふ。請へば辭し、辭すれば請ふ。請ふと辭すると織るがごとし。つひに辭しまけて止むことをえず。されば予が辭するは、茶道に疎ければなり。知らざれども、はたこれを思ふに、此の道はそも古式ありて、一事一蓋の矩をはずさず、はづせば放埒の誇りあり。茶杓のあつかひ、ふくささばきも、さすてひくての舞曲ならねば、さして上手のけぢめもわかれじ。しかれば古き二の舞して、何の面白きことかあらん。それを面白がるは其の故あり。同じ



ことのかはらざれども、昨日の古きも今日すればあたらしく、今日の新しきはあすの古きにして、まして道具も古きを賞すれども、用ゐる心は日々にあたらしく。新しき物の古くなるは、天地自然のことにして、古き物のあたらしくなるは、人の才覚智のはたらきなるをや。さればこそ、目に見えぬ鬼神も我を折り、武きもの、ふも丸腰の交はりをなせば、一椀のつけざしに男女の中立ともなるべきを、傾城の客なき宵を御茶ひくとはいかにぞや。予が此の論もし偶中ならば、あるじの取る事あるべし。そこを天道まかせにして、新古庵の記と題して贈りぬ。誠はせめを免れんための御茶濁らすといふ物か。もし早合點の人間きて、しんことは團子のことかといはば、よしそれも茶受のさびとなるべし。

贈或法師辭

衣を墨に染めねども、世を遁れたる法師あり。むかしは城下に富める家、誰彼とかぞふるには、指一本のあるじなりしが、利欲に心のうときより、畢竟は無分別の三字に、家居も藏も、盧生が夢となして、時ける種の菜の花と咲く日は、身を蝶々の袖軽くうかれありきて、今は寢覺樂也とぞいへりける。さるにかの祖翁の幻住庵も、人の住み捨てける跡なりとぞ。其の椎の木の陰を慕へば、おのづから似ることありて、こゝに一廬の主とはなりけり。もとすみし主は茶に遊ぶ人なりとぞ。けに窗も垣根もよしあるさまなり。されば境によりて心は轉ずとか、聊かあるじの爲にいはん。昔の數寄者今の

誹諧、其の風流は通ひもすらん、心はおのづからけじめや分るべき。そもや茶道はすべての調度も、古き物をと愛づるが中にも、長月比の水仙をたづね、雪間の嫁菜をさがし、三月の筍も孝行のさたにはあらず。なべてはしりの初物を争へば、二月の梅、秋の茄子は捨つる心も早からん。これらを風雅の上に思へば、年の内の梅のみこそ、花なき時の賞翫なれ。其の餘ははしりの物を問はず、只のこる雪、残る花、螢も菊も名残を慕ひ、おくれし物を四季に憐みて、行く物はかなしめども、來るは物の時節に任す。さらでも隙行く駒の足に、心の鞭は加ふる事なし。これは茶人を誇るにはあらず、其の道々のよる所にして、こゝに風雅の本意をしるべしとぞ。

紙袋序 其考句集、其子洞同が求めに應ず

紙袋を披けば、金玉有り。錦幾重に包みたる宋人の燕石もあるを、これかの綱を尙にすといへる、かしこき教へにして叶ふ物か。されば其の玉も、價をもとめて賣らんとにはあらず。只これ父を慕ふ孝子の手になれるなり。そもや吉野の春にあはざりし人も、青葉の木末しけきを見ては、さこそ花は思ひしりぬべし。今此の集に序を請はれて、生前の至孝問はずして著し。人其の誠を感ぜざらんや。我が辭せずして筆をとるも、此のことのかくあればなり。

九日寄服先生辭



我を生むものは父母なり。我を蘇する者は先生なり。僕が今年の秋いたく病めるや、此の六十こそ我が世の限りなりけれど、みづからも思ひ人もさ思へるにや、さし向ひては言はざれども、つきしろふ様いちじるし。さるを先生の良劑をかさね、再び九死の地を出でて、世は今草木黄ばみ落ち蟲の音弱り行く程、我は引きたがへて心地頼もしく、菊祝ふけふは聊か杯をさへ手にふるれば、親しき者どもの、たゞ此の翁を拾ひたるものごとく笑ひの、しる様、いと嬉しけなり。さながら例の一癖は止まず、つたなき狂句して、けふの歡びを先生に告ぐることしかり。

菊の 日やまつ 初立の 東籬まで

三士、挽歌

只年々の上をおもふにも、あるはなく無きは數そふと、歎くは老いの常なるを、今年いかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらん。睦月も若菜つむ比、有齋子世を去りぬ。

十くだりに たらで なき身や 初曆

と袖の涙もかわかぬに、其の二十日餘り、百積身まかりぬ。かれはおなじ世を捨人、殊に住む庵も呼びかはすばかりなれば、明暮にかたらひしを、立ち登る無常の煙も見るかたにたなびけば、猶思ひ出づるふしくも多し。

摘菜せし友を 其の野の煙とは

これだにさしつどふ悲しみなるを、きさらぎの初め、再兒子江戸にて亡せける由、嗚呼今年はいかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらん。

なきかすに 指をる 蕨はる 寒し

爾住庵説

こゝにしか住みける法師の、妻もち魚喰ひて尊きことはなけれど、只世を遁れ風雅に遊ぶことの、聊か喜撰に似たらんと、筆にまかせてかく書き贈れるなり。よし今は世にたたぬ身を、たつみとは人も言はじとぞ。

示先以辭

横須賀の先以は、桶を結ふを以て業とす。深く蕉門の風雅に耽り、手は世渡りの隙なきも、心は向上の月花に遊ぶ。知多の浦浪かへすも、予逢ふ時はかれにしめす。風雅を以て家業を妨ぐべからず、家業を以て風雅は妨ぐべし。せぬも其の日の誹諧にして、障るも其の夜の誹諧なり。此のこと五論によくいへり。あはでやみにし憂さをおもひ、仇なる契りをかこつこそ色好まんとはいはめと、高く論すれば、戀すらかくのごとし。まして誹諧においてをや。月更けては、十市の里の哀れにも通ふ



らんと、丁東舎と書きて與へぬ。只其の響きの家にたえず、いとまも浪の音さへうち添へて、長く風雅の冥加もあれとなり。

如是庵、挽詞

かりそめの旅とて立ち別れしが、はかなくも遠きあふみの土となりし、南空坊が魂に告ぐ。むかし祖翁は浪華の露と消え、嵐雪は鎌倉の月に身を終ふ。もとより誹諧行脚の調する所かくの如しと知れば、如是庵何ぞ怨みん、何ぞ驚くべき。さはいへ、齡は一つの兎にして、交はりし我が年月も久し。嗚呼哀れなるかな。此の度は不之庵におくれ、今亦此の漢を愴む。老いの身のいづれか人の上には見聞くならん。

呼ぶかひもなし、霧鷹の雲陰れ

與有功子書

愛して其の悪しきを知り、憎みて其のよきを知れとか。人を以て言を捨てずとも聞けり。花に嘯る鶯も、夜なかぬはわるし。鳥ほる鳥も月に啼くはよしと、世に公の眼こそあらまほしけれ。そもや我若き時君を知らず。一度見て肝膽をかたぶく。君はもとより和漢の才に富みて、詩を以て府下に鳴る。かつ誹諧に遊びては貴賤の情を知ること敏く、口を開けば玉を吐き、筆をとれば錦を綴る。我が

鶏の羣にはあらず。思ふにいかなる夙縁にや、君がいふこと我が心に違はず、我が云ふこと君に叶ふ。あはれ老いの身の容をてらす鏡は、今あるとても何かせん。我が誹諧の好悪をてらすに、君をますみの鏡とせんに、五十餘年の非をもしるべしと、今や老後の力を得たり。つらく君が誹諧を見るに、もと露川が藍に出づるが如しといへども、其の藍の藍ならざるを知りて其の色を慕はず。今たゞ濃きみどりは獨り染め出せる物なり。このごろひそかに論する所、文藻十論の上に於て、誠に我が多年睨視するところ、涓埃もたがはず。不思議や、しらす我が魂もし君が懐をかるかと、一度は驚き一度は嘆ず。こゝに論ぜん。抑東花坊は蕉門の逸物なり。昔葛の松原より續五論を著す。姿情花實附合の論、實に誹諧の骨髓を顯はす。其の後東西夜話、夏衣、所々に云ふ物、金言妙説少なからず。さるを惜しむべし。みづから終焉の記を書きて、支考の名をなき物に擬してより、すべての咎を蓮二に謂はせて、文鑑を選して自註をはからず、文藻を編みて眞名の新製に及ぶ。十論を著しては虚實を論じ、名に誹諧の二字を假れども、長助李助が耳に入らず、酒ばやしして餅賣るが如し。徒然草の贊は、誹學のさたに及ばず。毀譽は見る人の心にあるべし。かの君がいふ所、確論にして残さず。今はたこれに何をか加へん。しかるに先にいふ如く、我君を鏡とせんに、我又清き光なくとも、只潦水の淺きを恥ぢず、聊か君をてらさんとす。其のいふ所他にあらず。君蓮二を誇るをきけども、未だ



支考を稱するを見ず。儒士は釋氏を防けども、其の説のよろしきあれば、潛かにとりて身の益とし、佛徒は儒道をいやしめども、其の事の理に叶へば、聊か用ゐて今日の法とす。内證皆かくのごとし。況んや支考は蕉門の俊良なり。舊説もとより規矩とすべし。かの文藻十論の説においても、猶誹諧にとるべき物少なからず。君誹諧の益をもとむるに、必ずこれを誤ることなかれ。そも我は君が愛するものなり。君もし憎みてよきを忘れんは、其の損只君にあり。君もし愛して悪しきを知らずば、其の損我にありて、くもれる鏡に向ふが如くならん。歎く所こゝにあり、呵々。いま書をよせて寸志をいふ。多言まことに恐るべし。但し我君にかくすことなし。君はた我をいかる者ならんや。知雨亭の秋日に深く、川崎屋が酒日々に厚し。訪はれんこといつれの日ぞ。又一飲に相笑ひて、三秋の悶えを解かんのみ。多罪々々。

秋の日の序

蕉翁生前の七部集とて、世にあがむるが中に、冬の日の集は、尾張五歌仙ともいふなりけり。しかるに、暮雨庵の門人騏六なる者の家に、つたへとむる一卷の歌仙あり。これは往昔竹葉軒のあるじの、翁を招きて其の日になれるものにして、其の座の荷分が筆したるまゝに遺せるものなり。いづれの集に出でたりとも見えず。されば暮雨庵曉臺子、これををしみこれを尊みて、社中を語りひて四卷

の歌仙をつらね、再び尾張五歌仙を繼がんとす。稿なりて閱するに、誰かは狗の尾をもつて貂を續きたりといふべき。祖翁の魂もしかへりきたるとも、青眼にして賞したまはん。今人なしといふべからず。實に本州の面起すともいふべし。淨寫に臨みて、予に一語をそへよと請はる。嗟乎これまた蕉門の盛事なり。何ぞ口を嚙まんやと、年は明和の五めぐり龍證方に集まる比もあひに逢ふ冬の日の、短き筆さし濡して、聊か責めをふさぐことしかり。

郭公、文臺、記

郭公の文臺は、名におふ二見瀉の浪に立ち竝ばんとはあらず。昔持ちける文臺は、世を遁れかくれ入りける比、今は逢がもとに客をかぞへて、奈良茶たくべき身にもあらず。さらば不用の物はなきこそまさらめと、ほしがる人に打ちくれて過ぎける程も二十年に近し。邇日蓼哉なる男訪ひきて物語りける序に、此の庵に此の物なきは、寺に鉦なき心地ぞする。かばかりの物一つ、何の所せきことかあらん。かかる事よく心得たる者あれば、翁の爲に造らせんと、強ひてすゝむ。けに思へば、必ず懐紙を置くのみにあらず、座右にあらば萬に便りよきこともあるべし。長明が車につみて、建てつ崩しつ事そぎたる方丈にだにも、折琴繼琵琶を貯へたるためしを思ふに、あらばさてありなん。さるにても、今世に此の道の行はる、ことや。凡そ心なき惣内本兵が徒まで、家に一脚の二見なきは稀なり。



さるから裏書<sup>うらびき</sup>々々の望<sup>のぞ</sup>みたえず、老いの手もたゆまばかり、夢にも見え<sup>まほろし</sup>幻にも立つがごとく、いとむつかし。只書も裏書<sup>うらびき</sup>もなき物あらばやと、この一脚を新製して、草廬<sup>さうろう</sup>の藏物とはなせるなり。身の後に財<sup>たから</sup>のこるは吉田の法師も憎<sup>にく</sup>みしが、心とめけんと言ふべき程にもあらず、よからぬ物をとの誇りもあらず。且此の名をかくよぶは、もし見る人あらば見てしるべきのみ。

一聲や二見にかよふほと、ぎす

白藏主<sup>びやくざうしゆ</sup>贊

醫者の若死<sup>わかしに</sup>少なからず、出家の地獄<sup>ぢごく</sup>さぞあるべし。人の口ばたの飯粒<sup>めしつぶ</sup>を笑はんより、まづ我が鼻毛をかへり見るべし。

意見いふ尻に尾花や白藏主

櫻の句小序

松井氏壽庵の主<sup>ぬし</sup>の、こゝに千本の櫻を植うる心や、只遊人の興を誘ふのみにあらず。おのづから精舎<sup>じや</sup>にたよりて、佛縁<sup>ぶつえん</sup>をも結ばしめんとするにあり。剩<sup>あまつさ</sup>へ四方に櫻の句を請ひ集めて、永く寶前にとどめんとす。其の志成るに及んで、予に小序の需めあり。我きく後京極攝政殿<sup>うたと</sup>の歌に、むかし誰かかゝる櫻のたねをうゑてよしのを春の山となしけん。これを以て知る、萬世の後も花見ん人の植ゑにし

もとの主を慕ふことを。吉野<sup>よしの</sup>には其の人をしらす、こゝには其の人いちぢるし。されば不朽<sup>ふきう</sup>の名を植うるといふべし。我が短才なる、他のいふべき事をしらす、只此の一句を擧げて、願主の勞の後の世に傳へて空しからざることを賀す。これをも小序といはばいふべし。

今植ゑし櫻や世々のはるの雲

八橋集<sup>やちばし</sup>序

はるるきぬるあとの年月にはあらず、昨日<sup>きのふ</sup>は今日のむかし男ありけり。參河<sup>じよさう</sup>に序草とよばれて、風雅に耽るあまり、此の國に述<sup>た</sup>ふる名によりて八橋集<sup>やちばし</sup>選ばんと思ひわたりしが、頼<sup>た</sup>むまじき世の、はかなくも、水行く川の泡と消えて、かけはてざりし恨<sup>うら</sup>みの捨て難しとて、二三の門人遺志をつぎたして、かく一部の功なりぬ。されば名をかりて容<sup>かたち</sup>はからず。必ずしも脚手<sup>くもて</sup>にかけし姿にか、はらで、只四季の表<sup>おもて</sup>をならべて、これを八つわたせるなり。これかつ選者の洒落<sup>しやれ</sup>なるべし。我は其の澤にさく花の、紫のゆかりにもあらねど、ありし世には物いひかはし、此の集のあらましをも語り、ものせし言の葉のつましあればと小序を請はる。老いのみまなごと、何の榮<sup>はえ</sup>かあらんと、辭するも辭し得ず、漫言<sup>まんごん</sup>を書きて贈るに、猶謝していふことあり。駟馬<sup>しは</sup>の車にのらずばと、青雲をのぞみし賢<sup>かしこ</sup>き人のしわざには似ず。かの順禮といふ者の、行き過ぎがてには憚<sup>はか</sup>らず筆<sup>ふで</sup>とりて、かくあらたなる八橋にも、はし



たなく物かきつく。我只かれが類ならし。もし見苦しと人の憎まば、橋守の心にまかせて削り去らんもよしや安かるべし。

拾扇説

人の手より得るを賜はるといひ、交易して得るを賒ると云ふ。もらへば謝するの禮あり、買へば價に高下の論あり。二つの世話をはなれて、ひろふといふ幸あり。住吉の濱の小貝も、秋の山路の落栗も、ひろふは拾ふ物ながら、それはあるべき所であれば、幸のきたには及ばず。思ひがけざる所に得るを、天の與へともいひて、人の喜ぶ事なるをや。されば慾に爪長き男は、天も與へぬ物を望みて、くらがりには狗子をつかみ、牛の糞に手を汚す。求めては得がたきならひ、かかる愚人は論ずるに足らず。金銀を拾ふはことに幸の甚しきに似たれど、それは落したる人に穴があきて、身上破滅に及ぶもあれば、心ある人は其の主を尋ねて戻し、又は心のねぢけ人は、かくして戻さぬ不埒もあれば、其の主の怨みをおひ、世話を拾ふ筋ともなり、災ひを拾ふ端とも成りぬべし。この比知樂舎の主人、途に一柄の扇を拾へり。これ人の落したる物ながら、其の主はたゞ腰を撫でてこれはと言ひたるばかりにして、さして惜しとも妬しとも思ふべからず。世に澤山なる拾ひ物ながら、其の畫は松竹草花にもあらず、鯉の龍門に登れる畫とぞ。されば此の人の心に、つねに願望のかゝれるありて、天にも神にも

祈る中に、此の登龍門の吉兆を得たることを、たのもしき物にして、歡ぶこと大方ならず。宜なりや其の知樂舎の號も、もとは其の住めるあたりの青木川の鯉によりて名づけたる謂れあればならし。さるや怪しみを見ても怪しまざれば、其のあやしみ破るとぞ。よろこびを見て喜ばば、其の悦びはた空しからじ。比は雲解けて梅咲く折なれば、戯れてかくいひ贈る。

鯉はさぞな烏賊さへのほる春の雲

戲八龜

五十やら六十やら、七寺のうらに八龜と名のれども、はつきと年の知れざれば、厄年もいつなりしや、有卦に入るやらむけたやら、泥田に棒の土性か、膝皿から出る火性か、金性にては非ざるべし。かくては年の賀も祝はれず、先生にはあるまじき事なり。いざや年を定めんと、連中いひ合はせて目利講をもよほし、さすり佛の如く、先生をすゑて各入札するに、其のさま年の古びやう、所詮料簡をやめて、くる年を生まれ年とし、六十一歳本卦のかへり、みづのとの丑、もう／＼これにうつておけ、しやん／＼と埒あけぬ。世はこのごろ、年忘れの最中に、わすれた年を定むるも、定めなき世の中やと、觀念して笑ひける人の、

今までははつきとしれぬ生まれ年けふ定まるも又時節庵



## 三鶉集序

信濃なる駒が嶽は、名におふ富士の倂して、四時の雪たえず。花の名所と呼ぶる吉野も卯月のあらしに吹きちらされ、淀のわたりの郭公も聲とまらず、須磨更科の月といへど、山に隠れてあとの闇は、よのつねに變ることなし。よそにはなき雪をとめてこそ、誠に雪の名所ともいふべけれ。されども歌人の目にいらす、淺間の煙にだに立ちおとれる詠めを惜しみて、此の國に好事の三士、集作りて世に挑けんとす。集成りて題號を三鶉とはいかに。されば古今集に三鳥の傳ありて、それは易からぬ習ひなるよし。今又こゝに三鶉の傳あり。そも此の撰者三人の、各羽の字を以て名とせる、未だ其の羽はいづれの鳥とも定まらざりしが、いでや今定めんとするに、もとより異國の事はとせず、我が朝にても、春ぞ秋ぞと季節あるものはむづかし。あるは山にかたより水にのみ住めるは不自由なり。さらば片よらぬ常住の物をえらぶに、鶉の羽は仙人くさく、鷹は猛くて寂しみなし。まして鶉のむくつけなる、鶉は山野にわたらず、鳩は不精に、雀はいそがし。たゞ月にうかれて夜もすがらいも寐ず、雪の寒きにも朝起きする鶉の羽こそ、誹諧に借るべき物にありけれと、終に此の羽は此の鳥に定まりぬ。さてこそ鳥羽玉のひかりさして、此の集も世にはかゞやくならん。これ此の三鳥の傳にして、我はた幸ひにきく事を得たり。歌學者の三鳥は、我のみ知りて、意地わるく人に教へぬがうる

さければ、此の序にこれをあらはして、撰者のもとめに代ふるとしかいふ。

## 笠の次手序

東羽の花雲師は、予と時をおなじうし、好む所も同じうして、只其の國のおなじからざる故に、つひに半面の識ともならず、わづかに紙筆に風雅を通ずれども、それさへ幾重の山を隔て海を涉れば、あるは洪喬が不埒にあふこともなきにあらず。されども蘆垣のまぢかくて心の疎からんよりは、萩の葉の稀なる音信も、心の親しきは老いを慰む友なるべし。一日假初に晝ねの脰を曲けたる漆園に、胡蝶にもあらで人もすすめぬ身は、似合はしき蠅となりて戯れしが、そこにも一顆の玉の上に卒然として立ちとまりたるを、我ながらおふけなく物汗したる心地して夢さめぬ。蠅や我ならん我や蠅ならんと、分別未だ定まらざる所に、花雲師の消息到りぬ。絨を披けば、さればこそ書中にいへる事あり。師曾て掛錫の所々、或は其の地に問訊の句どもを輯めて、笠の次手といへる一集梓行の志あり。予に其の小序をそへよとぞ。先づ名を聞いてより其の集の玉なるべき。倂こそおしはからるれ。さるに其の地は、文人の輻輳する東都にもいと近し。金聲の序文は得るも易かりぬべきを、雲水遠き弊邑の老拙に請はる、ことや。譬へば崑山の下に居ながら、遙かの鞍馬に便りして燧石を求むるが如し。實に不才のあたらざるを以て辭せんとするに、彼の思ひ合はする夢あり。天已にこれを定め、物已に知り



て、遁るまじきを諷すにこそと、只此の物語を述べて其の責に代ふ。思ふにまた其の蠅の、かかる笠の次手を得て、驥尾につき千里に蹤を遺さんは、李漢が韓文に序かきて、世に知らるゝためしにも似たりと、厚顔に筆とりて、鴈の翅を勞することしかり。

法樂誹諧序

聞説、むかし頼阿法師みづから百體の人丸の聖像を刻みて殘せしが、今も世にちりほひて、たまたま和歌者流の家に求め得たれば、こよなうかしづきもてはやしける事とぞ。邇日黒田氏釜月子の手にかの一體を求め出せり。黒田氏嘗て城南前津の里に別莊あり。此の地は、名におふ富士の高根をこと山の間よりわづかに望めば、かねて富士見原ともいへり。釜月子の嚴父、過ぎし寛延の比ほひ、韓使の朝にきたりける時、異客の手に請ひて第一樓の三字を書かしめ、則ち此の別莊の號とす。此の樓の向ふ所、富士はさらなり。其餘參州の猿投、信州の御嶽、駒が嶽まで、皆一望のうちに在る。南に指をうつせば、熱田鳴海瀉より、すべて當國の歌枕なるもの、十にして七八を計ふ。實に府下の第一樓なるかな。さればかの聖像をこゝに安置し、あけくれの富士にむかはしめ、石見瀉高津の松に見果てし月も、ふたゝびこゝにてらさんとや。然るに主人常に誹諧の連歌に遊びて、和歌は専らとせず。そも誹諧は連歌に出で、連歌はもとより和歌の流れにして、皆伯仲の風雅なれば、枝こそ分れたれ、

根はおなじ柿の本の、何ぞ白眼し給はんやと、いま一卷の誹諧をつらねて、法樂に供へんとす。連衆已に定まりて、予が老いたるをもつて小序の求めあり。薄劣のあたらざるを慙ぢて辭せんとするに、またおもへらく、實に世の諺に、年役といひ若役といへる、手足を勞し働くわざは、若役の請取にして、居ながらなす業は多く老年の課役となれり。今や一座に頭をめぐらすに、あぢきなきかな、齡は吾が右に出づる人なし。よしや鬢髭を染めて若殿原と競はんは、たとへ病衰の思ふとも叶はじ。眼鏡にしばし筆をとらんは、難きより見れば易かりぬべしと、鄙陋はみづから年に許して、こちたくも此の日の序者となんぬ。

舍螿挽歌并序

今年寶曆甲申の五月、是非庵舍螿身まかりぬ。舊知各追悼の句を賦し、惜しみ歎くも宜なるかな。年比夜話亭に風雅を學び、其の志厚きより、文會必ず此の人を缺かず。予もまた親しく草廬を訪はれて、句あればともに支吾を定め、吟ずれば互に敲推を論ぜし。今更に往事を思へば、老涙しばゝ白鬚をうるほす。聊か挽詞を諷ひて曰く、

句ノ中所謂藹子ハ者。生前所嗜ム。勸レム酒ヲ必爲三下物ト。且石榴一株嘗テ與予ニ。今猶存ニ庭畔ニ。

其の齡なほわかし

此のわかれなんぞはからん



面影を慕へば 曉の月枕にのこり

音信をまてば 夕の嵐簷にたえぬ

忍ぶ涙を添ふさつきあめ

歸らぬ魂を喚ぶほとゝぎす

手向の菑子 酒むなしくあり

記念の石榴 露自らうるほふ

仇なりやさて

怨むべしあゝ

短夜やうそと見なほす夢もなき

巴雀木兒三吟十二表長歌行の奥書

我が祖父野雙翁、其の世に季吟老人の門に學びて、吟老人及び湖春と兩吟三吟の二百韻をとめて家にあり。さるは延寶八年野雙の齡四十四歳、今七十年の後これを見るに、其のたのしむ心一つながらも、風體まことに今と同じからず。我又此の道に遊ぶが故に、當時尾城の兩宗匠をかたらひて、賡ぎて一卷の三吟をとむ。嗟呼又七十年の後に至らば、今のつるぎ菜刀とやならん。さらば今の菜刀

のひかりあらたまりて、紫氣の斗邊を射るべきもいさしるべからず。されば子孫の古きを慕はば、これぞ風雅の變遷をしれと、あはせて青氈の櫃に納めおくことになん。

寛延三年庚午にあり。紫隱里野有四十九齡の秋八月、知雨亭に筆をとる。



鶉衣續篇下

燒蚊辭

おのが身ひとつはたゞ塵泥の幽なるものながら、類を引き羣をなし、夕のせどに柱を立て、軒端に雷の聲をなし、貴賤の肌をなやますより、世に蚊帳といふ物を以て汝を防ぎ、未々の品に至るまで、誰か一釣の紙帳をもたざるべき。積りて世の費えいくばくぞや。されば虻の利鬚蜂の毒尾も、しひて人を害せんともせず。既に仇の逼る時、これをもて防がんとするは、人の刀劍を帶するにひとし。汝が針は只人の油斷をうかひ、ひとり口腹のために貪らんとす。たましく蜘蛛の巢につ、まれ、人の手に握られて其の針を出すことあたはず。然れば巾著切りのはさみには劣れり。今宵一把の杉の葉をたいて、端居をこゝちよくせんとすれど、猶も透間をうかふ憎さに、大人氣なきわざながら、紙燭さして汝を驅る。ひとへに汝が業火なれば、他をうらむ事あるべからず。さるにても淺ましき汝が身を觀ずれば、

火をとりて來ぬ蚊は人に燒かれけり

送其常辭

浮藻の花の逢うつ別れつ、さるは仕官の常ながら、きのふまで待たれし身の、まだ笠紐のあともうせぬに、けふは見送りの席につらなりて、杯を上げて驪歌をとなふ。各錢別は、今年竹に祝詞をよせてこれより無事の便りをのみ。

まつといふ名はそひものぞことし竹

蟬別

三伏の日ざかりの暑さに堪へがたくて、

蟬あつし松きらばやとおもふまで

と口ずさびし日數も程なく立ちかはりて、や、秋風に其の聲のへり行くほど、さすが衰れに思ひかへして、

死に残れ一つばかりは秋の蟬

賀某剃髮文

漁父が曰く、柳は物に凝滞せず、よく春秋の風にしたがふと。さるも官路にある中は、身を清からんとては、世にさからひて人に憎まれ、身を安からんとては、世にへつらひて、心に恥かし。今や浮



世の馨をばらひて、二つの間に住み易き人あり。

滄浪の水すめらば頭巾あらふべし

星、夕、賦

今宵は星の逢ふ夜なりとて、小娘どもの暮待ちかねて、帶帷子も常ならず装束き連れて、硯洗ひ梶の葉求め、篋に短冊し等に絲懸くるなど、此の節句ばかり殊にかしきを、いかで清少納言は菖蒲にしかずとは定めけん。人間の囁きは、天の聞く事雷の如しとか。星の睦言は二階の耳へも洩らさず、天上下界のたがひめこそ殊に妬ましけれ。今年はまだき秋の名の、水無月の半ばに立ちそめて、けふくれ行く月も影さやかに、端居の袖もすしきに、一人の客西瓜によりそひて、我はた星に向ひて、何の願ひかあらん、哀れ此の西瓜の赤くてあれかしと思ふこそ、さしあたりての願ひなれといふ。かたへの翁打笑ひて、おもへばかの樂天が、海底の魚も天上の鳥も、高くとも射つべく、深くとも釣るべし。たゞあひむかひて、咫尺の間もはかりがたしと言ひしは、たゞ此の西瓜の事にこそありけれ。されど織女にいのらはんは門違へにもやあらんとて、

赤かれと西瓜いのらん龍田姫

と、思ひかけぬ山姫をおどろかして、星の手向はなくてぞ歎みにける。

七景記

知雨亭とは、鶉に其の譯たくはへるが如く、務観が詩によせて靜かなる心をいへり。今又半掃庵とは、我が物ぐさの明暮、掃く日より掃かぬ日多く、牀は塵、庭は落葉に任せがちなる、庵のだ、くさをいふなりけり。名は二つにて物二つならず。さればこれに七景を選ぶ。

東嶺孤月 路傍古松 蓬丘煙樹 海天歸鴈 龍興寺鐘 市門曉鷄 鄰舍春歌

東嶺孤月とは、嶺は三河の猿投山なり。遠き山々のそれより北につらなりて、此の山の間より、十月ばかりのよく晴れたるには、士峯の巔もみゆる事あり。それかあらぬかと昔は人の疑ひしが、寶永の比かの山の焼ける時、それとは定まりしとか、古き人のいへりけり。さればさなけ山とは、名のかしくて歌などにも詠むべきを、文字を猿投と書けるは少しくちをし。只萬葉にぞ書かまほしけれ。されど目には猿の名もよそならず、ほと、ぎすも蜀魂と書き、朝顔も牽牛とかけばむくつけき類にや。清氏の女も畫にかきて劣るものといひしが、字に書きて劣るさはなし。月は夜の長短によりて、此の山の南北より出でて、清光ことにさはる物なし。此の府下に月の名所を選まば、此の地をこそいふべかりける。

路傍古松とは、世に七本松とよべり。あるは相生めきて立てるもあり、又程へだたりて見ゆるもあ



り、染めぬ時雨のゆふべ、積る雪の朝、ながめことに勝れたり。草薙の御劍の昔語を思ひて、もしは此の七つを以て幸崎の一つにかへんといふ人ありとも、我は更におもひかへじ。

蓬丘遠樹は、則ち熱田の御社なり。高藏の杜は猶ちかくて、春の霞、秋の嵐、此の亭の南の觀、只此の景にとゞまる。しばらく杖を曳けば、赤の華表も木の間にみゆめり。鳴海は熱田につらなりて、松風の里、夜寒の里、呼繼の濱、星崎など、我が國の歌枕は皆此のあたりにあつめたり。すべてこれ熱田の浦邊なれば、海づらもや、見ゆべき程なれども、家店にさはり森にへだちて、一望のうちにいらず。されば、海天歸鴈も此のあたりをいへるなりけり。

龍興寺鐘は、庵の東よき程に隔ちたる木立、一村の禪林なり。或日客ありて、物語しける折しも、此の鐘のつくんと雲より傳ふを聞きて問ひて曰く、けふ此の聲の殊に身にしめる、何ぞ然るやと。我これに答へて曰く、客もかの二十年の昔を知るならん。此のあたりはしばし歌舞の遊里となりて、明暮絲竹の艶をあらそひ、月雪花もたゞ少年醉客の遊びに奪はれしが、其の世は此の鐘の曉ごとに別れを告げて、幾衣々の腸を断ちけん。世かはり事あらたまりて、今は其の形だになく、蛾眉蟬鬢も今いづくんかあるや。さればつく人に心なくとも、聞く人の耳にのこりて、遺響を悲風に託せるならんと、客も實にと聞きて、且いたみ且笑ひにき。さてや。

市門曉鷄は、此の西の方あやしの小借屋といふもの軒をならべ、己がさまぐの世渡り侘しけなれば、かかればおのづから遠里小野のかばかりの聲も事かかぬほどに音づれ、はかしくしき商人は來らねども、海老、鯛、小貝やうの物名のりて過ぐる事も明暮なり。さればたまぐ訪ふ人ありて、御肴に何よけんなど、一杯をす、むるには、こゆるぎのいそぎありかねども、居ながら求め得る日もあるべし。家居はこれより市門へつらなれば、曉の鳥も枕に傳へて、老いの寢覺の力とはなれるなり。鄰舎春歌は、もとよりの農家の閒なればいふにも及ばず。かのからうすのごほぐとなりし、夕顔の鄰どのは、なほゆたかなる家居にてもやありけん。こゝらはたゞ手杵の業わびしく、麥の秋、稻の秋、あはれは砧の丁東にも譲らず。これをまじへて七景とはなせりけり。さるはいとをこがましく、遼東の冢にも似たれど、賞心は必ずしも山水の奇絶にもよらじ。名にしあふみの人の見るとも、おのが八所の厚味にあかば、かかる淡薄のけしきも、又珍らしきにめでて、一度の目をとゞめざらめや。

不羨庵記

經がたくみゆる世も、わびてはすむらん月を羨み、過ぎにし方の戀しさには、伊勢や尾張の波をもうらやみけん。月も浪もおのれ人に羨まれんとは思はぬを、心に物の叶はざるには、無情の物だにうらやむ、世の人心なりけらし。されば身に富あまり、幸ひ心のまゝにしては、只事毎につきて、他に



羨うらやまれんとのみ思ふこそ、苦くるしきならひなれ。我が此の草の庵いほの事そぎたる、更に羨うらやむ人なければ、我また爰こゝに事足りて、他をうらやめる心なし。人此の庵いほを思ふにも、我他のうへを思ふにも、ともに不羨うらやの庵いほにして、自他の境をわくべからず。若し此の羨うらやまざるを羨うらやむ人ありとも、我はたゞ羨うらやまれんとの心にはあらず。

讓いほ庵いほ名文

鯉こひとは魚の名なり。大聖取りて御子の名とし給へり。虎こゝろは獸なり。名を大磯おほいその妓女にとらる。鯉こひの意よろこぶにあらず、虎こゝろはたこれを怒らんや。不羨うらや庵いほとは、我昔むかししばしつき捨てつる號なるを、はたして羨うらやむ人ありて、請うて其の居きよに呼ばんとす。我かの鯉こひと虎こゝろにならひて、喜よろこぶにあらず惜をしみもせず、たはぶれてこれに答ふ。

さかばさけつきすてし名を手て鞠まり花はな

水音舍記

鈴木氏が居、みづから名づけて水音舍すゐおんしやとよぶ。其のよぶこと他にあらず。家に久しく傳へたる翁の自畫みづかあり。かの古池かほの蛙かはづをかけるなり。あるじの祕藏ひざう宜ななるかな。そもや雷霆らいていの百里ももに轟とどろくも、過ぐれば人の耳にも残らず。此の古池かほの水の音は、翁の耳に入りて口にいづ。其の音また人の耳にひ

びきて、正風大悟しやうふうたいごの一句なりとぞ、傳へて口にいふことなり。まづ耳に入り口にいひ、又耳に入り口にはいへども、目にかの昔を見んとする者、今深川ふかがはの陳迹ちんせきはたづねても、世うつり人すみかはりて、いづこかそれと知る人もなし。たとへば今寫さんとするも、絶えてその池なければ、いかに能畫のうがわの巧たくみをなせりとも、皆他の池にして此の池にはあらず。されば只これを見ん物、ひとり自畫みづかの一軸いっしやくにあるべし。あゝ此の家の風雅ふうがを守りて、高く雲居くもゐに虹を吐くは遠し。此の風を望まん者、誰か此の水音舍すゐおんしやを知らざるべき。

青白舍記

疊かさねは常に青かるべし。障子行燈しやうじあんどうは白きをいとほす、清きことその内にあり。其の居清ければ住む人の心すなはち清し。あるじもとより風月に遊べり。口に風雅ふうがをいふとても、清からざれば佳句かぐを得がたし。昔阮籍けんせきが我儘わがままにして、好すく友と好すかぬ人に二色の眼をつかひたるは、頰癩つらくまわるき名に立ちて、人亦かれに白眼びやくげんせざらんや。青白せいぱくさらに此の名によらず。今壯年の官路くわんろにたたんには、友に善惡ぜんあくはえらむとも、只よく衆に交はりて禮を忘れず、心に忠を存ぞんすべくば、かの霜雪しもゆきのしろきを得て、松はいよいよ青かるべし。道なんぞ風雅ふうがをたのまん、風雅ふうがなんぞ道をそこなはん。あけては金城きんじやうに登つて青雲せいゆんの志たわまず、暮れては閑居かんこに休んで白露しろつゆのさびをたのしみ、ながく青白せいぱくの主ならんには、青白



舎の名空しからじとぞ。

七不思議後序

和歌に西行あり、連歌に宗祇あり、誹諧に芭蕉翁ありて、三筋に道はわかれども、皆雲水に境界をよす。文人騷士其の跡はゆかしむものから、殊に誹諧する人の、杖草鞋のさびをしたひ、四方の志を専らとするより、今や松島象潟をも未だ見ずといふ誹諧師は、世に開眼せぬ佛の如く、瘡せざる娘のごとし。されども家業に手のひかれず、仕官に脚をほだされて、本意をとけぬも又多し。我はた其のとけぬもの一つなり。布袋庵の主人は世に素封の名をしられ、もとより風雅に富めれば、身健やかに年壯んにして、何ぞ雌伏をなすべきやと、年々東西の旅に慰み、今年又越の七不思議見んと思ひたてるも、此の人にして此の病、さらに不思議にはあらざりけり。さればめでたき御代に誹諧の行はるることや。西行に宿惜しみし江口の君のつれなさもなく、宗祇に髭を乞ひし盜賊の恐れもなし。行く先行く先に同志の徒ありて、鶏黍の約をなさざれども、草履を倒にはき、鉢の木をも蚊遣にたきて、まめやかにもてなし、手より手へおくらる、事、紀行を見て知んぬべし。主人紀行の稿を示すに、未二三葉の白を餘したるは、予に物書きそへよとの設けなりとぞ。されど染むべき一言の葉もつやつや思ひよらず。たゞおもふに、主人の遠遊に耽る、歸郷の今日も、猶越の旅寢のこし方や惜しむらん

と、句一つ書きて贈る。

捨てかねん扇もこしの馴染より

贈曉吾辭

曉吾子は、我きく公の悲歡丁度五十年、盧生が夢の勘定さらりと濟まして、老いを告げ致仕をこふに、勞務むなしからず、其の子に職祿をうつし給はりて、けふや衣食住の求めもいらぬありがたき隠居とはなりぬ。同じ穴の狐これをよろこびていひ贈る。

梅雨晴れや世を卯の花は跡の事

庵記 應曉吾需

蟬蠻たる黄鳥の丘隅に止まるは其の栖なり。世に雲水を追ふ僧侶の、一所不住を事とするは、假の宿にも心留むまじとにや。夫れだにも年老い足弱らば、止まる栖なくてやはあるべき。恆の栖なき時は恆の心静かならず。宜なり、此の翁のこの庵むすべることや。子あり姉ありて朝夕の餐を饑れば、維摩の三萬二千はしらず、安置する物佛一體、行燈一つ、帚一本、茶瓶は火燧にかくべく、硯は机に屬すべし。臥具を納むる襖あり。書籍をあぐる架あり、膝を容るゝにいと安し。風雨の防ぎ、座臥の設け、いくばくの疊をか費すべき。これたゞ姑く支體の爲にして、心は無邊の天地に遊べば、世人は



これを狭しといふとも、あるじは猶ひろしとぞいふなりける。

蚊屋つりてなほあまりあり草の庵

蝸牛齋頌

梢による物は風のおそれあり、土にかくる、物は雨の患へあり。かの蓮胤が車二つにつむといひしも、猶此のものの安きには如かず。あるじはこれにならふものか。

巢でもなく穴にもあらず蝸牛

黄岡亭記

世の求むる所、衣食住の三つありて、一日もなくては叶はず。されど心をして清からしめ、心をして静かならしむるは、只棲む所によれる事、かの江南の橘の類にあらざらんや。我聞けり、此の亭は西南に望みをひらき、其のま、に月もたのまじと翁の吟を残されける、伊吹の嶽は殊にしるし。南宮の山つらなり、養老の瀧一眸に入る。眼下は千町田限りなく、村落よき程に隔たれば、春は雲雀の雲に啼き、秋は砧の月に音なふ。螢飛ぶ夜は欄によりて班女が扇をわすれ、雪つもる朝は爐に坐して清女が簾を挑けて、四時の農業目をたのしましむる外、岐山の街道もこ、によれば、通ふ市人の負ふ者うたひ行く者、己が様々なり。かれはせはしき世渡りならんも、餘所にみる目は忙がしからず。東に

は岐州川ながれて、とわたる舟の榜の音も夜半の枕にひびくとぞ。されば歌人の題する物、詩客の吟に入る所、こ、にとりてあまりあり。此の比人ありて此の亭に名を求めかつ記をもとむ。辭する事度大なる物椽のごとしと。これぞ此の家のときはを守りて、あるじの千代の友ならんには、かの地にこれをなぞらへて卒爾に黄岡亭とよぶ。只我聞いて目には見ず、心に察して筆に寫す。もし此の言のかなふべくば、取りて此の亭の記とすべし。もし此の言のあたらすんば、よし齋瓶に蓋してやみなん。やみねく、重ねてわれを煩はす事なかれ。

名茶杓辭

茶杓に名を付けて得させよといふ人あり。其のいふ人は、わが此の道によらざるを知りていふなれば、おもしろく覺えて、雪の夜と書きて贈る。君知るや、雪はしらく夜は寒し。

茶にたわむ竹や雪より猶寒し

飛鳥山賦

今日はこの事かの事にさはる事あり、明日は飛鳥山の花見んくと、心に過ぐる日數も、や、彌生の二十日あまり、尋ねし花は名残なくちりて、染めかはる若葉の其の色としもなきを、春を惜しむ遊



人は我のみにもあらず。爰に酒飲み、かしこに歌ひて、此の夕暮に歸るさわする、も、中々心ふかき方におもひなざる。

ちり残る茶屋はまだあり花のもと

山下千里のまなじりさはる物なく、うらくと霞みわたれる田野村落の詠めえならず。きせるをくゆらすこと暫し時あり。

雲雀より田打ちへ遠し山の上

贈所訪不遇人文

安達が原の閨ならずも、さしもしのびし蓬生の隠家を、留守のすき間に見顯はされたる、ねたき業なれ。庵守りける男の思ひがけなくて、顔は目ばかりになりて、驚きまどひぬらん様も、思ひやるにをかしかりけり。さるもあるじの居たらましかば、権の葉にもるもてなしもすべきをと、今更いひたらんは、かの千切木といふ猿樂狂言の心地やせん。秋もや、くれぬ、時雨のやどりは更にして、友おもはる、雪もあらざらんや。かさねて夜討の油断すべからずと、茶椀と、のへ煙管求めて、これよりひそかに人待つ心はならひ侍り。猶菊によせて句を残し給へる、楚巾子へいひつかはす。

犬蓼のはなやとがめし留守の門

芭蕉によせて句を残し給ひし蘆丈子へ贈る。

いかにとひし立枝も見えぬ梅もどき

望鱸亭記 應永田氏ノ需

目に視る所にして思ひこれに従ふとは古人の言なりかし。されば世の人の住する所、或は山林にむかひ江湖に望むを以て其の居に誇れども、官士の上に於て此の望みにこゝろをとめば、いでや印を解き冠をかけばやと、世を遁尻の心も誘ふべし。孟母の折々借屋替もたゞそれなり。永田氏の居宅は城樓を望みて、金鱸常に軒に輝き、朝日夕日の詠めことなりとて、主人これを愛し、則ち望鱸の號を掲ぐ。愛すること誠にむべなり。官路に立ち青雲の志ある眼に、常にかしこき御座所を仰げば、世祿の高恩忘る、事なく、報國の忠情日々に撓むべからず。かくて功なり名とけて後こそ、子孫に長く傳へゆづりて、かの山林江湖に望みをうつしかへ、殘生をも安く養はめ。今は此の望み何かはこれにしかん。主人此の記を求めてゆるさず。筆にまかせて其の責をふさぐ。人嗚呼なりと笑はんも、よしや請はる、よりも、笑はる、は身に安ければなり。

訪以文辭

以文子、君にしたがひたてまつりて、木曾路の夏けしき、名におふ棧橋寢覺の詠めをつくして、歸



國の折しも、かねてあらたに家居をまうけ、此の新宅に馬をとむ。扱も釣りそめし蚊屋の匂ひに、猶旅寝の心やせん。今ことに夏をむねとする物すきに叶ひて、あるじの風流いかに心にくき住居ならんと、おもへばゆかしく、見ねばいよくなつかし。

生壁にまた旅の香やほと、ぎす

嘯花、誄

絃を斷ち劍をかけしむかしの涙袖にしたゝりて、今年ぞ身一つの秋とは歎かれぬる。さるは梅軒の嘯花子、未だ二十に三つを一期とし、此の中秋の月をも待たで、故郷の露と消えぬと告げこすにぞ、目に見えぬ風の音におどろくは、たゞよのつねにして、ひとへに鳥の翅をかかれたる悲しみ、譬へて言はんかたなし。誰か惜しまざらん。此の花子は武門の藝能他に勝れ、百事百成の器用のみか、深く蕉門の跡を慕ひ、過ぎしころは一日に千句の獨吟を試み、または夏中百題の日發句をつらね、明暮風雲霜露に魂をなやまし、一たび此の道の大悟せんとは、常の諺なりしぞかし。我はた如何なる宿世なりけん、斷金の交はり久しく、月の夜ばなし雪の朝會、其の人もれて我をかしからず、我かけて花子樂します。さるを一座の口ぐせに、花子は天象時節のけしきを好み、我は人事の上かちて、常に其の事を戯れにくみ、たま／＼取りかへたる句振あれば、これは我ながらその句をいひたり、それは我

が句をその言はれたりなど、さるがひ興じけるも、はかなく一夜の夢とはなりけるよ。思ふにかなし。ある年はその別墅に誘はれて、夜をかさねたる清談をなし、あるは其の山かしこの寺に、すべての行樂杖をあひ合はせ吸筒を荷ひて、露も違ふ事なかりし中らひの、此の春の御恵みによりて、我はおもはぬ官にうつり、暇なきに打紛れて、風雅の會もひまありしが、卯月は旅の衣にぬぎかへて、百里の東に別る、名残、たゞにやは止まんと、梅軒に半日の閑をぬすみて、かの山に花あり雪の郭公と我を見立てしに、四月になじむ菅笠の旅といひつゝ、猶我も又、一しけり陰をへて待て今年竹と、取りあへぬ辭に互の無事を祝しける中にも、世のあだなる習ひもあればとかなしく、顔のうち守られつるも、それは我が身の上をこそ思ひつれ。花子はすぐれて健やかなれば、かかる歎きを我聞かんとは思ひもかけざりしに、かくぞ定めなきとは、始めて思ひ合はされぬる。されば此の別れのかく怪しきまでに覺ゆるも、我には理と人も思ひゆるすべし。若し靈魂物しることあらば、梁月の夢にも見えて、此の手向の敲推を定めよ。嗚呼それ富士の雪は時ありて消ゆべし。此の恨み綿々として盡くる期あるべからず。

供花 そちむけて魂まねかせん花す、き

拜禮 社齋に泣く袖もなき夜寒かな



草風誄

をとゞしの秋は此の武藏野にありて、嘯花子が訃音に魂をけづり、今年も同じ吾妻に下りて、祈るかひなき神無月に、草風子がはかなき便りを聞きけるは、如何なる事にや。其の文披き見しには、餘りなる驚きにや涙さへ落ちず、たゞ空をのみうち詠められしを、猶さだかに夢ならざりけりと思ひ知るにぞ、ほろ／＼と袖は濡れそめぬる。過ぎし秋の比、けにいつの日なりけん、いまだ旅立つほども定まらざりし比、勞りをとひ侍りけるに、其の折は頼もしく見なして、露落つる萩が枝の頭も輕けにもたけて、いでよこのころは、心地も死ぬべく覺えたれば、辭世の句など思ひよせたるを、かかることもむだ骨折りとなりぬべきなど、うち笑みきこえしを、あなゆゑし、かばかりの惱みにいかでさることのあらん。今は日にそへてぞ力つき給ふべからん。誰彼などかたらひて、やがて一夜の伽をし侍らんなど、さしむかひたる佛の、今更に目の前をさらす、猶ものに感じたる氣色なれば、又こそといひて立ちつるが、それこそ長き別れとはなれりける。我嘯花子が誄かきしほどは、互に袖をぬらして、さるにても世に不思議なる人の終りかなと、有るまじき習ひの様に、愚かなるまで惜しみあひけるを、聞もなく又其の人をおなじ昔に見なしける、此の恨みいかゞはせん。起きて思ひ臥してかなしみ、空しく鄰笛に腸を断ちて、一句を手向くるものうけれど、

誠とはまだ思はれず初しぐれ

悼鶴此文

今年の秋にあはじとは、誰に誓ひし命なりけん。此の水無月の晦日に、櫻井氏鶴此身まかりぬ。かく短夜の短かるべき端なるにや。いまだ年も二十四ばかり、月花の哀れも身にしむべきほどにもあらぬを、深く風雅に心を入れて、其の才の勝れたるのみか、只明暮のふるまひもまめやかに、人にもてはやされて、たゞ此の人を見ならへと、若き子持ちたりける親々は、意見の度の言草には引き出されつるが、あはれ世にあらば蕉門にも一旗の大將とは、たしかに秀づべき器を、かかる夏野の露と見なせし恨み、けふ御祓せぬ人の袖も、誰か涙の川浪にしほらざるべき。今は詮なきたまよばひして、牌前に一句を手向け侍る。

こぬわかれあすの文月も片だより

悼八龜辭

時節庵のぬし身まかりぬ。馴れむつみし年月を思へば、老涙さらに禁じがたし。我が庵の巽にあたりて、其のあだし野も遠からねば、夕の霧かと立ちのほる、はかなき空を詠めやりて、  
蚊やりにも泣いて見る野の煙かな



悼五條坊文

六々庵に別れ、反喬舎世を去りし其の折々の傷みは、さる事ながら、猶此の五條坊の健やかなる、忍山かひなき其の世の事どもを互にいひ出でて、老いを慰むつまともなりしを、名に呼ばれし葬のはかなき秋をだに待たず、此の水無月の露と消えし、惜しむべし悲しむべし。松竹つひに齡を譲らず、桃李もとより言はず。そも我今日よりして、誰とともにか昔を語らん。

なき友に泣くや心の羽ぬけ鳥

贈信州松本射山

姑山といふは、さきに宗匠某に受け得たる名なりとぞ。しかるに此のとなへの差合ごと出で来て、改名の字を予にもとむ。されば此の名を思ふに、めでたき姑射山の字を摘みてかくは言ひしならん。しからば上の一字を置きかへて射山とやいはん、下の一字をあらためて姑峯とやいはん。いづれもとの意は失はじ。二つに一つを定めんは、主の選にあるべしと、筆の序にかくいふ。

おなじ山たゞ名をかへて呼子鳥

與某文

好みて豪飲に耽る人あり、いかに思ひよることかありけん、忽ち八仙の仲間を遁れて、今よりは

たく酔はじと固く誓ひけるが、猶行末の亂れ、我ながらうしろめたし。座右に守るべき語を書きて得させよと請ふ。我はもとより下戸なり、酔ひて面白きやらん止めてよきやらん、其の心に關らず。されども其の責のいと切なれば、否びがたくてすゝろなる一句を筆す。

神もうけよ酒すごさじとせし御被

一老翁畫贊

此の畫は誰をうつせるならん。強ひて名をつけてとのぞまる。容貌うたがふらくは、陶氏に髣髴たり。されども例の菊なきはいかに。嗚呼我これをしれり。東籬すでに霜白うして、五株の柳も骨ばかりなる比か。これを更に冬淵明とはいふなるべし。

菊とりし手もふところや霜の朝

定茶名文

茶をあらたに製して、名をいかゞ定めんと我にかたらふに、とりあへず雜の一句を筆に任せて、茶の下をあふぐ片手は枕かな  
されば手枕ともいはばや。

醉鶴亭記



こゝに吳竹の世々經たる酒肆あり。さるは臨邛にかけむかひのわびしき店には似るべくもあらず。又六が杉葉常磐の色深く、碓のこだま花紅葉をうなづかせ、土藏の白壁雪を奪ふ。其のあるじ又風雅にさへ富めば、騷人ことにこゝにたよるに、酒債尋常行處にありといひしは、つもる行への覺束なくも、毎日杖に百錢をかけて、現金買ひのをのここそ、二季の帳をも騷がせず、たのもしき得意ならめ。されば暖簾には名におふ淺野屋の風を傳ふれど、猶一室に扁すべき號あらんことを予に求む。卒爾に醉鶴の二字を與ふ。其の意いかにと問ふに、かの鶉鶴の裘を脱ぎ、金龜を解いて價にあてしためしあれば、仙鶴を日々百杯に酔はしめて、もとよりかれが持ち合はせの千年の齡を、酒手にこちへとる合點なりと、且戯れ且祝して、あるじが爲に謾に筆を採る。

秋千居記

居所に號を定めてと請ふ人あり。其の人もとより名を楓夜とよぶ。楓は紅葉にて、夜の錦にかよへるにや。實にそれ錦をきて夜行くが如しとば、富貴にして人に知られぬをしむ辭とぞ。されども其の榮を他に羨ませ誇る心のある人ならばこそ、白晝に面をさへけてこれ見よがしの振舞もすべけれ。身に徳あり家富まば、いかに隠るへたらんとも、世に自らかくれなかるべし。さてこそ錦著て綱を尙にすとの、かしこき教へもあるものを、我は只其の夜の錦こそゆかしけれ。物必ず尤けからぬは長久の端なるをや。されば夜の楓の限りなき世々を祝して、千秋の二字に定めんとするに、其の唱古くて珍らしからず。此の字を上下と置きかふるにも、心おなじくして呼ぶ所聊かあたらし。終に秋千居の三字を題して、此の主の求めにかふることしかり。



也有翁の著述の文、鶉衣につきぬとおもひつるに、猶かかるめでたき錦繡のかやける衣ぞのこりたりける。いでや、倒さかさまに著し朝服より葛巾山服の老いの末まで、さる斑爛の色にほこらず、てゝらふたののいやしきをしてず、常談俗語に心をやりて、常のすさみとせられしは、はづきにさらすほしぎぬの、すぐれて尙たかき心とぞ知られたる。あはれ六徳備へし君子にて坐おはしけるを、十徳きたる誹諧子とのみ思ふめるは、ばくものをのみめにふれし、ふるぎの市のふみちがへなりけり。そもくこの文は、なごやなる垂穂たれほぬしの簞笥の底にかくしおかれしさいでなるを、袖おほくびととりならべて、終に丈ある衣きぬとはなしつとぞ。かかるみけしにおのれが墨つくべくも覚えざれど、古きとくいの請はるる儘に、此のはた袖をかいけがすも、じちにかり著のまへしりへ、身にあひがたき事になん。

六 樹 園 主 人



鶉 衣 拾遺上

壽亭記

むべなり、此の亭にことぶきの名ある事。門に萬里の湖を通じて千艘の出で入るあした、一葉の行  
きかふ夕、枕によりて閑を求むれば、軒端のきはになれて伴ふ鶴あり。酒を調へて客を呼べば、俎板またいたに生き  
てはたらく鯛あり。さるは所の仙境に似て、漁村に近き自由なるべし。ましてやごとなき蘭の漿、桂  
の棹さもこゝにかぶ日は、枝も榮ゆるとうたひつれたる松風の里の松風も、濱の名にしおふ君が千年  
を呼び續ぎぬらん。もとより熱田瀉逢が島も這ひわたるばかり、かしこき神のめぐみは更にして、塵  
外の佳觀にあそべば、世にありふれたる鱺鮓うどん蕎麥切も、爰に不老の藥となりて、ことさらに壽の一字  
の偽りならぬことわりを知るべしとなり。

松に鶴さて新そばに鴈の聲

須磨硯記 應加賀島氏之需一

連城の珠は其の徳を名とし、小鳥の劍は來るいはれをしらせ、蟬折の笛はそのかたちの似たるをい

鶉衣拾遺上



ふならん。それが中に、此の硯をあるじの須磨とよべるには、此の海の際に櫻の花を彫りなせるが、名におふ若木の佛ありとなり。けにおもしろし。此の浦はむかし平家の陣をとりては武士の譽をあらそひ、又は源氏のかりのうつろひに艶なる物語のあはれも添ひて、武になつかしく文にゆかしきを、まして其の六十帖も、此の巻より筆はたてそめて、本末もとのほりぬとか。其の人の名の紫なるに此の石の紫なる、それも捨てがたきゆかりなるべし。さればあるじの徒然のすさびに、みづから妙觀が刀をもてこれに覆へる物つくり、猶我に一語をそへよといふに、そのいふ人もいはるゝ我も、今年は吾孀の旅客となりて、ともに故郷戀しきすさびに、羨ましくもかへる波かなと、此の須磨の海の名にひかれて、つひに此の記のぬしに成りぬ。いざや浦のみるめも恥かしけれど、よし蟹の子のはかなきしわざと、其の關守もとがめざるべし。

する墨や明けくれ須磨の花ぐもり

鶉 箴

孝は百行のもととこそ聞くに、かれは反哺の孝心はありながら、いかで啼聲をさへ不祥の物に憎まれけん。それも夕ぐれの端居に、泊りがらすの三つ四つつれたるは、清少納言も哀れとは見しを、まだ曉の鐘もならぬに、月夜あるきに起きさわぎて常に郭の夢をやぶり、かの楓橋の槳枕に、唐人の寢

言をも驚かしぬ。これらは人にかこたれながら、かへつて風雅の種となりて、烏丸殿の歌にもよまれべきか。田畑にむらがりては、麥をほぜり大根をつき、曾哲が隠居屋のなつめも、栗栖野の祕藏の柑子も、などいたづらにあらしけん。然るに古きためしには、かの烏羽玉も汝が寶にて、名劍に小烏あり。おふけなくも日輪に三足の烏もおはしませば、さのみさがなきものとも思ひくたされず。されば一たび己を顧みて、鶉の真似をする僭上をやめ、鶯を鳥の無理をたしなみ、烏麥烏瓜の備はりたる食もあれば、身を墨染の善心に發起して、今かくいへる示しをも、よくあゝと打領かば、あんかうがらす野良鳥、うかれがらすの浮名も消えて、長くお烏大明神の恵みかうむるべし。さらば鳴子の枝もならさず、案山子も弓を袋の世となりてん。ア、人の爲に恐るべし、身の爲に慎むべし。

送咳氣神表 于レ時在二武州一

今年秋の初風身にしみ渡るより、老いとなく若きとなく疫氣になやみて、清涕の露草葉を争ひ、穂薄のかしらふらつきて、喰ひ物の味をいさしら河のそれならずも、とめがたきせきに苦しみぬ。上は玉だれのひまより煎薬のかをりほのもるゝより、下はあやしの柴ふる人までも、頭をからけずといふ事なし。芝居入りなうして盆狂言の櫓幕いたづらに絞り上げ、色里客たえて夜見世の行燈かゝぐるによしなし。葛西の瓜畑も下冷えに守る人なければ、隅田川の渡守も發熱にこがれくて、水馴竿の



細元手を流す。祈禱の法印も長髪に忍辱の姿を失ひ、宜禰も祝詞の聲うらがれたり。醫者賣藥の門のみ賑はひて、きのふ剃の匕先も、正氣散にやすむひまなく、かれらは時を得たるに似たれど、さして手柄の療治ならねば、はかしくしき藥代もよるまじ。噫此の秋、いかなればかかる災ひを下して、吏民に苦しみをかけ給ふぞ。願はくは天神地祇愛愍の眸をめぐらして、咳氣の邪神を速かに西の海へ送り給へ。さらば臣等も幣帛のむつかしき業は知らずとも、笹の葉にしで切りかけ太鼓をならして、及ばずながら力を合はせ奉るべしと、丹誠を抽んで告げ奉る微志を、それみそなはし給へ。

菊 合、賦 與成田某

此のあるじの菊作るに好ける、好かすば誠にかくあらまじや。されば作るべき花のこれならで何ならん。白は吉野の雲をなびかせ、黄は玉川の露をあらそふ。あるは二月の紅にまさり、あるは八橋の紫をうばひて、詩客の車も停むべし。昔をとこの袖もぬれなん。淺深濃淡の色はさらなり、花形は百種の新奇を咲きて年々に其の目をおどろかし、國々に其の名を聞ゆ。むかし陶氏が菊に名立てるは、只ありのまゝの色香にとゞまりて、主の爲にはいふべくもあらず。春の雨に鉢を入れては、栽うるに豪駢が手をくだき、秋の霜に帚をあてて、凋むに佐國が心をなやます。むくつけき土大根だに恩をしる心あれば、まして年月の愛をかさねて、いかでか此の宿の千年を守らざらん。いでや世に此の花あ

りとも、此の人あらずばこの色にさかじ。さらば此の人ありとも、此の花ならずば此の色にさかじ。あるじや此のあるじならん、菊や此のあるじならんといふに、あるじは其の譽れを菊に譲り、菊は其の功を主に譲りて、この挨拶の果てしなくば、世にいふ水懸論にして、秋や空しく暮れぬらん。いざ我判者せんといふに、物定め博士にはあらねど、只賦つくりて其の日の笑ひとはなせりけり。

蝶々も土ふまぬ日やきく合はせ

雪 見、賦

月花は其の隔てなきを、雪見はひたぶるに下戸ならぬ物好きならん。さるは香爐峯に簾を捲き、火燧に目ばかり出したる、それも雪見といはばいふべけれど、我が門にはこれをとらず。いざ轉ぶまでと詠めし草鞋の跡を尋ねて、白妙なる夜の目ををかしからんと、誰彼の無差別つれ、いづこはあれど例の新地にぞ人は起き居たらんと、南頭にあゆませ出づるに、町はねぶかの所々かをりて、酒屋鑑鈍の行燈にこそ、まづ目とゞまる夜のさまなれ。郭の門にさしか、れば、おなじ心のうかれ人も見えす。月は師走の空すさまじく互え渡りて、はえあひたる雪も流石によそよりは身にしむ心地して、過ぎし年武陽の其の里にて、誰が送られし下駄の跡と、朝霜を詠み捨てしふること、今我ながらなつかしく、ふと打誦じたるに、見も知らぬをのこの頭巾まぶかく、あたゝかけに木綿羽織にふくだみたる



が、行き過ぎがてに耳とくも聞き留めて、けに此の心ばへの浅からず面白くさふらふと、打ちかへし吟じて、昔伊勢の富倉屋とかいへるに住みける女の、馴染の客の別れを見送りて、雪のあしたに立ちつくして、初雪やわがふところのさむるまでと、口ずさびしをぞ思ひ出で侍る、今こゝらにも、さる情しれる女こそ候はね、口をしくこそと、なれくしけに語りて、やがて立ち別れぬ。いかなる者なりけん名も問はず。さては今宵いづ方にてか酒一つ酌まんといふに、秦皇の雨ならずも、雪に立ちよらば松屋の名もをかしと、つひに此の門に下駄の齒をたきて、

面白の雪の蹴あけや小提灯

旅論

誹諧は人々等草鞋の情を専らにして、旅情をしらぬ人は風雅もいと乏しくや。かはゆき子に旅をさせよとは、風雅に魂入れよとの金言にぞ覺え侍る。誠に花鳥月雪は、うちある様にもありぬべし。戀と旅とに深き哀れは知るならひを、我十六の春やらん、始めて伊勢に詣でて、わづかに六日ばかりの旅行をなせり。其のころ風雅もかつて知らず、今の思出とするにたらず。これより十とせの今にいたり、たゞ官路にのみ往來して、さらに旅だつ事なし。しかるに川風寒み千鳥なくなり歌を唱ふれば、六月の晝中も寒く覺ゆると古人もいへりける。けにや妙句を吟ずれば其の境の思はれ、其の境を

思へば新句を得る。干瓜や汐のひがたの捨小舟とは、いともかしこき御製なり。此の捨小舟、玉敷の庭にある事をきかず、たゞあやしの籜といふものに入れて、葭垣の南うけ、又は井戸屋形の端にさし置きたるをこそみれ。さるを、

御製のめでたきをおもへば、目にみると心に知るの二つならざるいはれならずや。其の雲の上にもちたくも比ふるにあらねど、わが旅情の十が一つもくみしるは、風雅の門を覗くによれり。抑明日の足をたばひて草臥れぬさきに馬にたより、闇けんこの相詞をもて行き過ぎがてに駕籠の直をなし、物を落さず草鞋をぬがさず、茶屋の嫁々泊りの下女にもしこなして物いひたる様、初心の者のうらやまと思へるばかり、旅になれたるわざならん。旅を家とし千里を勝にかけたる者は、晝休みの店に匍匐うても臆ていびきはかくなれ。只年わかき初旅こそ、其のきは物も手につかず、無用の糺ぎぎせるに物すきをつくし、笠草鞋も十日以前より鼻の先に掛け置きて、船川の説法きかじと、伯父の見舞に出ちがひてそはつきあへるは、駒の朝はやりなり。さるを故郷の旅とおもへば、さすがに節分の豆、早船の守とさわがれて、少しは心の覺束なき方もあらん。出で立ちは茶漬にはしらかし、菅笠の緒の取りいそぎたるも、さすがに堺川越ゆる時心細く見かへるは、父母の國をはなる、誠なり。案のごとく歩みつかれては泊りを待ちかね、わらぢの緒は解きたれど、あがりはなに両手をつき、や、膝



頭にて這ひあがり、居風呂に呼びたてらるゝも、中々物うきばかりにて、桶に手をかけぬれども、縁のいと高くおほえて、横さまにまろび込みたれば、四方はせばくて肩はすほめたり。折釘にものかけるなど、つれの男に氣を付けられ、財布の置き所に迷ふ。あるは名物の小刀、仕出しの煙草入賣り、ねぶたき耳にかしがましくて、木枕に横はりてぞ一日のたのしみはおほえぬ。心よき夢は七つの鐘にのすられ、起き出づる牀のうさは、戀の別れにもまさりぬべし。鶏の聲も鳴きわたり馬の鈴音などして、馬士のあくびに横雲はわかるれど、目は猶さめかねて追分の竝松にだきつき、出はなれの橋につまづく。道端の家に松葉ばちくと打ちくべて茶の匀ひかうばしきは、羨ましく心とまるわざなるべし。安倍川の餅は山吹の面影ありて清らかに、岩淵の小豆餅は藤の覺東なきに似よらでいとむくつくなり。大根漬は喰ひ次第として、すべて五錢の定めなるべし。茶屋の田樂は串の數をあらため、酒の直は茶碗に極め置きて、口のかけたるを置くはいとさもしきを、其の缺口口に親指をあてるは、ともにぬからぬ才覺なりけり。出女の上は木導が説につくしぬ。御油赤坂ははでにて名高く、吉田濱松は地味にして艶し。足袋鼻紙の商ひは譯の相紋とするべし。赤前垂紺前だれは所の風にもよらん。片輪車の染め入れも、引くには廻るならひにて、旅客のうさを慰さむ便りとはなれり。假の契りもなほざりならず、草鞋のふしに心をつけ、酌み茶に情をはこぶなど、さすがに涙もよほす人もありなん。五

十三次はさらなり、邊土の旅に猶うき事はありとしるべし。木賃の宿いといふせくて、行水の湯は鍋にてわかす、片破月の蓋をしたれば、藁火の灰飯にまじはりて、喰ふべくもおほえず。さらでも蚊屋の破れたるを、赤子せわりて夢も結ばず。向ひの土白の歌はをさまりて、隣の女夫いさかひを聞く。ふすまはひき立てたれどおくび形にあきたるなど、足疲れては禪かかぬ男に駕籠かかれ、戻り馬にまたがれば新鞍に腰骨をいたむ。うき目つらき目即ち風雅の種にして、言ふにつきず思ふに限りなかるべし。あるはいかつの乗り合ひに興をうしなひ、馬やろの聲は魂を消す。雨の夕は殊に悲しく、月の暁はいつもねぶたし。我かく知りて一座旅情の附け合ひに及ぶ時、眼を塞ぎて爰に來往すれば、箇のうち新規無量の事あり。たとへば今世の軍者としるべし。つひに軍はせざれど、かけ引き備へ立ての師となりて人をも教ふるは、あつばれ軍者なり。我又門を出でずといへども、心をこゝに用ゐる時は、則ち千里の旅客としるべし。此の一段はわれ二十七歳にて書きつけぬ。行く末いかなる旅をして猶奥深き隈はしるとも、此の論は一字をかへじ。蓋し風雅の居ながら物情に互るの謂を、後見人にしらせんとなり。

馬かたの寝たあともありつくづくし

月ひとつほしやくとたびを食



我が紋の夜著にあうたる旅寝かな  
出女の口に蚊のよるくもりかな

賀小女辭

婦に三従の道あるや、其の家に在りて親にしたがふも、父母まめにして揃へばなり。嫁して夫に従ふも、中の睦まじければなり。老いて子に従ふも、よき子をもてばなり。物の三つ揃ふは稀にしてありがたし。鼎の脚も三つ揃へばこそかたぶかね。宮地氏の家に娘を持てり。子の年子の月子の日に生まれたりとぞ。願うてなり難く求めても得まじき不思議なるをや。子はそも十二の始めにありて、而も大黒天のつかはしめ、打出の小槌おもふまゝなる行末の幸を賀して、宮地氏に贈る。これ其の求めなればならし。

花も何みねにみどりの姫小松 峯は三子の隠語なり

鉏花生箴

見ぬ國の上戸が、我が飲み死にたらん所に埋めよと、其の具を常に荷はせてありきたるとか。今日もわするな明日も忘るなど、調市にせわやきて、祝言ぶるまひの門々へも持ちて立たせたらん、物忌する人はさぞ悪み嫌ふらん。これらは鉏の赤烏帽子ながら、わる物ずきとはいふべからん。我がせど

に古き鉏あり。久しく久三が手にも捨てられては、今は玉が齒黒壺にも沈むべき身の果てなるを、取り上げて閑居の花生となしぬ。鉏よ、示して云く、

幾春庭の土をかへして。もえ出づる草の根は断つらめ。  
今より過ぎし罪を悔まば、いけおく花のよはひを守れ。

杓子銘

或人杓子を牀の飾物に物ずきして此の銘をもとむ

爰に千早振お多賀杓子ありて、用るざれば鼠と遊びて味噌桶の陰にかくれ、用るられては虎の勢ひありて牀の上にもほらんとす。さるを杓も摺小木も同じ幸を真似んと思へる、これを世のたとへにして杓子定規とはいふなりけり。

千竿亭記 應下條氏之需

亭に名づくるに千竿を以てする、君嫌ふことなけれ。竹は古人のとりくに愛して、友には今更ふるめかしきも、物は年々にふりゆき、姿は日々にあたらしからんに、まして蕉門の風雅にいはば、句は此の君の空心にもとむべく、てにははふしんの程よからんをそふ。不易は時雨の色もかはらず、流行は折々の風になびきて、爰に東坡も七賢も、いさしらぬ趣ありといふべし。身はよし劍冠の仕



途におきて、理窟の塵に交はるとも、纔かに半日の閑を得る時は、これを五湖の舟棹とも詠め、富春の釣竿ともなし、あるひは竹馬の稚心に戯れ、鳩の杖の老いをもまねびて、誹諧自在の遊びをしれるより、千竿の名の空しからずは、よもつきじく、萬代までの竹の宿りと名におふ鳥も此の枝をたのみて、ゆかしき軒端なるべし。なほ思ふに、此の亭の朝風さやく春も有るべく、雪にをかきき夕もあるべけれど、我はたゞ郭公の告ぐるを待ちて、筍のさかりをこそ訪ふべけれど、たはぶれて筆をとゞめぬ。

野遊集序 應川合氏需一

仁者の山をも逐はず、智者の水をもしたはずして、今年野遊をおもひ立てるは、宜なり武藏野の騷客なればならし。そも歌よむ人のいへるは、其の道を濱の眞砂とは、盡きぬ喩へはさもありぬべし。おなじもののいつも白からんは、目まぎろしき方のいかゞはあるべき。そこを正風の誹諧にいばは、同じ野の草ながら、みどりにもえ錦にそめて、古き物は古き儘にして、其の日其の時に新しき、此の野に心を遊ばしめば、たねはよし武藏野の、これもつきしなき言の葉なるべし。

寐物語後序 應安田氏之需一

瀬橋に扨を擧げて陽關の曲を諷ひ、八橋に餉をひらきてから衣の歌よみしも、同じ旅の露けさながら、それはみぬ國の花鳥をかしからず、これは倭詞にさへられて、にけなきわざは言ひもらすふしくも多かるべし。昔我が翁、川ばたの捨子に物なけくはせ、芋あらふ女をも詠めすてざりしより、世に其の風を學ぶ人、多くは杖笠の姿情をしたひ、紀行まことに牛に汗すべし。それが中にも此の一軸の殊に縦横自在をえて、あるは猿渡の舟に無常を觀じ、志津ヶ嶽に忠義をしたふ。小谷の城の跡をとへば、物覚えよき男出て來りて、昔語に竹杖も朽しつべく、今庄の驛に宿をかれば、笑ひ上手の女ありて、酒あひに草鞋の疲れをわする。たのしみかなしみ見るうちに行きかふ中に、かの金津の里には、いとなまめいたる女はらから住みて、そこの旅ねの枕にぞ、常磐の山の岩つゝじ、忘れがたきかくろへごとも思ひやるに妬かりぬべし。さるを此の作者は、蕉門の誹士とこそ聞くに、千萬言のうち、などや一句の吟もなし。これや無絃の琴を撫したる、誠に琴道の尋常ならず、音立つる調べにも勝れる事を、ひそかに此の寐物語に聞き侍る。

贈五條房畫贊

小松殿の教訓は琵琶法師の曲に残りて聞く人感を起し、白藏主が意見は大藏和泉が家に傳へて、見る者笑ひを催す。誠のあるとあらざるなるべし。我が筆すさびの戲畫ながらも、やう過ぎたらんは正風にや違ふべきと、深切の一棒に始めて目悟めて思ふに、誠にこれより幾ばくの謗りをか遁るべき。



我が爲には千金にもかふまじき賜なるをや。これを贈りてこれを謝す。願はくは五條坊に納めて、昨非を改むるしるしと見給へとなり。

こゝろある人の垣ゆふ野菊かな

蛙歌

かはづく、住吉の浦のみるめのかりならぬ、古今の序にのこされて其の徳のたかきや。

かはづく、廬山の雨のつれづれに、詩人も鼓吹とほめおきて、その聲のたへなるや。

かはづく、木曾路の橋のそれならで、幽谷に虹を吐きて、そのわざのあやしきや。

かはづく、玉川の水にすだき、歌人のことばにめでられて、その名の世々に聞えたるや。

かはづく、朱雀の小田に啼きつれて、逢ふ夜別れの曉に、嬉し悲しと歌はるゝ、其の哀れのわりなきや。

かはづく、深川の古池にさびしき音をきかせて、翁のゆめをさましたる、其の功のうへなきや。

夢人記

旅の住ひは殊にすきまがちなる木枯の窓さし固めて、今宵に世務の妨げなければ、ありし猪の子の餘波とて、人のえさせたる餅糞させなど、其の間のすさびに大根引の發句せんと、例の集ども取りち

らすに、猿蓑の時雨も折からの軒に音なふ。まして炭俵の其の夜の切火桶もこの比にやとゆかしければ、これらを枕として思ひ寝の夢なりけり。忽然と人ありて、世々の誹諧の變化などかたる、其の辯懸河の如し。さて我曰く、今案する所の大根引は、始めて祖翁の季を定めて古人のしらぬ題なれば、こゝろみにこれを以て問はん。季吟老人世にありて、其の時此の句を求めんとせばいかに。夢人言下に吟じていはく、

暮るゝまでやすますひくや大根機

増山井續連珠の趣もこれなり。根機つよきといふ秀句を思ひよりて、あとはそれに叶はせたるまでなり。其の後宗因に變化してはいかに、

大根引きあと黒波とぞなりにける

黒の一字をあたらしみにして、謠の詞を用るたる、これらや談林にあらすといはざるべし。いでや元祿の此の正風世にひらけて、其の門人三千の徒、すべてこれに徳化せられたれど、なほおのがじ、好む所にひかれて風體の癖はわかるべし。晋其角は作にひかれて、其の枝其の葉に至りては、墨子が歎きし白絲も、木の色なく結ほれて、解けがたきなぞくなるべし。強ひてそのかたはしを求めば、

今ぞ小春見よ大ぬさの大根畑



かくもいふべくや。引手あまたの詞をかくして、其餘は風流をかざる。さてや許六がこのむ所はいかに、

手の甲で鼻ぬぐひけり大根引き

惟然坊が手筋はいかに、

大根引きちから出いても哀れなぞ

露川が身のなる果てはいかに、

繼母やたぶさつかんで大根引き

さまざまの風格は得てききぬ。さらに我をたすけて正風不偏の一句を得させよと乞ふに、笑つてこたへず。いざやくとせむる内に、無下にゆり起され驚きてうち寝がへれば、例の折敷をつきすゑたり。誠や五十年の變化をみしも、思へば栗餅の煮ゆる間にてぞありける。

悼反番舎文

無常の風のおどろかすは、目に見えぬ秋をしも待たざりけり。此の水無月の十八日に、便りの人につけて、過ぎし比より痰のなやましく、打籠り侍れば、久しく訪ひ侍らず、いぶかしと思ふらんときこえしに、筆の跡も例の細やかに、物うけにも見えねば、たゞ此の暑さの故にやあらん。庭に秋草

の秋まぢかねて咲き出づるもあれば、これ折りて便りせんと、さしも急がぬ心に、其の日又の日と暮し侍るを、あくるあしたの露と消ゆべしとは、いかに思ひかくべき。世は唯夢と知りながら、かかる夢もならはざりけり。吉田法師がいひけん、繼子立の石も一つうせ二つうせて、今は尾城に蕉門の一老となれば、名望四方に高かりしが、年も古稀には猶三つばかりも足らずや。吟行いまだ杖にもよらず、机に眼鏡も忘れがちなれば、行く末遠くたのみし人々の、いかに翅もがれたる嘆きすらんと、我にてよそも思ひしられぬ。夜活てうくたすばかりの袖いかにと、かの庭の草どもを季札がむかしに手折りて、あすの七日をぞとひ侍りける。

蟲はまた人になかせて夏の草

贈巴水辭

二十五年の勤勞めでたく功なりて、今や耳目肺腸我が物にもらひかへして、みづからの世帯をいなむ。かかる身において、はじめにその心あらざる者なく、巴水がごとく終りをよくするは世に多からず。

鶯や籠をいでて竹に巢ごしらへ

某別墅記



あしたに劍を佩いて營中にひざを屈し、夕にはゆつげ鳥のそら音ははからねば、理窟の關の戸を脱れて、此の閑居に耳をあらふ。そのあるじは茶をこのめども、茶人ならねば利休が寸法にもほだされず。下戸なれども酒をにくまず、しかも淵明が風流をしたふ。さてこそ所も柳町の、その五株のゆかりなるべきにや。みよしのの山のあなたに宿もがなとは、何を思ひの捨言葉ぞや。靜かなる望みはさもあるべきが、雪の朝に豆腐賣りもこす、月の夕は酒をも侘ぶらんを、たゞ此の幽栖の、あやしくも市の中にありて更に車馬の喧をきかず、鹽も油も求むるにやすく、鱧鮓蕎麥切にも自由をえたり。庭は僅かの閑地ながら北に一重の窗を開けば、千町の田づら軒よりつゞきて、田がへす春は蛙の聲近く、詩家の鼓吹も木枕に聞き、早苗とる比は螢のとびちがひて、車胤が夜なべに乏しからず。まして稻葉の雲も色づけば、鴈渡り蟲啼きて、ひとりぞ月はみるべかりけると、寂し好きのかの法師も心とむべき住居なるを、冬はことさらに山々の雪を炎溪に棹をもささず、佐野のわたりに袖もはらはす、火燧に目ばかり出せる詠めは、昔王維が鞆川の別墅もこの物好きはいさ知らざるべし。比は長月なりけり。うらなき舊友みたりよたり、爰に招かれて酒のみ茶呑む事ありしが、折しも十五夜の月いとよく晴れたるに、此の興は忘れ難しなどうかれ騒ぎ、裏なる柴折戸開けて稻葉の露にそほち遊びし序あるじ此の記を記してよと求む。莫逆の間に辭する事をわすれて、かたはらいたき筆とる事にはなりぬ。

ぬ。あなかしこ、知己ならぬ世の人になもらし給ひそ。

またとはん菊より後の根ぶか畑

吾樂庵記 應桑雨ノ需一

獨樂園のぬしは、みづから其の記を書きて人に其の樂しみをしらしめ、吾樂庵のあるじは、我に其の記を求めて其の樂しみを語らず。我こちたくも君に諭さん。世に樂しみのおのが様々ながら、樂しみを求めて樂しみとするものは、哀情これが爲に先だつ。まだき秋風のはやうより言ひしろひて、今年は珍らしき月見せんと催せば、巫山の雲心なく立ち騒ぎて、夕の雨吟魂をなやまし、其の日彼の日は興ある花見せんとさわれば、祈らぬ山おろしはけしく吹きて、賞心霞にへだち易し。況んや娼樓舞筵の樂しみにおける、まして世務仕官の上においてをや。蘆分船のさはりがちにて、難波に恨みのはれま無からん。さるは樂しみを求めて悲しみを求むともいふべし。さればこゝの境にありて、世に平生のたのしみを知らぬ人は、夕にたのしみて朝にたのします、よく樂しみを知らぬ人は何か心のたのしまざらん。もし此の樂しみに乏しからずば、誠に吾樂庵のあるじなるべし。

月花の富や心の藏のかず

桃花石記



一日木同きたり告げて曰く、或人の家の敷に色異なる石の埋もれてある事久し。或は人これを怪しめども、わづかに半面をあらはして出す事いとたやすからねば、さてやみぬとぞ。さるを頃日、其の友鳥真なる者ふかく望みて、あるじに受け得、とかくして掘り出せり。これを石工に見するに驚いて曰く、此の名を桃花石とよぶ。むかし津の國の御影村勝原村より出し、其の性至つて硬し、物に用るに最上とす。然るに今其のもとより絶えて出すことなし、世に稀にして人知らず、最も珍とすべしと。其の主よろこびてこれを彫らしめ、手水を湛ふる具となせり。翁これがために記を書かん事を乞ふ。予曰く誠に既に盡せり、其の外に何をいひてか記を作らん、只其の人にかく傳へよと。木同猶乞うてやまず。予重ねて曰く、昔三人の僧あり、共に不言の行を約す、既にして一人の僧誤ちて言を發す。一僧驚きあわてて云ふ、何ぞ誓ひを敗りて物いひしやと。残りの僧かへりみて曰く、二人は既に行をやぶる。今守る者は我一人なりと。卒に三僧の行ともに破れりとぞ。此の僧の例を思へば、いはずといふもの即ちいふなる時は、我記を作らずといふも亦即ち記を作るといふものならんをや。これを以てかの石に問へ、名にしおふ桃花ものいはぬも、蹊をなすはいふに似たり。石も又うなづきたる例あるをと、笑つて卒にこれを記とす。

定齋號序

大井氏瓦光子は、武門に生まれて其の家の技に拙からず。されど脚に惱める所ありて、驅走に健ならず。かくては弓箭も取り難しとて、すつべき物はとよみけん樂師寺が心をしりて、五斗の米の望みをたち、二三石の奈良茶を甘なひ、常に蕉門の月花に遊ぶ。さりとして熊谷が無常を觀じ、瀧口が戀にも懲りねば、髪をもそらず法衣もまとはず、なほ長羽織に大脇差、野中の清水の昔を殘せば、心知らぬ人にこはがらる、もをかし。靜かなる事に好きならひたることありて、つれづれの手ずさびがてら、今のたつきともなるから、市中に藥をうらす、二頃の田に足もよごさず、朝三暮四に餘りあれば、かの塞翁が馬のためし、幸や不幸ならん、不幸や幸ならん、世に謗る人はいさ、羨む人の多きをみるべし。此のごろ茶話の餘、我に齋號をさだめてよと乞はる。口にまかせて自全齋と名づく。其の心あるにあらず、なきかといはば無きにしもあらじ。

名亭説

青木川の澗にすむ人の、其の居に號あらんことを望む。かの川はもとより鯉の多くすむ所とこそきけ。爰に此の人の逍遙せば、魚の樂しみをよく知るなるべし。されば魚ならずして魚の樂しみをいかでかしらんと難ぜし人は、はた其の知る人の知ることをも、其の人ならねば知らじとぞ。今此の人の知る事を知るも、我ならずして何ぞしらんやと、笑つて卒に知樂舎と書きて贈る。



見えすくや魚のこゝろも水の月

宜白亭記 應山村氏之需

見てこれをいはんとする時は、詞の及ばざる事を苦しみ、見ずしていはんとする者は、心の及ばざらん事を恐る。我聞く、此の亭は領主の閑に耽る所にして、謝氏が履を勞する事二町許り、脩竹深樹の間を開きて、登臨亦類なしか。けに兼好も此の麻衣の木曾にぞまづとて、靜かなる方は求めしをや。されば領主反喬舎に嘯き合ひて、いざや此の亭にさせる名なし、試に予に記をこひて、これが名もそれによらんとたくむ事あり。名を聞きてこそ、佛もおしはからるれ。名はこれが後ならんぞ、殊に難きわざなめりとむつかれど、此の頃そゝのかさるゝ事いと切りなり。こゝに風雅の天眼通なからんやと、潛かに此の亭をはかるに、嶺の尾の上の花に宜しく、月に宜しきより夏に宜しく、名におふ駒ヶ嶽にむかつて、雪に又よろしからざらんや。眼下一條の谷川流れて、岩にくだけてちる浪も、心の塵を洗ふによろしく、持ちて贈るにたへずといひし、雲心なくて吟魂を助くるによろし、かれといひこれといひ、此の亭に宜しからんと、宜白の二字を名として贈る。もし宜しからずといはば、白は物の下地にして、染むればそまる色なるからに、他の宜しきに染めかふべしと、爰に云ひ抜けの詞をまうけて、責めをのがるゝ物ならし。

鶉衣拾遺中

岐岨路紀行 延享二年

乙丑のことし、君にしたがひ奉りて、卯月六日江戸を出でて尾陽にのほる。一年を恙なく歸國のけふを待ちえたるよろこび、人々も賀しあへるに、

卯の花の中にうからぬ首途かな

年々になじみし武府の人々には、淺からず名残をしまるゝもありて、流石に心ひかるゝ別れとりどりなり。

麥の穂の睫もぬれてわかれかな

今年は木曾の山路を分くるなりけり。仕官の身のならはし、心ならず馬槍のいかめしくさゝめきつれたる、野老村童に事問はまほしきも、物言ひ交さんはにけなき様なれば、店の餅酒は見ぬ顔して過ぎ侍る。まことに風雅の本意ならぬもいかゞはせん。こゝの山はとありて、かしの川はかくありてと書き付けたらん、その所見ぬ人はさも覚えぬ物にて、殊に筆の及ぶまじう、何の榮えかあらん。唯



思ひよれる句ども少し筆にとむるのみ。

蕨といへる所に、とばかり書餉と、のへて出づ。

われとむる手もなき夏の蕨かな

此の夜上尾に泊る。

七日

熊谷寺に直實が像などあるよし、路のあわたゞしくて立ちよらず。

熊谷もはては坊主やけしの花

今夜本庄に泊る。

八日

かくいへる所にて、

くらが野ときけばや里も木下闇

けふは過ぐる道すがら、家々の軒に藤をさし侍り、花をもさし葉をもさせり。所の人にきけば佛生會の手向なりと云ふ。故郷にて見馴れぬ事なり。陸奥國に花がつみふく類にやとめづらし。

灌佛もやがてはへとて藤の花

此の夜板鼻にとまる。

九日

碓氷峠を越え侍る。般若石といへる嶮岨をすぎてより、さのみ嶮しからねば歩行にて行く。山谷の桃櫻は夏としもなく、木の芽などうち煙るやうなるもあり。けふ御前に出でたるに、いかにや山はいまだ衣かふべき時節ともなし。花なども春の心地するに、例の口ずさぶ事もあるべし。此の心思ひよれるやと宣はするに、いさ道の苦しい候ひて、むげに申し出づる事も候はずと御いらへ申すに、さりともこゝにはあるべき物をとて、笑はせ給ふ。

綿入を木曾路の夏や花の旅

雛の見ぬ山路の桃は四月かな

などさまふくに句をつくり見るに、よくもあらねば、御前に啓する事もなくてやみぬ。

追分にとまる。

宿の軒端に浅間山ま近く見えて、けふは晴れたる空に、ことに煙のまがふ方なく立ち登る様めづらし。此のあたりはいまだ蚊も出ねば、

蚊にはまだたかぬ煙を浅間山



十日

此の夜和田にとまる。

あるじが子とて惣太郎といへる、十二三なる童の、茶など運びてかしこけなるに、見えわたりたる山を問へば、かれは大田澤これは檳榔山とをしふ。名にしあふ黒髪山にもよらずして、いかで此の名を呼びけんとゆかし。つれづれなるに、おもしろき草紙やある、見せよといへば、主のいかにたくはへ置きけるにか、運氣論といへる醫書を取り出でたり。これはむづかしくてよみ難しといへば、義經記を持ち來れり。こ、かしこ讀みてつかれを紛る、ほど、童はそこに畏まりをれり。

やがてみん幟もちかし武藏坊

十一日

和田峠を徒歩にて越す。こ、はすぐれて高き嶺にて、今すこし上の方に鳩の峯といへるは、日本にならぶ方なく高きよし。されど此の國は地高き故、人はさしも覺えぬとなり。けに雪の多く残りてあり。けふはことに雲深き中をわけ行くに、咫尺もわかぬほどなり。

雲ふみてなほゆかし山郭公

行尊僧正の、花より外にとよみ給ひし、谷の鶯のみけぢかき心地ぞする。かしこへも山里に春は告

ぐると、歌にもよみし雪のうちの夏は知らでやあらん、歌よむ人などは、此の心もて言ひつゞくる節もあるべし。

本山にとまる。

十二日

けふは福島にて、山村氏が亭に入らせたまふ。家居つきくしく、のしめ上下にもてさわぎて、何くれともてなしたてまつる。鯛鱒などの膳にひろごりたる、けふは山家めきたる心地もせず。

俎板のなる日はきかずかんこ鳥

十三日

けふは名におふかけ橋をわたる。

眠るなと馬士はしかれど百合の花

臨川寺にいらせ給ひて、寢覺の牀御覽す。爰に篋士のさまざま自由をえたるを、めづらしき物にめでさせ給ふ。いかばかり吹くととふべき折にもあらず。

ちる物はなくて篋に青あらし

此のあたりを見かへりの里といふなりと、人の指さして教ふ。



又いつか木曾の麻衣あさからぬなごりやあとにみかへりの里

これはもとより歌枕にもあらねど、句のなかりければ、歌よむ人のまねしてかく口ずさむ、いとかたはらいたし。こゝにあやしき翁のこと、世俗にいひつたへて、誠に三歸りの里とかけり。

野尻にとまる。

十四日

大井にとまる。

山中はたえて竹のなき所にて、桶の籬などいふ物も、木にて營めり。こゝの宿にて初めて竹の子を調じて出せるを、いとめづらしくて、

竹の子にあうて家路もほどちかし

十五日

土田にとまる。

あくる日家につき侍る。此の閒句もなし。

熱海紀行

府君の御母公、浴せさせ給はんとて、延享のことし江戸より豆州の熱海といへる所へわたらせ給ふ

御とも仕うまつり、葉月の二十九日江戸を出でて、熱海にいたれるは長月二日なり。

草の葉に月のたびねも二日から

此の里のさま、後に山めぐり、前に海近くして、いさ見ぬ須磨のけしきもかくやあらんと、折から秋の寢覺も心すむ旅寢にはありける。湯本はことに我がやどりの後に近ければ、日夜に六度ばかり、おどろくしくわき出づる音高く、山水浦波にひびきあひてかしましきものから、世の中と渡りくらべて、いかにとかいふべき。綱引き釣する業もあれどおり立ちて己が世のたつきとする者は少なし。耳なれぬ魚の名ども、うづは、ひらこ、はまち、そうだなど、後にはおのづから見おほえて皆いふ。山田色づく比にて、鹿追ふ小屋に引板ひきならすなど、珍らしう哀れなり。鹿の聲は夜もすがら聞えて、夕霧の卷などよむこゝちす。

夜は湯にぬれさす袖を鹿の聲

月は殊に海より出でて山に入る、宵々の詠めえならず、浪よする浦の景色、我がやどりの東面よりもくまなく見えわたれば、あけくれ欄干に打ちもたれて、烏帽子著たらましかば、我を屏風の繪に書くべきを笑ふ。

ほし棹のこれにも月や濡れ浴衣



尾花ちるかたはへりけり浦の波  
打ちまぜて浪にまけたる砦かな  
つり舟や案山子のり行く波の上

あるじの子彦助といふ年十四ばかり、常に來なれて、あまの囀りめきて、所のことなど聞きおほえて語る。かれに案内させてあたりの宮寺など見めぐり、漁家に茶を乞ひ、樵夫にたばこの火かりて、吟歩機を忘る、程いひ捨てたる句ども、例の知る人のもとに書きつけてつかはす。登歩一里ばかり、日金山にのほれば地藏堂あり。駿豆の海山眼下に連なり、景色いふばかりなし。富士は西に限なく、こと山の秋にわかれて雪しろき姿、衣錦尙綱とかいへる、此の山の徳に比すべきにぞ。

四方山のにしきや富士にはづかしき

都松といへるは、染殿の後の跡のしるしなりと、野老のいひ傳へたりと語る。いづれの時にか、栂本紀僧正、染殿の后と密通の事ありとて、さらぬ疑ひの科にてこゝに流されて後失せ給ふ。后は八幡といはひ、紀僧正も宮といはひしが、其の仇名のうきを厭ひて、二つの祠むかしはたがひに相背きてありし。今は八幡は外にうつして、其の謂れも残り侍らす。常に后のみやこを戀ひ給ひしが、あとのしるしの松も都の方へ枝葉さしむかひければ、これを都松といひける。僧正の社のきはに大きな櫻

のありし。中比此のうしろに御殿作りけるが、障りなりとて此の木を伐りしかば、かの松も程なく枯れにけりとぞ。其の木のともに枯れたるちぎりならば、ぬれ衣の名もいかなりけんおぼつかと覺束なし。

松かかれてどの木へ蔦や所がへ

僧正の祠は、ことに大きな椎の木二本のはざまにあり。

御所栂の色にこりてや椎が本

湯前權現に我が疾をいのる。

新蕎麥や疝氣に利生みせたまへ

伊豆權現奉納

海と山兩部に月のくまもなし

業平井は里中にあり。爰の男女の常に水汲みかけうつして、自らおのづか妹背いもせの媒ともなれば、いひならはしたりとぞ。

豆ひきの影や井筒にまめをとこ

平左衛門湯といふあり。平左衛門かひなしとよばれば湧き出づるとて、里の子どもの呼びて旅客に錢などもらふ。



子どもいざよばれ紅葉に立田姫  
重陽にあふ。

選り出して菊をいははんくさ枕

後の月

山の湯も鯺鮓にわくか後の月

木の宮

木の宮も草からさきへ秋くれぬ

暮秋

行く秋の干魚に残る鳴子かな

天神

飛石や梅にまけじと霜の花

眞鶴ヶ崎

まな鶴もみじかき冬の日あしかな

大島は遠くかすかなり。

大しまや片目しぐる、遠目鏡

はつ島はいとちひさき島の向ひに近く浮べり。沖の小島はこれなりといふ。または大島をいへりとも、里人の傳へもまちくなり。

木がらしや片手に撫でる島ひとつ

十月十三日熱海を立たせ給ひて、江府へかへらせ給ふ。道ながら鎌倉に三夜ばかりおはして、寺社古跡ども御覽す。したがひ奉りて、残りなく見めぐるほど、句などいふべき所も多かりけれど、事にまぎれて皆もらしつ。道をまもりの神に申す。

守り給へ神もおたびの道すがら

榎の島

此の神の御手にやにほふびはの花

白菊が淵

十月やけにしら菊の名もむかし

龍穴

此の洞をおもへば神も冬ごもり



鎌倉にて

鎌倉のかまの名さびて枯野かな  
梶原が矢筈もふゆのかゝしかな  
何がしの寺にて、重衡の杯をみる。

さかづきに銚子もそへず寒さかな  
盛久もりひさが首の座

盛久が命や濱のかへり花

鶴ヶ岡八幡

御供して鶴も留守なり神の松

十九日金澤の方にまはらせ給ふ。能見堂のうけんどうといへるより八景を見わたす。奇絶の勝景ことばに述べがたし。折からうちしぐれしに、

八景のうちふたつみつしぐれけり

二十一日武府にかへらせ給ふ。

武藏野紀行

庚申のことし、霜月の初めなりけり。江戸を出でて、清戸きよとといふ所に、旅より旅たびのかりねも十日あまり、母やある子やもてると、あるじに話もやをらなじみそめて、此のあたりの事など尋ねきくに、昔はこゝもとも月の名におふ武藏野なりし由。今は家つらなり田畑と變へんじて、露おく草の名にもあらぬ、大根牛蒡のことにめでたき里なりと語る。

武藏野や今は茶にたく枯尾花

今とても猶端々はしぐには、其の廣き野の迹あとのこれりと聞きて、見にまかりける。案内するをとこの聳つんばなるも、時鳥聞くしるべならねばと、其の日の興にして、龜ヶ谷下富しもとみなどいへる村々を過ぎて、かの野には出でぬ。まことに四方に木竹もなく、草さへも今は霜がはてて、あはれにもものすごき原のさまなり。

武藏野やいつこを草のかけひなた  
そこら見めぐりて、

枯野にもすゝきばかりは薄かな  
くれ行く空もおもひやりて、

武藏野に露ひとつなし冬の月



又の日、野火留といふ所を尋ね侍り。こゝは伊勢物語に、けふはな焼きそとよみし跡なれば、里の名もかくよび侍るとか。業平塚とて寂しきしるしども残れり。歌のこゝろを知らば、枯草に吸ひがらな捨てそとたはむれて、

こもるかと問へば枯野のきりぐす

内津草

内津の里に住める更幽居三止なるをのこ、予が庵に来る毎に、いかでかの山里にも尋ね來よかし、あるじせんとそゝのかす事年あり。されど、今はたゞ老いの鶉の月に浮るゝ心さへものうくて眠りがちなれば、羽をのぶる事もなくて打過ぎしが、此の秋いかなりけん、しきりに山里の景色ゆかしく、ゆくりなく思ひ立ちて彼のがり訪はんと、葉月中の八日丑三つ過ぐる比庵を出でたつ。月くまなくすみ渡りて晝のごとし。也陪なるをのこは、三止にも予にも常にうらなく睦まじければ、よべより庵に來りて此の行に伴へり。櫛次の市中長く過ぎ行くに、千家いねしづまりて物音もなく、往來の人影もたえてなし。今宵は居待月なれど、まつ名のみにてかたぶく影は惜しまずや、いと口をしと思へど、さはれ我も亦かからましかば、かかる清光もいぎたなく知らでぞあらまし。大曾根といへるわたりに至れば、家居どももさま劣りて、鶉の聲戸々にきこえたり。

おもひいづる詩あり鶉なく里の月

かくいはばそは何の詩ぞと、おほめく人もあらんかし。

片耳にかたかは町のむしの聲

や、人家をはなれて、野山のけしき月の光に見渡す、いとあはれなり。山田川かち川をわたるほど夜猶ふかし。此の川々はかちわたりなり。

八月の川かさゝぎの橋もなし

従者ども、あなつめたなど笑ひのゝしる聲に、我は駕籠よりさしのぞきて、

かち人の蹴あけや駕籠に露時雨

ゆくゝ月もかたぶき過ぎて、夜も明けなんとす。

籠からしらむ夜あけや蕎麥畠

鳥居松といふ所にて、割籠やうのもの取う出てよとていこふ。

夜と晝の目は色かへて鳥居松

これより杖曳きてかちより行く。大泉寺といふ所にいたる。僅かに一里ばかりを歩いて、老いの足まだき困じにたり。又駕籠にのる。



山がらの出て又籠にもどりけり  
道の側に尻ひやし地蔵といへるあり。靈驗あるとて人の信仰するとぞ。  
尻ひやし地蔵はこゝにいつまでもしりやけ猿のこゝろではなし  
坂下、明智、西尾などいふ里々を経つゝ行く。

駕籠たてるところ ぐや 蓼の花

むかうより來れる人の、うちそばみて笠ぬぎたるを見れば、内津にすめる試夕なりけり。かれは彼の里に茶をひさぐ者にて、庵へも疎からず訪ひて年頃相知れり。兼てけふ我がとふべきあらまし聞えて、三止が語らひて出せるならし。とばかり行きて、三止も出むかへり。こゝの名をとへば鞍骨といふ由、むくつけき名のいかなる故ならん。

けふ爰へたづね來んとはくらほねやくらけの骨にあふ心地する

と戯れて打ちつれゆく。此のわたりより山路や、さかしく、峯々左右に近くそびえ、大きな岩ども道も狭にそばだち横はりて、決々たる溪泉いたる處にきく。

名もにたり 葛の細道 うつゝ、山

晝ばかり内津につく。此の所のさま、妙見宮の山うちかこみ、杉の木立物すごくしけりて、麓につ

きづきしき家居つらなれり。

山は 杉さとも 新酒に 一つかね

あるじ 懇にもてなし、湯あみ物くひて心落ちるたり。

夢もみじ鹿きくまでは 臂まくら

あるじ、

まつ名もはての 十九夜の月

と脇してその末々もありつ。美濃なる虎溪といへる所ながめよしと、早うより聞きわたりつれば、行かばやのこゝろありけれど、其のあくる日は先つとまりて、何くれと語りなぐさむ。亭のまへとばかり庭ありて、いと閒近く山さし覆へり。其の閒に細谷川ながれて、水の音岩にたえず。此の上にしわたして造れる小亭あり。枕流亭と額を掲げたり。此の名は孫楚が意ならんと、

口すゝぐ石もあたり にきりぐす

此の日妙見宮に詣つ。舎よりはいと近し。猶奥の院へ參らんといふに、こよなう嶮しき道なめり。老いの歩みの及ぶまじければ、只やみねと人々いふ。されど阮籍が窮途にこそとまりめと笑ひて登る。左右大きな杉どもの枝さしかはして日の影ももれず、細き道の昔なめらかに石高し。右の方に



天狗岩といへる、世にしらす大きな巖そばだてり。只一つの山とこそ見知らるれ。かかる怪しき岩は他の國にもをさくしなすとぞ。

這ひのほる葛もなやむや天狗岩

次第に道さかしく、岩を攀ぢ木の根にすがりて、七町ばかり登りて、少し足とゞまる所に休らふ。こゝにあふけばかうくしき拜殿みえたり。夫れまでは十間ばかり、ことに危き坂あり。社は猶奥まりてます由。これまで登りしだにも、我にはこちたきわざなり。今はふようなりとて、爰にぬかづきて歸る。

杉ふかしかたじけなさに袖の露

けに本州にかかる宮居ありと知らざりけり。若き人々はふりはへてもまうてぬべき靈地ならし。其のあくる日より雨ふり出でて、二十四日まで晴れやらす。其の程の事ども筆にまかせて書きあつむ。一日枕流臺にて誹諧す。餘興に戯れて、

こゝに住みて善正日夜きく水はひんがしならで西にながる、

あるじが常の名長谷川善正といへばかくいへるならし。明智にすむ醫師羽白なるもの尋ぬ來りて初めてあふ。

掘つて來て草に藥の名をとはん

と書きてあたふ。此の人も誹諧を好めり。

試夕が家は更幽居にさし向へり。一日こゝにも遊ぶに、あるじ一句を請へり。なりはひいと豊かなる男なれば、

あたゝかな家あり山は秋ながら

こゝはひたぶるの片山里とこそ思ひしか。更幽居は更にもいはず、試夕があるじまうけの様すら、すべてよづきて、調度などもいと清らに、心つかひたる振舞どもけしうはあらず、よろづ目やすかりけり。

府下萬松寺に、前にいまそかりし綱國和尚退隱して、此の里見性寺といへるに假に住み給へり。久しくしれる中らひなれば、雨の隙に訪ひて、とばかり語りて歸りし後に寄せらる。

深山客稀有孤猿

豈謂高軒過遠村

韻を賡いで謝す。

煨芋無下收寒涕力止

肯令玉帶鎖空門

鶉衣拾遺中



逢<sup>レ</sup>君<sup>ニ</sup>猶<sup>モ</sup>憶<sup>フ</sup>重遊<sup>ノ</sup>約 嶺上雲多<sup>ク</sup>恐<sup>ル</sup>鎖<sup>シ</sup>門<sup>ヲ</sup>

ある夕あるじ酒す、むとて、こゆるぎのいそぎありくまゝに、鉢に杜若<sup>かきつはた</sup>をつくりて水をもり、肴<sup>たく</sup>調<sup>てう</sup>じて出せり。見れば茗荷<sup>みょうが</sup>の子をもて巧みに花の形をまねびたり。

八月のはちに咲いたるかきつばたさてはみやうがに物わすれ花若<sup>わか</sup>き男<sup>おとこ</sup>の、酔ひのあまりに、かうやうの細工に思ひ附きけるにや。柿にて猿を造らんとて、手をあやまち血流れたり。人々騒<sup>さわ</sup>ぎてやみたりと聞きて戯る。

こりはててもう此の趣向手がきれたいらざる柿のへたの細工にといふに、例のどよみになりぬ。

あるじ墨竹の一幅をとう出て贊<sup>さん</sup>を求む。唐さまの筆なれば、さればみたる發<sup>はく</sup>句<sup>く</sup>はいかゝならんと、一絶をつくりて、

不<sup>レ</sup>與<sup>ニ</sup>梅<sup>ニ</sup>柳<sup>ニ</sup>交<sup>ハ</sup> 心似<sup>ク</sup>吟<sup>ニ</sup>厭<sup>ニ</sup>塵<sup>ニ</sup>累<sup>ニ</sup>

露<sup>ハ</sup>深<sup>シ</sup>夜<sup>ノ</sup>雨<sup>ノ</sup>餘<sup>リ</sup> 何<sup>ゾ</sup>借<sup>ニ</sup>二<sup>ヒ</sup>妃<sup>ヲ</sup>涙<sup>ヲ</sup>

と書きてあたふ。

雨にたれこめて日をふるまゝに、試夕がもとに信濃なる新蕎麥をえたり。これ一種<sup>ひんしゆ</sup>にてもてなさん

と招くに任せて二度<sup>たひ</sup>此の家に遊ぶ。其の日はしばし雨小止<sup>や</sup>みて、後の山近く、猿の聲<sup>こゑ</sup>しばく聞ゆ。過ぎし日枕流臺のうへの山遙かなる梢に、猿の餌<sup>え</sup>を求めて木づたふを、端<sup>はし</sup>居<sup>ゐ</sup>ながらめづらしとて見たりしが、けふは雲樹ふかくかくろへて姿はみえず。

新蕎麥に猿きく山の夕かな

と書きてあるじにとむ。

二十五日からうじて雨晴れぬ。けふは虎溪<sup>こけい</sup>見んとて出でたつ。這<sup>は</sup>ひわたるほどと思ひしも、二里ばかり隔てりとぞ。道の具ども、例のあるじの心いれて、こまやかにまうけぬ。猶<sup>なほ</sup>案内<sup>ない</sup>がてらとて伴ひ行く。里<sup>さと</sup>の數越えて、ゆく／＼いと苦しき坂一つ登り下りて、やをら到り著きぬ。彼の境は、兼て聞きわたりしにも似ず、寺のけはひいたう古<sup>ふる</sup>りたるとは見ゆるものから、住みなせる僧の心からにや、哀れにたふとき方たえてなし。柱格子など、順禮<sup>じゆんらい</sup>といへるものならひに、あさましきまで物書きけがしたり。庭のさま、人の手してつくりなせるものの荒れたるなめり。とさまかうさまに装<sup>まは</sup>へるも大どかならず、いみじう心劣<sup>こころおと</sup>りして、人はとまれ我は目もとまらず。門の前小川清く流れ、岩そぼだち木立ものふりたる隈々<sup>くまぐま</sup>、されど見所あり。庭などもたゞかく自<sup>おの</sup>らにてあらまほし。庭のかたはらに座禪石とよべる高き岩あり。これにのほれば遠近の望みよし。



座禪にも目はまよふ山の秋色

歸るさの道すがらもいふべき事なし。すべて此の頃の明けくれに、鹿の聲は聞かざりけり。我が耳のうとき故かとうたがふに、いまだ時早くして啼かずとぞ。されど若かりし昔、所々の旅寢に聞き馴れれば、こたみ聞きもらしぬるも本意なき事ともおもはず。

三止はもとより年頃なづきひて、共に心をも知りかはしぬ。母なるものも、過ぎし年、目のいたはりありて醫をもとめにとて、府下にいでしよすがに相知れり。家刀自さへに、此の程の日かすにうちなれて、萬まめやかに、あかなきさまにもてなさるれば、老いの心慰みて、あやにくの長雨にふりこめられぬれど、つれづれわぶる事もなく、あからさまと思ひしも、かゝなべて七日の假寢をぞ重ねぬる。故郷に待つ人もたる身にしもあらねど、かからば斧の柄も朽しぬべし、明日は歸らんといふに、あるじ猶轄を投ぐるの意ありて、今日日はと切にとむ。

も 一 り ん み よ と 木 槿 の 芥 かな  
いな船のいなにもあらず、心弱くて又とゞまりつ。

追はれねばたつ事しらす秋の蠅

これにて一卷の名残をつらぬ。すべてしづけき日ぐらしには、誹諧して遊びつる巻々もつもりぬ。

あるじはもとより、也陪、わが従者の文樵なども、時々句どもありつれど、事繁くて洩らしぬ。詩ひとつ作りてあるじに寄す。

張北山林遠<sub>シ</sub>府城<sub>ニ</sub>

相逢<sub>ウテ</sub>多日雅談<sub>清シ</sub>

秋深<sub>クシテ</sub>老樹添<sub>ハハ</sub>相色<sub>ヲ</sub>

夜靜<sub>ニシテ</sub>流泉疑<sub>フ</sub>雨聲<sub>ヲ</sub>

驛馬稀<sub>ニ</sub>傳<sub>フ</sub>都下<sub>ノ</sub>信

啼猿<sub>ニ</sub>常<sub>ニ</sub>動<sub>ク</sub>客中<sub>ノ</sub>情

纜<sub>ヲ</sub>看<sub>ル</sub>鄰店商家<sub>ノ</sub>在<sub>ル</sub>コトヲ

豈<sub>ヒ</sub>比<sub>ヒ</sub>塵<sub>ノ</sub>衢<sub>ノ</sub>争<sub>フ</sub>利名<sub>ヲ</sub>

こゝに来てわがのがれにしかくれ家は猶世にちかきほどぞ知る、  
あくる日は妙見寺にともなはる。あるじの僧、我がたしめる事聞き知りて、例の河漏子にてもてなされぬ。

鐘にちる葉や山寺の秋のくれ

あるじの求めにかく言ひてとゞめぬ。

二十七日には、つとめて内津を出でて歸る。あるじも猶府下まで送らんとてともなひ出づ。行廚の事などいかめしくかまへて、世を捨て人に似けなきほどなり。又例のたはぶれて、  
老武者の我もながるのさね盛がさいとう辨當までせわになる



いでや身の一たび病づきてより、つやく世をはかなみ、たゞかけろふの夕をまつ心地しつれば、たまはりし祿をも返し奉り、蓬がもとに隠れしは、二十年の昔なりけり。其の爲ならぬ物から、とみに仕への途をのがれ、おのづから名利にかゝらふ心の疎くなりもてゆくや、中々命つれなきたづきとはなりけん。稀てふ齡もかぞへ過ぎて、此の秋かかる山ぶみをさへ思ひたちし、我が身よくしれる我が心のあやしきまでになん。さるにても、ふたゞび來べき境ならねば、しかすがに名残おほえて、跡の山々かへりみがちなり。

鷹に似ず跡にこゝろの山わかれ

左を右に眺めはかはれども、かへさはみなもと見し野山なり。ゆきくゝてかち川にいたる。こたみは水かさまさりたれば、駕ひでて此のまゝ渡りがたしとており立ちぬ。従者どもの負はんといふに、否、そは中々危からん、けふはいたうも寒からざれば、たゞ手を扶けよ、かちわたりせん。老いたれども猶かばかりは難からじと、細脛いと高くかゝけたり。若えたるふるまひの我ながらをかし。老いの浪そふ影もはづかし、淺くとも渡らずとこそ丈山翁はよまれしを。

紙衣きぬ秋なればこそ河渡り

それより大曾根にしばしやすらひて、夕日うすづくほど、わが桑梓にはかへり著きぬ。

思ひいづるきのふはけふの夢なれやしづつ、の山のかりねも

歸りて後さうくしきすさびに、いひ捨て書きすてたる事ども集めつゝりて更幽居に贈る。字のたがひ、假名の書き誤れる物も少なからじ。かたはらいたき詩歌のまねびし、さるがひ歌のはしたなき反古どものかたほなるなど、物狂ひして書いまじへたる老いのまさな事、蹴蹴とだにいふべからず、只これ搏黍の一帖なり。愛屋上の鳥に及ぶとか、我をいつくしむ心にあやまちて、燕石を十襲せし宋人の愚にゆめ倣ふことなかれ。もとより人の知るものならねど、四知ありといへば、天わらひ神笑はん。見果てなばとみにひき破りて、我がため恥をとむべからず。

安永二年巳九月

七十二翁狂夫也有



鶉衣拾遺下

記餘白俚歌

相知る人のがり、梅雨晴の空もとめて問ふこと侍り。そのあるじ、誹諧も少し知りて、ざれごとよ  
 くいふ者なり。そこなる机のもとに引きちらしたる反古あり。何ごととへば、此の盆あそびに、例の  
 子供の踊るべきうたの唱歌作れと、人にそのかされて書きたるなめり。されど又心におもふことあ  
 りて、世にいださずなりぬ。只やがて引きやり捨つるものなりといふ。とりて見れば、實に聞きしら  
 ぬ様のこともあり。中にをかしくもつゞけたるかなと覺ゆるふしくもあり。われ誹諧して彼に負く  
 べきと思はぬを、かかる物つくれといはんに、いかでこれほどに言ひ出づべき。世はさまざまの才あ  
 る物かなと、をしき様に思へるまゝ、只こなたにて引きやり捨てん。我に得させよといひて取りかへ  
 りつ。此の端の餘白あるに任せて、潛かにかきとめおきぬ。題號をいはば、さと茶の湯などこそいは  
 めと、其の人いへりけり。

世の中に勝れて花はよしの山、紅葉は龍田茶は宇治の、都の辰巳それならで、さとは都の未申、

數寄とは誰か名に立てて、濃茶の色の深みどり、松の位にくらべては、圍ひといふは低けれど、  
 情はおなじ牀かざり、かざらぬ誠あかし合ふ、間夫や人目の中くゞり、なかだちいらぬ口切の、  
 後は浮名の下地窗、影もる月のさしつけて、それといはねど世の人の、口に猿戸も立てられぬ、  
 あうて立つ名が立つ名の内か、逢はでこがる、池田炭、炭を雪かというたが無理か、其の白炭の  
 雪と見て、雪にはあらぬあらぬ灰、くだけて物をおもふ夜は、夢さへろくにみづこほし、水さす  
 人にふかくくと、のるは三つ羽のかるはずみ、輕いはいやと飛石の、すわらぬ胸のうら表、ふく  
 ささばけぬ心から、きけば思はくちがひだな、逢うてどうしてかう箱の、柄杓の竹は直なれど、  
 そちは茶杓のゆがみ文字、口舌にとけし茶せんがみ、にくいあたまの鉢たゞき、へうたんならぬ  
 炭とりの、ふくべも花は夕顔の、それはなつめのたそがれに、五條わたりや四疊半、よしや氣長  
 に待合はせ、茶うすのめぐる月と日も、あらば花咲く花生に、離れぬ火ばしよりそひて、憂さも  
 はなしのはつむかし、昔ばなしのぢいばと、なるまで釜の中さめず、縁はくさりの末長く、千  
 代萬代もへ。

是れを近世女てまへとなづけ、もてはやす。猶後にいたりて、翁は女手前にもとづき書かれしなど、人の思  
 はんも煩はしければ、そのことわりを書い付けおく。



辻君 ウケの韵

月にうかる、鳥も多きに いかで夜鷹と浮名にはたつ。  
袖はやなぎの人を招ぎて 枕の草にむしやとびかふ。  
待ちて相圖のうたはうたへど あうて別れの文はおくらす。  
暁かへるそでのしろさは 馬場の夜寒の霜やおくらむ。

茄子 エケの韵

むらさきの名にめでて まづちぎるせどのはたけ。  
柿にへたはまなぶとも 瓜のつるにはならざれ。  
つけものの夏のあした 鳴焼の秋のゆふべ。  
獻だてのしなぐは 豆腐にも恥ぢざらめ。

風鈴 ヲコの韵

はるは山寺ならでも。 ちとつらし此のかねよ。  
なる日はおのづから 花も風のふくものを。

翁像贊

富貴誠に浮雲 滑稽極めて正風  
道のほとりの木槿を吟じて ひそかに人の教へあり  
窓のまへに芭蕉を栽ゑて 永くおのれが名とす  
此の翁たれか畫く 梅瘦せて笑ひ松老いて高し  
笠を携へて旅の情やます 筆をとりて贊する辭なし

又 ウケの韵

誹諧に故人なしといひける。 いひける翁故人となりぬ。  
それより故人幾故人、 只此の故人を慕ふことやます。

又 イキの韵

詩家に李白うして謫仙とよび。 誹門に桃青うして祖翁と稱べり。  
かれも三石の奈良茶を味はば、 さらに百杯の酒にかふべし。

翁題笠圖贊

題笠旅装吟 尋花狂客心 豈無芳野句  
可識不言深



人 日 ウクの韵

畑も雪間に若がへりつゝ。 去年の案山子も老いや忘れむ。  
なづな七草七日つみては、 はなのなの字の猶ぞ待たる。

蛤 アカの韵

もとの身の雀ならば。 竹の枝にもなれじや。  
今は桑名に焼かれて、 松かさのおもしろさ。

寄ニ團扇戀 ウクの韵

えにしも夏の手には觸れつゝ。 いか言葉の晝そらごとなる。  
一夜あふぎの名にあやからば、 とけて心のうちはかたらむ。

手習ひの師に書いてあたへし聯句

硯の海は明けくれに湛へて 桃の日の汐干もなく  
筆の林は夜日に茂りて 霜の後に落葉も見ず

大匏銘

賢人の耳に鳴らねば 風の吹く日もすてられじ

鉢扣も手に餘れば 雪の降る夜も静かなり

鯉の贊

及ばぬ瀧に思ひをかけて。 戀をすればや鯉と呼ぶらめ。  
のほれば落つる悔みある世に 淵に住む身を安きとはしれ。

布袋贊

飾る錦の世はうらやまず。 布の袋の名ともなりぬる。  
梅は肥えたと我を笑はば 我は瘦せたと梅を笑はむ。

廻文

さくみつゝつまで待てまつつゝみ草

誹諧歌并辯

煤はきの日とて立てたる居風呂によごれぬ旦那先へ入りけり  
娑婆にては善知鳥安方と見えしも、冥途にては怪鳥となり、よのつねの米屋味噌屋も節季には懸乞  
となりて罪人を責めはたる、世の有様を詠めて、あら拾ひ坊主の口ずさびける。  
たつた今乞食しかりし門口へ直にむくいて懸乞がくる



あてなしにつかひく〜て節季には錢は無いとて留守つかひけり

誹諧歌は古今集にいへる誹諧體にもあらず。かの集にあるは歌人の誹諧歌にて、誹諧師の歌にはあらず。狂歌とは混すべからず。狂歌は全體の趣向を求めず、其の物そのことにすがりて、他のもの名をかり秀句をとりなし、言葉をもぢりて全く言句をかしみを求む。誹諧歌は趣向一つを立てて、其のことをすらく〜といひ流して、言葉の縁字義の理窟は曾てとらず。されば右に云ふ二首、はじめのは全く誹諧歌にして、後のは狂歌といふにのがれず、二つの境こゝをもつて知るべし。

いろは歌

いろはの四十七字を以て歌をつくり、六林子より寄せらる。それに效ひて三首つくり、返しなごらに贈る。

和六林子雅伯題誹諧所寄歌

芭蕉翁 待得ヌル 宜モ世ニ色音遣ララス  
ばせをおきなまぢえぬる むべもよにいろねのこらす  
和歌ヤ詩作り故有レト 誘ヒ受ケテ民褒メ云フ  
わかやしつくりゆゑあれと さそひうけてたみほめるふ

雪中寄懷

今雪ヨリ明ケ初ムル 誰裁エヌ花總バテ咲ク  
いまゆきよりあけそむる たれうゑぬはなすべてさく

得勻ハネド 珍ラシ  
えにほわねどるやめづらし

爐ノ火ヲ 圍ミセチニ思フ  
ろのひをかこみせちにおもふ

題早梅

室頼マデ宿笑ミツル 逸早モ咲ケ兄ト云フ  
むろたのまでよべゑみつる いちはやもさけあにとるふ  
是レヲ褒メ得ソ折リセネ 雪乍ラ主ハ鶯  
これをほめえそおりせね ゆきなごらぬしわうぐひす  
冬一夜六林子ノ歌ヲ見キ實ニ智恵ヤ才有レラハコソ得ハセメ學ヘルモ手ヲ束  
ふゆひとよろくりむしのうたをみきけにちゑやさいあれらはこそえわせめまなへるもておつか  
ねぬ 蘇す水

國の名二十をかくしてよみける二首

伊豆伊賀 近江 陸奥 美濃 阿波 出羽 加賀 壹岐 甲斐  
いついかであふ道あらむつひに身のあはではいかゞいきがひもなし  
秋も最中とひ來よあはれ月いく夜野と川近く山遠き里

國の名十づゝ入れて戀の心を

伊豆 三河 伊勢 紀伊 加賀 美濃 信濃 丹後 伊豫 阿波  
いづみ川いせきくにかゝる浪のうし名のたたむ戀よあはずも  
旅のこゝろを

漕ぎ出でばいつあはむ身の跡を遠み浪や眞白におきつ島々  
祝のこゝろを



佐渡能登土佐讀岐美濃加賀近江伯耆隱岐肥

鳥の名十

鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉鶉

獸の名十

麋麋豕豕鼠鼠鹿鹿猪猪牛牛熊熊狐狐猫猫狗狗

草の名十

葛葛麥麥萱萱葎葎葎葎葎葎葎葎葎葎葎葎葎葎

庚寅六十九歳元日試筆

東風回暖入入嶺阿阿老老對對鶯花鶯花樂若何樂若何

六十餘齡今得今得九九人生誰道誰道古來多古來多

惜しむとも急ぐともなき年暮れて待たず厭はぬ春はきにけり

初日の外面を見渡せば、けさは農夫も鋤鋤を休めて、惠慶の葎の宿とよまれし秋ならねども、春はきにけり。

田島に人こそ見えね年の市

夜半まで空にまどひし足も皆かしこまりてや雜煮喰ふらん

八體付方

聞耳たつる門の人音

其人ふぐ汁の鍋を片手に提けながら

其場片側はくら屋も交る輿力町

時分夜なかかと思へば星の明けかゝり

時節延びくた祭の空も五月晴

天相一しきり雨やら松の嵐やら

親相勘當の跡にまよひの親ごゝろ

梯木曾もまたのがれて見れば浮世なり

丈草文、跋

傘と剃刀をさへもたぬ身の上かなと、よしなき貧乏自慢がかうじて、明日ある人のもとへ齋によばれ候に、鬚は汁をすゝる邪魔になり、雨は衣の袖しほらんことを思ふに、ひしと困りはて申候まゝ、御無心申入候。よくくとぎすまして一丁、たとへ破れかゝりても一本、御かし可被下候。委しく



は参り候て可申述候。御内儀御息女御心得可被下候。と申候て存出候。先夕はゆるくと語候て満悦申候以上。

正月八日

丈草

堀彦左衛門様

此の文體に日附を見れば

髭の邪魔いかにきのふの齋粥

蘿隱戲書

寫海洲子文

このごろ反古を引破る中に、海洲子が文一章あり。此の人柳川氏、文才ありて詩を能くし書を能くす。誹諧又幽趣を得たり。惜しむべし、五十のころ世をさりぬ。遺文いづれにか散りうせけん。今わづかに此の一章を見て捨つるに忍びず、又残すべき方もなし。しばらく我が文章の中にとめて、追慕を慰む助けとす。

壽光先生傳 壽光は鏡也

壽光先生もと山中を出で人間に交はり、つねに一人臺上に坐して黙爾たり。人來て笑へば笑ひ、

怒れば怒れり、只人に順へり、これを莫逆とやいはん。しかれども美人に愛せられ、醜き人にくまれ、や、もすれば地に抛たる、のことあるこそはいぶかしけれ。予久しく先生を拜せず、早に起き往きて拜す。けに先生や婀娜たる美少年なりし。秋の霜一度下り、蘭艾ともにくだけ、しら髪兩鬢に垂れ、笑へる齒あばらとなれり。かく零悴せる事の須臾なるはいかんぞや。先生黙爾たり。それ人は一世にありて名こそ遂ぐべきに、一臺の上に逼々としてかかる姿となりたり。たとへ鶴書のいたる事ありとも、今はた用には立たじ。素餐の責めはいかんぞや。先生黙爾たり。予、涙を含んでつらく先生を見れば、先生も涙を含んでつらく我を臨めり。長物語に朝飯の時過ぎて去らんとすれば、去らんとせり。立ち歸れば立ち歸り、しばし別れをしみ、ともに黙爾としてわかれぬ。其の後古かね店を見れば、先生猶黙爾として居れり。また其の後神路山に登りて見れば、先生猶また黙爾として居れり。先生のご事は測るべからず。

悼伯母辭

これは歌物語の言葉をかきて、誹文にあらずといぶかるべきが、只これも筆に任せし一體のすさびなり。

こはそもはかなき世なりけり。過ぎしはわづかに二十日あまり、武藏に旅立ちする御いとま申さん



とて訪ひまゐらせしに、例のまめやかにもてなさせ給ひ、のどやかに御物語ありしが、おまへなる瓶に花ども多くさせ置き給ひしにつけて、過ぎし冬さくらのさし木といふこと人にならひて、庭にさせ侍りしに、まことにあやまたずなんと啓し侍りつれば、嬉しきこと聞きつる物かな。ことしの冬必ずさせせてん。其のすべきやう教へてのたまはせしほどに、かかる御別れあるべしとおほしかくべきや。なほ何くれと語りつゞけさせ給ふついでに、此の頃おほしよれることあり。下にあやしの耕す男かきて、上つかたに雲雀の高く上りたるさま畫きて、それに發句してえさせよとありしに、いとちたくこそ、すゝろなる筆のいかゞ及びがたくや侍らん。今は旅のいそぎにしづ心なく侍れば、さるべき發句も、とみには思ひよりがたくなん。さるにても、吾妻に下り侍りて、いかで念じてまほならずとも書きとゝのへて奉りてんと、うけがひまゐらせし、其のいとまもなく、今はた悔しき數とはなりぬ。我が母上を始めて、女の御はらから九所までおはしつ。皆にけなからぬよすが定まらせ給ひながら、うち續きて世を早う去り給ひ、今は二方ばかりぞ残りとゞまり給へば、母上うせさせ給ひし後は、いとゞ御かたみとも見奉れば、なほざりに過ぎこしほどもとりかへさまほしう、今は身のおほやけに暇なきものから、いかで疎からずつかへ奉る折もがなと、行末遠くおもひてしを、かかるはかなき便りききける心の、いくたびも只夢かとぞたどられ侍る。彼ののたまはせし空の雲雀も、雲

がくれ給ふべきはかなきさとしにやとさへ、のこるかたなく思ひつゞくるまゝに、

なき魂やたづねて雲になく雲雀

鳥獸魚蟲の掟

世上困窮につき、今般鳥獸竝に蟲のともがらへ一統の簡畧申付候。其の外行作悪しき品相改め申渡し候。左の條々急度相守るべき事。

- 一 蟬すゝしの羽織を著候事、過分の至りに候。向後は横麻一羽ぬきに仕替へ申すべき事。
- 一 松蟲鈴蟲のともがら、籠のうちにて砂糖水を好み、奢りのさたに候。向後は野山の通り、露ばかりにて精出しなき申すべき事。
- 一 蟻塔を組み候事、自身の功を以て建立いたし候儀はくるしからず候。寄進奉加等頼み候儀は一切いたすまじく候。且又熊野へまゐり候に、大勢連にて無益の事候。已後は二三人づゝひま次第に参り申すべき事。

一 螢夜中火を燈し飛行の事、町々家込みの所は火のもと氣遣はしく候へば、遠慮いたすべく候。池川田地等の水邊はくるしからず候事。

一 蜘蛛御領地の内においてみだりに網をはり、諸蟲を捕る事不届の至りに候。以後は其の場所相應の



運上さし上げ申すべき事。

但し蠅とり蜘蛛は運上に不<sub>レ</sub>及事。

一 蜜蜂の小便高直に賣り候よし、諸方の痛みになりよろしからず候。向後は世間一統に只米六升ほどの積りを以て相はらひ申すべき事。

一 蟻娘己が短慮の我慢にまかせ、斧を以て諸蟲を殺害いたし不届千萬に候。向後はむね打ちをも一切いたすまじき事。

一金魚のともがら近年ことに華美に相なり候。向後金銀の飾り一せついたすまじく候。

但し赤塗に砂箔等まではくるしからず候。

一 蛤春暖のころ己が快晴にほこり、樓閣を建て候事甚だ奢りのさたに相きこえ候。向後は右體の普請一切無用に候。もし居室の柱損じ候とも根つぎいたし用る申すべき事。

一 蝙蝠晝は橋下にかくれ居、夜々人里村里へ徘徊いたし候こと其の意を得ず候。鳥獸のあらためこれある節は、何方へも申しぬけ役義等相つとめず候よし、不届の至りに候。向後は立合ひの支配をうけ兩役屹度つとめ申すべき事。

一 音喚鳥猥りに五色の錦繡を著いたし候事甚だ奢りに候。向後は何色にても一色に相改め、勿論縫箔

等一切いたすまじき事。

一 白鳥白雀等此の間は相見え候。先年は頭ばかり白きさへ稀なる事に候ところ、近年猥りに相なり宜しからず候。以後曾て異相の體いたすまじき事。

一 鼠嫁入の體ことくしく相聞え候。二十日鼠に五升樽もたせ候こと過分の至りに候。以後は提錫にて相濟まし申すべく候。振舞の上、天井にて躍など催し騒がしく候。人々妨げに相ならず候様、あき二階、縁の下等にて、盆の中躍り候ことくるしからず候。

一 狸々つねに大酒を好み、亂舞の樂奢りの事に候。潯陽の江邊にて持出しぶるまひ向後一切無用たるべく候。據なき義にて會合これあり候とも、一種一獻に限るべく候。其の酒は其の最寄のうけ酒屋にて小買いたし申すべき事。

一 狸ふぐりを四疊半にのぼし、茶を立て人を迷はし、諸道具に金銀を費さしむる事よろしからず候。右の業相止め申すべく候。自分の樂しみとして、はら鼓打ち候事はくるしからず候。

一 馬の太鼓の儀、往還問屋前を憚らず不禮の至りに候。畢竟これも榮耀の事に候へば、以後は相止め申すべく候。

但し廢にては苦しからず候へども、火の見時の太鼓にさし合ひ申さざる様相慎み申すべき事。



一青鬼赤鬼の輩、虎の皮の禪致すまじく候。當時病犬の皮澤山に候へば、早速仕替へ申すべく候。但し右は家持頭分の鬼の事に候。借屋住召仕の鬼どもは、古き桐油合羽の切れを腰に巻き用る申すべき事。

右の條々かたく相守り申すべく候。忽に心得違ひこれあるやからこれあるにおいては、急度咎め申し付くべく候。品により蟻の町代組頭まで越度たるべく候。

寶曆九卯七月

玉壺軒記 應菴原楚巾老人之需

何ぞ必ずしも深山の中蒿廬の下のみならんやと、むかし朝廷に俗を避けたるも、耳目はおのづから世につかはれもしつらん。この市中に一つの隠家ありて、豆腐賣はよく知れども、とりあけ婆々はさらにしらす。つきんくしき住居のほか、九尺にたらぬ別室ことにおもしろう設け、前に泉石の目を娛しましむるも、今の主翁のたぐみなせるにはあらず。もと住みし人の残し置ける、月と花とは今も閑かにして、今は猶ふるびたり。人の多きを深山木にしてよみしも此の邊にや。伐木丁々たるは桶屋のたぐくなり。鳴子のからくとなるは菓子屋の背戸か。田家山莊の風流こゝに備はるのみならず、四方は城下の豊かなれば、朧夜の笛も雨の日の三味線も、近からぬ方に音なひて、我が身はよそに聞

き流せば、樵歌牧笛にもさびしきは劣るまじや。そもや主翁の身のうへ安きこと、仕官は若きに盡したれば、北山移文の悪口にもあふべからず。色は老いをしりて遠ざけ、酒は淵明が腸もなければ、こればかりは誹諧師のをりくく來りて戸棚をさがすは、積りの外なるべし。されば此の軒に玉壺の二字を題せられたるは、一大事のはんじ物にして、町代宿老も分別の頭を傾け、老功の道具屋もこの壺の目利は及ばすとや。實にも酒にあらず茶にあらず、まして鹽辛砂糖つけにもあらず。さては仙術に天地をちめし市中の壺かと、潜かに内證を聞き合はすれば、これはむづかしき古みにはあらで、ただ此の亭の入口はなほだ窄けれども、内に閑地の廣きかたち、尋常の壺に似たればいふなりとぞ。さてこそ所々の入札も、彼の上人の狛犬はまりとなりて、まことに分別は一生の損なりと、世にほださるる理窟人は、此の壺の底ぬけて、此の曉にも夢はさむべきにぞ。

松操庵記

かくいへる閑居は、塵境にありながら庭に千章の松陰ふかく、寂寞山中に彷彿たり。あるじはその閑にふけりて、もつばら煎茶に遊べりとぞ。そこに安置せる大悲閣あり。さぞな靈驗もあらたならめど、まづたゞ此の庭の景色を添ふるぞ尊かりける。さればしめちが原の御うたも、こゝに五文字を吟すれば、たゞ茶のめとこそ聞のなれ。あるじこゝに餘白を設けて、一句を請うてやまず。君見すや、



かの御製に、枯れたる木にも花さかせんとは、もとより木々は歳寒の操に其の用なきに似たれども、よし一鼎の煎茶とても、その光にもれざらめやと、半掃庵の狂夫、筆にまかせて求めをふさぐ。

落葉にもたかば花香の誓ひあり

瓢長者傳

巴陵舎に一つの瓢あり、其のかたちをかく曲れり。曲る物は全きとか。久しく爰に仕へて許由が憎みをかうぶらず、鉢扣にも奪はれず、あるじも中流に舟を失はねど、常に愛して千金の價に思へりとぞ。むかし不之庵の翁は、これを褒稱して長者瓢の三字を銘せしより、頓て此の名を打ちかへしてみづから瓢長者とは名乗りけるなり。長者の自稱必ずしも其の故のみにもあらず。此の瓢に不思議ありて、酒を出す事綿々として止まらず。これ仙術にも幻術にもあらず、たゞ一婢に阮宣が杖を持たせて、一度市中に往來すれば、朝に尻の軽しとみえしも、忽然と夕に満てり。かかれば宇治の物語にいへる、姥が米は盡くる期ありとも、此の酒は盡くる日あるべからず。むべなり長者の號ある事。あるじ我に一語を求む。卒爾に記して贈ることしかり。

名亭説

前に洋々たる長良川流れて、向ひには巍々たる稻葉山たてり。まことにあるじの素絃子なるかな。

亭に名付くるに魏洋の二字を贈る。山間の月、江上の風、取れども禁ぜず、用るて盡きざらんには、何ぞ必ずしも知音をとはん。

悼六々庵辭

桃は盛りに梅は散り過ぐる此の曉を世の見果てにして、六々庵のぬし身まかりぬ。當時焦門に俊良の才、世こぞりて惜しむはさらなり。我には殊に二十年の推敲を問ひし親しみのみならず、かの父貞靜は季吟老人に道を學びて、其の世のすき人は名もよく知れりとぞ。我が祖父の野雙といひし、又同じ門下にかすまへられ、互に顔知れるほどはしらず。多く撰集には名をならべたれば、いでそよ篋の一よならぬ契りと、つねに其のことを言ひかはしつれば、猶一入の袖はぬらしけるなり。西行法師の願ひ足れる、其のきさらぎの花のかけに、望月の頃は過しぬれど、春は追手も西にふきて、彼の岸の船路も便りあしからじと、いさ見ぬ世のたのみに、今は此の別れを慰むばかりなり。

蝶鳥もいざ涅槃會の啼きついで

與自若庵文

ものの足る日も自若たり、物たらぬ日も自若たり。顔子が一瓢の花垣根に白くさきて、其のたのしみをあらためず。善哉馬山子、予に庵號もとむるに、自若の二字をおくりて、清貧の生涯を稱す。も



し千兩のこがねを拾はば、それもまた自若たらん。

夕がほに あすの米あり袋あり

名亭辭

いざさらば、此の居をさして三富亭と呼ばん。とは何をかさすや。只物のよき程なればなり。人或は三つの心を深めて衣食住と判ぜんにそれもよし。雪月花と數へんにも將羨まるべき住居なるべし。

花と見せ綿とも見せて雪の宿

長榮寺碑

何にかも人は忍ばんなき跡の石にはかなき名はとむとも

辭世

病來辭世路 久シク隱カク舞津マヅ農 八十餘年夢 驚オドロク回ル曉寺鐘

きのふけふと思ひつゝ、經し身の程ぞ中々ながき世はかぞへぬる

短夜やわれにはながきゆめ覺めぬ

鶉

衣終

小革籠

横井也 有



小 革 籠

下手談義の迹を追うて、單朴翁が書き聚めたる、雜長持の落ち零れを、一つ拾ひ入れたる小革籠。これ鶉の眞似する鴉にはあらず。鴉は鴉の生質ひまれつき、ふつゝ、かなる聲に夜明けを啼いて、若しも目をさます一婦もあらば、心中の繪雙紙、益なきには似ざらんと。

明和二年酉の春、尾州蓬北の愛老對梅窗の下に自序す。



## 小 革 籠

五重の天守、雲に聳え、金の鯨、日に輝きて、朝鮮人さへ馬をとめ、日本一よかくとゆびさして通りたる事、謙でない本國の繁昌、枇杷橋より宮まで、三里の間、市町軒をつらね、行程三箇の津に續きたる大都會、外にあらば、いうて見給へ。都といへど海なくして、生きた魚は見馴れず。江戸は水あしくして酒造らず。それらをも一つに兼ねたる自由、尤も外より取り集めて、京も江戸も、事は缺かねども、直に其の地に産するは風味格別、色をも香をも知る人はしるべし。第一米穀天下に勝れ、薪は堀川に入船を争ひ、木曾の材木白鳥に山なし、鹽は南野に焼き出し、陶は瀬戸より運ぶ。川魚は西より集まり、山の物は東北より入る。かかる目出たき城下に遊女町のなきは、玉に疵と浮氣人の残念がれど、それ又有り難き國制、百何十年、終にそれなくて外に曠しきそれもなし。もとより押出して惡所と號すれば、佛なぶりの祖父婆々も後世善處とこそ願へ、惡處は願ふ所にあらず、また言ひたき自慢もあれど、さのみはと口をしめたる袋町筋に、大黒屋二俵衛とて、商賣は搗米や、一に俵積みかさねて、二に賑やかな見せ付き、三人の娘を持ちて、世渡りに賢く、明暮の確ふむ足に、



味噌とやら、次第に内證も暖かになり、空は彌生の節句過ぎ、近き頃聞けば、いかなる好事か、千もとの櫻を移し植ゑて、八事を春の山となしけるとかや。それ終に見ぬも癡人一年の氣延しにと、娘共いざなひて、たま／＼の花見の趣向、これは米櫃から駒が出たと、供の調市も我を折るばかり、朝はとうから出たれども、めづらしき道艸に時をうつし、山へ著いたは晝の晝、こゝかしこと梢を詠むれば、まだ咲かぬもあり、散るもあり、盛りは前なる娘共ながら、往來の酔人の惡口聞くもよしなし。辨當はいかにも靜かなる所もやと、人の往かぬ脇道へ傳ひ入れば、竹一村の奥、世にすねたらしき庵あり。門の明きたるを幸ひに内に入つて、様子を見れば、主は五十餘り、こゝら兀けたる天窓つき、僧でもなく、俗でもなく、夢借舎と額を懸けたる世を遁れし男とは見えたり。下女も調市もなき自炊の埃端、きれいなる住居、一段の所と立入りて、こゝしばらく借りて休みたき由をいへば、こゝろよく挨拶して隨分靜かなる庵、そこに一間もあれば、ゆるりと辨當でもお使ひめされ、茶を焚き付けて進らすべしとの言葉嬉しく、一間に上れば、牀かけて八疊ばかり。牀には白隠の達磨の自畫贊、巴靜巴蔭が評點の古巻ども、腰張に張り交ぜたるは、しやつも古き誹諧すきと見えたり。佛らしき物もなければ、海老かまほこの辨當も遠慮なくひらきて、さゝえの酒、主にもすゝむればくつろぎて飲みかはし、いかにも氣さくなる老人、娘どもをも愛想らしく、譽めなぐり、今名古屋はさぞ賑はしく、開

帳芝居も候はん。我等も一昨年ごろ藤塚町に、紫の由縁たづねて、ひさ／＼にて城下の逗留、大須の芝居めづらしく見物いたせしに、山本京四郎が忠臣藏、夥しき大入り。けに人の性は善なりとや、忠臣義人の思ひ入れ、斯くまで人の悦ぶからは、見る者の心も改まり、己等が今まで主人への心入れ、宿夕も肩もめといはれさうなる機を見て、小便にはづしたるが、かうではなかつたものをとて、奉公ぶりの變りたる者もあるべきに、其の氣付のなさうなるは淺ましき人情。しからば心にうつらぬかと思へば、おさん茂兵衛や、お染久松などの狂言見ては、おのが心に好きたることとて、其の眞似がしたうなり、主の内儀に鞘當てし、若い手代に寄り付きたがる、たゞ勸惡の端のみなれば、娘子達は芝居なども見ぬがよさうなものでござると、今世にはやらぬ料簡をいへば、中々二儀衛はこんな理窟すき、されば／＼我等も御覽の通り、澤山な娘共もござれば、彼等がゆく末の行跡も親心の案じ過し、常々教訓らしき事は申せど、口重くして言ひ取り難く、喩へに引くべき故事故語もしらねば、心に思ふた許り。けふは幸ひの御教訓、娘共もおもしろさうに聞いてるれば、猶も話して聞かせたまへとのぞめば、庵主も興に乗じ、そも／＼近年は野にも山にも、密夫の沙汰ども聞くにうるさく、問ふにうたてし。昔はたま／＼密通して、其の事のあらはるれば、女はことに恥を知りて、或は身を投げ首縊りたるためしどもありしを、近年は人中で、おならひつたる程にも思はず、頼かい拭うて居る有



様。薄皮な生質も、面の皮は随分厚し。これは世上に澤山なる故、ある習ひとおほえたるなるべし。密夫の不届は勿論なれど、第一女に教へなく、心に守る性根なき故なり。總じて密夫は其の家へ親しき者のする事なれば、もしいひかけてはねつけられ、亭主にそれを告げられては、もう其の家へは面目なく、不通となる大事なれば、何程の徒者<sup>いたづらもの</sup>にても卒爾に他の女房に不義を言ひかくるものには非ず。先づ徐々<sup>そくそく</sup>と其の女の心立てを探りて、或は人の居らぬ時近く居寄り、淫<sup>たは</sup>れたる世間話をして見たり、怪我のふりにて手をさはらせ、膝をあたらせて試みるに、心の正しき女房なれば、人のなき時に側へ寄り付かず、たはれた話には眞顔になつて、手がさはれば驚き、膝があたれば逃げ退くやうなれば、こやつ心の正しきものはものぞと氣遣うて、もうそれまでにて止むるものなり。人の妻たる者は、此の身持が鏡でござる。それを自墮落なる女房なれば、たはれた話にけた／＼とわらひ、手があたりても逃げず、膝がさはりても笑うて居るゆゑ、もうたわいなしのべら作ぞと呑み込んで、文をつけたり、不義を言ひかくるなり。徒男<sup>いたづらをとこ</sup>がこれを名付けて、通り者ぢやの、粹とやらのと嬉しがる。それは傾城や茶屋女の上の事、人の妻として通り者の粹のと見立てらるゝは大きな恥。通り者とは悪性者の唐名と職源抄にもあるとやら、サア悪性な内儀と見ると、且那寺の和尚も、方便品をときかけ、出入りの醫者も、通氣散を盛つて見る、師匠の座頭も戀慕ながしを弾きかける、みな此方<sup>こち</sup>のそなへに

よるなり。それも又流石に悪事は悪事と知るゆゑ、我が娘をもつては此の子徒者になれとはおもはず、身持よかれと育つれども、何がお袋の杓子<sup>やしこ</sup>内心皇、定規がゆがんで居るから、ろくな娘にはならぬはず。子供々々とおもふうちに、いつか隣の多葉粉屋とふみの取り遣りが始まりて、親の目をぬすむうちは跡がへらぬで氣はつかねど、銀をぬすんで驅落の段には、損をかけるやら、歎きをかけるやら、世上にあるを御覽なされ。まことに忠臣は孝子の門より出で、心中は斯うした家から出る事と、古人の言葉あたれるかな。我が身一つの事にあらず、一家の亂れとなります。世に翫ぶ淨瑠璃本をも御覽なされ、大經師昔曆、槍の權三かさね帷子<sup>かたびら</sup>など、むかしありたる密夫事を作るも、果ては御仕置の咎をあらはし、本の夫に斬られたる願<sup>ねがひ</sup>以此功德の體を見せたるは、見やうに依つては、此の様なものも憤みになればなるべし。其の外ねから作り事の趣向を立てるには、或は姫君のいひ名つけある人を嫌ひ、外に男をこしらへる色事までは作れども、しかと夫にそうて居る女房の密夫する色事は大かた作らぬ事と見ゆる。狂言とても其の通り、これは作者の心持、末々までも崩れぬ様にしたし。筑摩祭の鍋の数も、夫を定めぬ女の事、陸奥<sup>むちのく</sup>の錦木も主ある門にたてるではなし。又は男の身の上も、密夫は男の第一の憤みと心得て貰ひたし。ころび合ひの夫婦でも本妻に定めてからは、又他の人ともころび合はんとはゆめ／＼思ひせらるまじ、その筋に憤みあれば輕き捧手<sup>ほて</sup>振<sup>ぶ</sup>にても、人品格別に見ゆ



るぞかし。又女の髪衣裳付き、何ほど端手にしてもこゝろさへ正しければくるしからずとはいひがたし。人の内心を察するは、第一其の形容から目利する。たとへば芝居を御覽あれ、顔に紅粉をぬり、大格子のひら袖著て、切幕からによつと出ると、これかたきやくの悪人形、わるものぞとは直に見ゆる。又鬢をそゝくらかし、片前下りに著物きて、ぬきれ手して出ると、はや阿房の道外方なりとは、子供もたちまちしる事なり。しかればかたちの端手なるは、徒者さぞあらんと、心ある人に見下されんは、まことに恥かしき事にあらずや。女は男とは違ひて、一度夫を定めてからは、殺されても他の男に通じぬ事は、人たる道の法にして、人と畜生との違ひ目はこれなり。むかし江戸に居て人のはなしに聞いたる事あり、實悔といふ貴き老僧のかたられしは、すべて祈禱といふものは、叶はぬはずのことをいのればしるしはなけれど、其の事、品によりてはなるほど祈禱はきく事なり。それにつきある女の祈禱を頼まれて、慥かにしるしあるべしとおもふに、すこしもきゝめなきをあやしめて、其の女の様子を聞けば、夫ありながら、をりゝ密夫の名に立ちし者なりと聞きて、さてはと人の祈禱をやめ、これを畜生にして祈禱しなければ忽ち験を得たり、淺ましき事と語られしとぞ。しかれば身持の畜生なれば、人の目にこそ人と見ゆれど、佛神の御手前にては、いつかはや畜類にしてありと見えたり。此の世からさへ斯くあれば後の世は猶思ひやるべし。猫は傾城の生まれ替りど、世の諺にもいは

れあり。哀れ今世には人と見えても、佛神の御目からは、また夫が參詣したよ、猫めはにやんの願ひに來たぞと、さぞ澤山に御覽あるべし。あさましともながしくとも申す許りなし。これほど澤山なる密夫なれども、絶えて久しく御刑罰なきは、みなく下にて事を治め、訴へて出る者なければ、上より鑿つての御詮議はなきゆるなり。それゆる大罪なる事を知らぬ者も多かるべし。此の事御仕置のだんになつては、土器野に西に向つて、木の上に二人の立ち姿わかれを告ぐると、憎まれし鴉めが意趣がへし、鼈甲の櫛の跡に遠慮なくとまつて、なるかならぬは目元で知れると、まづ一番に目玉からしてやり、情なく露顯すれば、これほどの目にあふことぞといふ罪のおもきを合點したがよし。近年靜觀坊が下手談義、單朴翁が雜長持、輕口のなぐさみ本に仕立て、結構なる教訓あらゆる世間の人情を盡せしが、女子の訓へ未だこまやかならずと、日頃思ふ事はでふくれし腹、けふはよき相手のましゝて、けつそりとへらしました。御聽聞の御腹もさぞあらん。長物語に長い日もはや七ツさがり、庵には冷飯の貯へもなければ、せめても一つお茶なりとも立たんとすれば、二俵衛おさへて、あり難いお話、これ何よりの御馳走、娘共も退屈なく聞き入りたる顔付うれし。名古屋へ御出での節はかならずく御立ち寄り、女房共へも御逢ひ下され。けふの御禮を申させたし。畜生氣には案じなき生まれ付きを御目にかけう。おさらばさらばと暇乞ひして立ち出でける。こゝに哀れをとゞめしは



辨當持の調市なり。勝手の間、肘枕二寐入り程やつて起きたれど、まだいつ立たれさうにもなし。窓元見れば彼岸の、する残りの艾のあるを幸ひに、且那の草履の裏に、たばこ呑む顔で、一火見しらせたれど、尊程もきかぬこそ道理なれ。さめやらぬ目に取り違へ、庵主が草履の裏を焦せし。庵主はなしの内に、も、尻して我等常々小便には堅いが、何としてやら、けふはしきりに立ちたうなりまして、二三度も裏へ立ちしが、この灸穴のまちがひとは、後にぞおもひ知られたり。

## 小革籠附録

葉だれ雪竹の寝るほど降つて、此のゆふぐれの寂しさ、友まつは雪の名のみならず、問ふ人もなと心に祈るしるしありてか、神風や伊勢町にすむ、名も古市といふ、座頭の坊、御見舞と申し上ぐる聲めづらし。此の雪の日に何としてか人戀しきをりから、わたりに船、碇おろして話せとあれば、私もけふは大隙、只今家路へ歸るとて、御門前にて下駄をきらし、三助に鼻緒を頼んで御臺所まで立ち寄りし所、御伽にならば夜ともにおはなし申し上げうと、這奴も大臣の付いた顔付。幸ひく、さて珍らしい世間の沙汰もなきか。いや無きにしもあらず、まづは諷か真かはいさ白壁町に黒猫が化けた

はなし。四五日まへに六句の質屋が、鉢坊主にかたられた物語。造子町にて比丘尼が孕んだの、恵比須町で女を釣つたのと、たいもなき事に尾緒をつけて、世上の話のうけ賣りは、ことごとく終りて、これまでなりや妙恵上人、さて頃日ある御屋敷へ娘御さまの御稽古に参りました。御亭主は江戸の留守、奥様もお寂しき、ねぐら鳥のまつ蟲のと、四ツ五ツ後さらへも濟みて、少しは退屈欠伸交りの、うつら／＼と弾きかける、沖の石の折こそあれ、そのかたさは煮てもやいても、桑名町の伯父御様御見まひといふより、座敷のおさわぎ。三味線も追つ取り置いて、それ御通り道の手盥とれ、めじろの籠は縁へ出せ、猫は部屋に繋いでおけ、役者評判をそこらへ隠せ、火燧に飯櫃は有つても大事な物ぞと、唯一人の下知に依つて、茶ばかりの御客なれども、大きにえかへり、奥様も自身に白柄の帯取り廻し、長刀ほどの御働き、私も掃き出さるゝ覺悟して、たばこ入れを探り廻し、半疊ばかり覚えすしされば、古市は此の間勝手へ入つて居てゆると休息あれとのこと、畏まつて御次へ立ち、蹴つまづいたはさいはひの、火鉢はこゝに須磨の浦、おはしたの明石にきせるを借り出し、鼻の先あぶりながら、近き後のふすまごしに、伯父御のおはなし面白う承りました。二十ばかりと十六七の御息方並べての話しながらの御教訓。かねの灰吹き、カチン／＼と三ツ四ツ鳴つたが、御談義の序開き。さて皆丈夫につき揃うて、よい若い者になられた、親父が江戸へ立つまへにわけて、子供も背尺が延



びました、能い方へも悪い方へも人品の定まる頃。留守に我儘が心もとない。隨分行跡に意見して、よい方へ仕入れて下されと、くれぐれ頼まれた。きけば武藝も精が出る、學問もしやるけな、重疊重疊。若い者はひまながわるい。身が樂なと無分別が出て博奕を打つたり、娘を盗んで走るなどはいふにも及ばぬこと。よもやそれ程の阿房はせられまいが、三味線けいこにか、つて居るの、淨瑠璃を習ふのと、それがかうじては歌舞伎狂言の真似。女形に手が荒れては、おかるの役がつとまらぬと、槍や劍術をやめるやうになるはさたの限り。たゞし武藝も隨分上手になるはよいが、其の藝を用るる所と、用るぬ場を辨へるが肝要。士は義理を體として、業は體から遣ふ事、例へば熊坂の長範が大長刀を振り廻し、十人前の働きしても、其の事が道に叶はねば座頭の八人藝よりは劣り、嗣信が八鳥で能登殿にはかすり手も負ほせず、たつた一矢で射落されたも、忠義に勇み、矢面をも恐れず、眞先に進んだる心の剛、忠義の守りを賞翫して、今も世に譽めてないか。義に叶ひ手柄もすれば鬼に鐵棒。大工に才槌、いはう様もなけれど、勝負は時の運にもより、きられて死んでも義に叶はば譽むべし。首尾よう斬つても、不義ならば憎むべし。それをよい歳な衆も悪うすれば喧嘩が有つたの、人が斬られたのといふを聞いては、己が同流ぢやが、大袈裟によう斬つた、閑遊信高は見事に斬るのと其の事の理非は柵へ打上けて、ねから吟味せず、理非はどうあれ、斬りさへすれば士さむらひのやうに覺えて、評

判するは大きに心得違ひ、それを若い衆が羨んでは、どうぞ斬る事がでかして、斬つて見たいと、鐔元くつろけて、斬りよささうな相手を心掛けて歩行あゆくは、病犬よりは怖こはいもの、其の義か非かを辨へるは學問でおじやる。扱殺生の遊山のとて、つれを誘さそふも、大勢はかならず御無用、つれとなるからは、いか様いかさまのことが、其の連衆つれしゅうに出來ても、其の時は見捨てられず、乗りかけてはづすは非義なり、臆病なり。大勢の中には大酒醉狂の人や、一徹無法の仁もあるもの、必ず連れの多いを頼みに、つねよりも氣がさになつて、さしてもない事に人を打擲したり、女中の連れに無禮を仕掛けたりする事がありたがる、それに事が起つては、おもはぬ巻き添へにあうて名をうたはれたりしぬる事も、立退たちひくことも有つて、一生を誤るは歎かほしいことぞ。事に臨みてはづすは臆病、事のできぬうちに、其の連れを逃れるは臆病ではさら／＼なく、慎みといふものぞ。此のさかひを合點めされ。又おの／＼の身分で全體は袴もかけて、供も一人はつれるが、本の格式なれども、常にそれもならぬ、綿服で無僕でも歩行あゆくかるゝであらう。その體を他から見では、陪臣やら足輕やら、同じ者に見ゆる故、人がそれ程に道もよけず、無禮な事もあるもの、さては知行取りの諸士とは、見知らぬ故ぞと料簡し、輕いものこちからも道を譲り、容すがたに格式をやつした時は、心にも格式を引きさけて歩行あゆくけば、ふんだり斬つたりする程の無禮はないかと思はるゝ。其の證據には、陪臣や足輕とても魂のあるものもあれど、



彼等が終に無禮者として斬つた沙汰も聞き及ばぬ。又供連れたり絹きらの人が、人を斬つたためしも大方なし。これは其の分限の心であるゆゑ、こちらから咎める事もなく、先も諸士と見ゆる人には、無禮もせぬなるべし。又四十も越えたる人も、あまり人を斬らぬものなり。歳のふけたる人とて、人がさはらぬはずもなければ、りやうけん分別もあるゆゑならん。それとて腰ぬけの名もたたず。然ればやつして歩行く時は、たとへ鑑こじりにあたつても、棒の先がさはつても兎相で當つたものなりと、すこしの事は、其の分にして恥辱にもなるべからず。若しも黙つて通られぬ程ならば、たゞ咎めずに叱つて通るがよい、叱るといふは無禮者めとか、兎相な奴めとかいへばそれぎりで事がすむ。似た様な事で、これやなぜ當つたと聲かけるは咎めるといふもの。わざとあたる道理もなければ、なぜと問はでも知れた事、あてたさに當てましたと答へる者も有るべからず。そこで侘びて誤れば、一段の首尾なれども、先の奴も問はれては、言ひわけ心に、いやこちらからは當てませぬといふから、もうむづかし、それならよいとは仕まはれず、とらへて天窗あたまをはるか、蹴倒して踏むか、むねうちを喰はせるか、斬つて退けねば仕まひが付かず。一言の句作りでいかい骨ををらねばならぬ。或はせりふの定まりに、眼ぬけめといふ流りゅうもあるが、これらもいらぬ悪對あくたいなり。先の奴も兎相はそさうと驚けども、眼は抜けず、一粒ふたつぶあるから、それが蟲に障さばつて、得手に口答へもするものぞ。さうなると斬らねばならぬは

士の習ひなり。同じくはそんな事の出来ぬ様に、するが慎みなり。亂世戰場では、我に意趣もなく、別に過ちもなき者どもも、敵と名が付くと用捨はない、斬つて／＼きりまくる勿論の事なれど、かかる治世の平生には一旦の怒り、さしてもない事に、ひと一人の命を我が手にかけて取るといふは不仁の至り、むごらしい事、親もあるべし、妻子もあるべし、その歎き、その難儀、それゆゑ乞食になる者もあるべければ、まことに不便ふびんの事にあらずや。上からの御目には、蠅一匹程の輕き者が、罪過を犯しても、随分糺明詮議の上ならでは、死刑にはおこなはれず。されば殺さで叶はぬ道理に逼つての上にも殺しもすべし。ことに百姓や町人や中間とても、一本さいたは竹篋たけかやら、赤いわしやら、無刀同然、無刀の者を相手にして、日比稽古に鞘ばなれの手の内、修練をもつて、斬つてすてるは大根切るも同然、いと易き事なれば、手柄にもなるべからず。輕き者は討ち捨て斬りどく、我が腹へは病の來ぬ、高をく、つて、てんがうにも、斬つたかと下心をうたがはる、も恥かし。これらをよく合點しやれ。かやうにいへば、若い衆の勇氣をくじくやうなれども、ゆめ／＼左様にはあらず。勇氣は随分養ひ立て、何ぞ御用に立たうとおもひ、義に於ては、弓箭八幡一寸もおくれじと、常心掛けるがまことの武士といふものぢやぞ。扱々長い物がたり、皆々退屈であらう。ちと宅へも近日おじやれ。長いはなしはやめて、鑑飴でも振舞はう。皆々さらば／＼とて立たれたる伯父御のおしめし、いかさ



ま尤もな事らしう、感心が勝をくゞりましたと、あぢな所へ故事を入れて、富樓那ふるなにあらぬ古市が不辯舌ながら、聞きはつりの嘶せもをかしく、反古のうらに書き留めぬ。理窟詰めに、たけき武士の心をもなぐさめ、目の見えぬ座頭もあはれと思はせたる、伯父はいかなる人にか、彼の白藏主の例もあれば、もしは尾でもなかつたか。おかへりに赤犬あかめが見送つてほえたは合點がまいらぬと、彌藏があやしみけるとぞ。

小革籠終

風來六々部集  
後前篇

風來山人



風來六々部集序

時に遇はざれば孔子もお茶を引きたまひ、管仲が鞍替へも能い所へ乗り込めば、桓公の揚げ詰めと成つて遂に齊國のおいらんとなる。予が先師風來山人、宿昔青雲の梯を踏みはづして、天竺浪人と成りしより、滄浪の水糝に濁醪の世の酔ひをさまし、吐き散らしたる酒反吐は、酔うた浮世に廻さるゝ、酔潰共に目を明す、太平樂の巻物を、纜かの本に書きつゝめ、世に行はるゝもの六卷あり。頃日書林太平館、其の小冊にして讀み足らず、且ちよほくさと數多きは、回覽するの煩はしきを厭ひ、六部を合して二卷となし、これを號けて風來六々部集と題す。全く残口が無駄書きを八部せんとするには非ず、唯これ會刻の六部に御放施。

于時安永九年五月十八日、下界隠士天竺老人頼みもせぬに筆を採る。